

雨谷二菜庵著

有明月

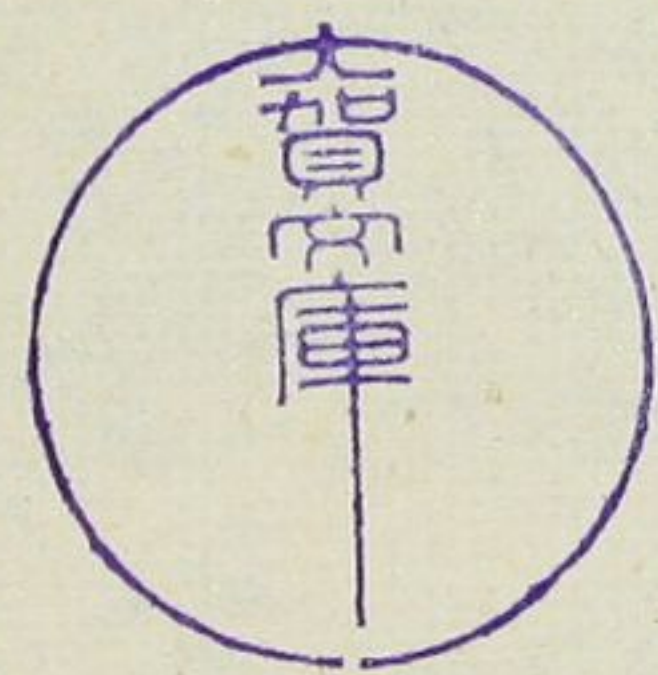
鳴阜書院



有
明
月

鳴臯書院出版







御印

自序

佛説に斫婆迦といへるがあり、廣百論に順世外道と見えたるは是れなるべし、吾れ此徒の如く單に感智をのみ信ずるものに非ず、去れど欣生樂世の思相似たる處あり、吾れ亦婆迦なるならんや、詩を作つて至らず、文を學んで達せず無我にして行き、無心にして止る、毀譽褒貶は數のみ、喜怒哀樂は情のみ、求むる處無く、與ふる處無し、死せるが如くにして生き、悲めるが如くにして樂む今十餘年來書き蒐めたる藻汐草、焼く可きを焼かずして市に鬻ぐものは、唯鳴皇院主の志に任ずる也矣

揃衣着て姿をはづる花見かぢ

春四月滿都の土女花に任ふの時
夏木こは獨すねたる坂の備居に

雨谷 一葉庵

目次

◎江東の春……………	一頁	◎涼と暑……………	一〇六頁
◎水戸觀梅記……………	八頁	◎孟蘭盆會……………	一一三頁
◎大林の桃林……………	三二頁	◎百花園と萩寺……………	一二六頁
◎汐干と摘草……………	四四頁	◎つゞれの袖……………	一二九頁
◎花季俳觀……………	四六頁	◎俳諧柚味噌……………	一三一頁
◎堀切の花菖蒲……………	四九頁	◎山路の秋……………	一三四頁
◎春晚首夏……………	五三頁	◎冬の山里……………	一三九頁
◎首夏の旅……………	五五頁	◎警女行……………	一四三頁
◎歸省土産……………	六九頁	◎雨露覺帖……………	一四七頁
◎綠蔭紅燈……………	九八頁	◎子守唄……………	一六三頁
◎一掬の涼味……………	一〇一頁	◎送年の詞……………	一六五頁

◎身の成る果……………一六九頁
◎静御前……………一七八頁
◎衣通姫……………一八四頁
◎女囚人……………一九三頁
◎日本海の日……………一九七頁
◎夜蒸瀧……………二〇三頁
◎磯家の月……………二八四頁
◎心如雲……………二四八頁
◎女大鼻岩……………二五八頁
◎瓜の花……………二七二頁
◎海月の骨……………二八六頁

◎遅櫻……………三一〇頁
◎片夕暮……………三四頁
◎晨の露……………三七三頁
◎秋の雨……………三七八頁
◎峠の宿……………三八三頁
◎父子……………三九四頁

目次終

有明月



雨谷一菜庵著

◎江東の春

寒明けて今日春立つと聞くからに、先づ心動きて、雨あがりの路悪
しかるべきも知らぬにはあらず、風寒く雪催ひせる空の心に懸らぬ
にもあらざりしかど、なか／＼に思といまるべくも無ければ、車を
やとひて先づ龜戸神社へとは急ぎぬ。
天神橋といふにやがて着きつ、此處より車をば下りて行くに、車引
く男の子の汗打ちぬぐひなどして、口まめにさま／＼の可笑しき事

とも言出でつつ、随ひ來るも折柄の詞がたきとやいふべき。傍に高く葛餅としるしたる小さき旗の風に翻へれるあり、今此家に若き女の梅の折枝をひさげて、二三人高笑しつゝ打興じて入りゆくがありけり。

梅が香や葛餅の旗新しき

車引くをのゝをば裏門といふに待たせつ、吾れのみ正門より神社の境内に入るに、門を入りて左右共に梅の花早くも咲きて、得ならぬ薫の袖をうつに、唯心うれしく、はるくさつる甲斐もありけりと、社前に進みてぬかづく、一夜の松にならびて、千里飛梅といへるがありて、木の下に紅梅神と呼ばれ給ふ小さき祠立てり、飛梅は僅に

一輪のみぞ笑みたる、此のほか境内は既に三分の春を占めたるもの多く、四五日の後や盛なるべき、裏門を出で、晝飯したゝめんど、家名を龜川とかやいへるに入る、車ひく男の子にも酒などたうべきせつ。

梅咲くや給仕女の客馴れず

夫より清香庵に赴く、臥龍梅の名にかくれぬ處あり、園中小童二人ありて、靜に茶を煮る、花をつけたるは僅に茶屋を圍める兩三株のみ、柵内の老樹は蕾猶ほ堅かり、童に對して、今幾日ありてと問へば、此十日頃より盛なるべしと答へぬ。

茶の色やこれ鶯の羽の雫

四邊あたりに人氣びきけな無かりければ、心こころもいと静しづけく氣きも自ら長閑ながいやかに覺おぼえて、去さり難がたみつゝ、彼方あなた此方こなた行き返かへりす。

梅うめ見るは木きの濡色ぬれいろの干ひぬ程ほどぞ

しばらくして園えんを出いづ、茶筌ちやせん塚づかの邊はざりに小門こもん新あらしく建たてられたり、面おも白しろしといふ人ひともある可べれど、吾われは其何故そのなにゆゑあるやを知らず、うるさきわざかちと思おもへり、夫それより北きたに向むかひ堺橋さかひはしといふを渡わたる、路狭みちせまくして車くるまの轍わだち泥土ごろに埋うづみ、たやすくは進すすみやらす、道みちに添そふて一心しんぢ地藏ぢやうぢ菩薩ぼつさつを祭まつり、兼かねては守まもる人もあらず荒あれにしを、何時いつの程ほどにか藤らうたけたる一人ひとりの女をんなの此處こゝには來きたり住すみて守もりまゐらす事こととはかりけん。

東風こち寒さむき土手どてや一心しんぢ地藏ぢやうぢ尊そん

上州しやうしゆの諸山しよさん遙はるかに見みゆ、いづれ雪ゆきをいたいかぬも無し。小村こむら井橋いばしを渡わたり、右みぎに折をれて名主なぬしの梅うめなり、園えんの入口いりぐちに小門こもんあり、江東かうとう梅うめの三字じふを記しせし額がくをかゝげぬ。臥龍ぐわりやう梅うめにくらべては花はなをつけたるが多おほし、去されどやゝ俗ぞくにして、ながく足あしをとむべしとも覺おぼえず。再び引舟ひきふねの流ながりに沿そふて、猶なほは北きたに向むかひ、木下川橋きのしたがはしを渡わたりて右みぎに折をれ、中川なかがはの岸きしに出いづ、帆ほをはりたる、はらざる船ふねの下くだり行ゆくもの三四さんしゆ。岸きしに臨のぞみて鈎つりばりを垂たるゝ人ひと二人ふたりあり、車くるまひく男おとこの子こに、何魚なにうををつりするにやと問とふに、うごひなり、此魚このうをは餘あまり味あじよきものにあらず、價あたひもいとやすしちと語かたる。道みちに染物そめものする家いへあり、友禪ゆうぜんといへる、はなやかある

形を染出して、流れにさらしつゝ、水より木に張りて乾かす。

春の川に友禪さらす女かお

入口の門に疎影暗香と記せし額ある處、名高き治郎兵衛が梅なり、園に入りて見るに、土柔にして歩むに足重さを覚えぬ。壽老梅、松壽梅の邊に枝を交へし二三の梅の、早くも綻び初めたるのみ、小村井よりは少しく遅れたり、柳枝梅は如何ありけん。

雪折れの枝特によし梅の花

木下川より向島に向ふ、此邊は水の災多かる處なればや、蓮田多く、去ぬる月より來る月の中洗まで、其根を掘りて市に出すといへり、此日も現に掘りて洗ひつゝあるを見たり。流石に此邊は舊曆

を用ゆるなるべし、若き男女の新しき衣打着て、往來するも少からず。向島百花園に至るに今日あん千住銀行の新年宴會とて、處々にさまざまの設して、男女多く群れつどひつゝ鼓打ちはやし、笛吹きならず。梅はいたく後れて、腹立たしき迄に蓄堅し、筆架にせんとて、都鳥の形したる、隅田焼を買ふ、女の主人の笑止がりて茶などすゝめもてあす。園を出で隅田の堤を南に進めば、明治義會のボート競漕會などありしが、此日の興は早や百花園にて、半ば打りがれたる心地しぬ。吾妻橋の邊に、改めて車を雇ひし折には、雨少し降り出でたりとて人々の走りのゝしる。

十日よりとしるす梅見の案内記

●水戸觀梅記 (一)

江東の疎影城南の王葩既に見る可き無く蜀婦をして徒に壁上莫吹笛の句を題せしむるも詮なし去れど春風浩蕩遊意頻りに動くの時一篇の詩書一炷の香以て自適する能はざるも際して編輯樓上左の揭示を見る

來十二日上野發一番列車に搭じて水戸常盤公園に觀梅の企あり有

志の士は署名あれ但し同日降雨なりとも發足の事

是れ所謂渡りの船に非ずんば明いた口に牡丹餅の類なり筆を執つて名を署し猶追加して曰く大々の賛成と然るに同志署名するもの三十

餘名の多きに達し發起者は爲めに一列車買切の約を結びといふ去れど同志の第一念頭に往來せる問題は但書一條なりしが如し十一日午後よりしては天色黯澹細雨霏々として夜に入る他人は知らず余は但書の雨は勿論鎗が降るも發足せんと決せしは別に慕しき故郷てふ感念の存せしが爲なる可く此感念の存するが爲め會費の割増を要求せらるゝ苦勞も無ければ若し鎗が降つて芋刺しに刺貫かれ一命を落す事あるも夫は割増の代なりと覺悟せば足るべし則ち傘を用意し蓑を用意し下駄を新調し目覺時計の指針を三時に合せて唯一寢入りに寢入りたり既にして正直にも時計は鏘然として鳴響くに驚きて蹶起し耳を傾けて點滴を聞きつゝ食麩半塊を盡くし戸を排し見るに扱

も案外千万なれや四邊は皚々雪積む事數寸猶風に和して降つゝある
 に至つては雨にさへ腰を拔し兼ねぬ弱武者連の變心の程も覺束なけ
 れど途次山田長風子を訪ふの約もあり物の具取つて身を堅め榎坂な
 る家を發しは發したるも道は泥濘暗さは暗し寒むさは寒し米公使館
 前より小松宮邸に添ふて虎の門に出でたる頃には長風子を叩起して
 寢惚顔見て笑はんと樂みにせし甲斐も無く丸の内に踏込みて轉げ廻
 り立派に雪達磨と成遂げてからが其儘西郷の銅像と並べて呉れる人
 も無氣あり夫よりも思案仕直し右に折れて久保町通より新橋に出
 で街燈のれ影を以て漸くに歩を進むるに辻々に立つ警官眠い目を瞻
 りて送迎する心を察すれば必ず是より水戸へ梅見の大雅人とも知ら

ず鼬小僧の徒に非れば戀には忍ぶ少將一派の俗輩と見る事からんと
 腹立しく咳拂して思はず大股に踏出せばツルリとすべる煉瓦路木履
 の齒を損じもせざりしは幸ありしと獨打笑みて京橋を過ぎ日本橋を
 渡り萬世橋より廣小路へとかゝるに風は何時しか雲を吹拂ひて満天
 の星影燦として寒く路傍の柳條悉く花咲きて燈光に映するの美余は
 初めて世俗の諺に朝起すれば三文の徳ありといへるも決して虚構の
 言ならざるを曉れり既にして山下に至れば公園の景又頗る佳なり停
 車場に達するに獵花子既に先登す時に午前四時余と共に談笑同志の
 來會を待つ事三十餘分同志未だ至らず先づ正宗數ダース蜜柑數箱及
 麵麩等の着するあり停車場内は俄に燈を點じ待合室の暖爐は焚立

てられぬ赤毛布來り頼冠來り澆を啜る人咳入る人乗客は忽ちにして
 十數人に達す時に朝比奈珂南漁夫を初め同志の漸次來會するもの廿
 餘名とは註せられぬ鍋田氷村子の如き既に數陶の醉を帯びて勇氣勃
 發當る可らざるものあり傍人語つて曰く加ふるに正宗幾壇を以てせ
 ば確に李伯當年の意氣を子に於て見るを得んと余も亦首肯一笑す

(二一)

獵銃の用意せるは遠藤獵花子雙瓢を提げしは八木櫻村子笹折の行厨
 は鍋田氷村子にして雙眼鏡を携へたるを珂南漁夫となす獵花子の獵
 銃の如き坐るに花見る人の長刀を想起せしめ珂南漁夫の雙眼鏡又一
 疑問に直せしが如し

發車の時刻は報せられぬ一行廿餘名先を争ふて乗車す號笛一聲長蛇
 忽ち雪を蹴つて進むと矢の如し已にして東天微白窓外の光景漸く眼
 に映じ來つて四顧唯是銀世界天公又意あつて此一行の爲に規畫せし
 ものゝ如し長風子先づ拍手絶叫して曰く快哉と衆等しく之れに和す
 列車の田端停車場に着するや四邊の景致佳更に佳なるを覺え北千住
 南千住を過ぐるに至てや光景は次第々々に鄙び行けり常には淋しき
 榛の木の春知り顔に粧を盡して立並べるも面白く田螺は今か如何な
 どのつまらぬ苦勞も樂みの内なる可し雪の畔道負籠を背にして通ふ
 思ふに若鷺など賣るからんと思遣られつ
 雪分けて若鷺を賣る嫗かな

龜有を経て金町に至る此處は帝釋天へ從是幾町の榜示ある停車場として知らるゝの處、遊獵者の下車せるもの三四、旭日漸く車窓を射て地際朝陽滿、天邊宿霧收、風兼殘雪起、河帶斷水流ると歌ひし詩中の景、能く筆紙の悉くす可きに非ず特に半融半凍の樹梢の雪看る看る淡紅を潮し來りしが如き恰も是櫻雲の搖曳すると般一般遂に正宗幾饜コルクスクリーを用ゐざる可らざるに至れり氷村子の袂を搜つて茶碗を取出せしも實に此時なりき

杯は袂から出す梅見かお

利根の長流は何時見るも飽かぬ心地する鐵橋を潜り行く白帆流石に春らし

春風に鐵橋くゝる白帆かな

一氣船方に纜を解かんとす小舸あり村郎野嬢を滿載して乗移らせつゝあるを見る列車取手驛に至りて停る數分藤代を過ぎ牛久に至れば筑波の雙尖は漸く眸底に落ちて筑波々々の絶叫車中に喧し

八州の野は若菜かな筑波かな

氷村子能く飲み能く談ず伊東英泰子浮世畫に名あり安藤浦亭子洋畫家として一方の雄たり佳景に接する毎に各其所感を説來つて餘さず微吟するものあり坐睡するものあり氣早き連中の停車する毎に水戸かゝと問ふもあり朝暎は頻に夜を驅つて猶未だ足らず將に積雪を一掃し盡さんとす雪や日や相戦ふが如き其狀其態は實に觀の偉にし

て壯なるもの荒川沖を経て土浦驛に達するや筑波は突兀として左窓
 に逼り霞浦は渺茫として右窓に開く爽快の感興言ふ可らず知る者は
 語り知らざるは肯く曉靄深く筑麓を鎖して一朵の孤雲猶岫に宿する
 を見し余の、筑波の寝顔は之れにやちと戯れつゝ指し示せしに坐睡
 せる人の驚き覺めて頭搔立てしも可笑かりき霞浦波平にして漁舟二
 三岸を離るゝ事遠からず枯葦殘荻蕭條として春の未だ淺きを知る
 葦の芽の氷をかつぐ寒さかあ

款乃仄に起りて想漸く幽ならんとす聞く土浦は原來商業の地たり月
 を追ひ年を重ねば遂には市をなすに至る可しと夫は兎に角此處にて
 求む可きは櫻鰈、白魚、若鷺等の名産あるべし

(三二)

列車は土浦を發して神立を過ぎ高濱に向つて走る車中の甲乙美術を
 論じ韻事を説き或は指相撲を闘はし或は兼ての規約を犯して政治を
 喋々す馬場機堂子の如き赤城を擧げて筑波に比し以て舊遊の快を稱
 し氷村子の如き某子の豫言の如く脱帽露頂窓に倚つて村園門巷多相
 似處々春風枳殼花の句を幾度か醉哦しつゝ稍々退屈の色あり潮來出
 島の菖蒲花の話藤田小四郎が筑波の旗揚扱ては加波山暴動水國の被
 害談等一話一話を生じて轉々耳を傾くるに暇あらざらんとす

謎々も懸け盡したり春の旅
 既にして高濱に至る霞浦は粧を改めて再び一行を迎へぬ江頭一縷の

煙、浦上數艘の舟動くが如くにして動かす止るが如くにして止るに
 非ず雁歸つて汀渚空く燕未だ來らずして柳の既に煙るを見る沿岸一
 帶の風色、負に土浦に勝れるもの、如し銚子東京間に往復する輪船
 皆來つて此處に會す軌道の土浦より直に石岡に達せず迂回屈折して
 更に高濱停車場に至る蓋し之れが爲めのみ
 石岡を經、羽鳥、岩間も一杯の酒飲乾さぬ間に過ぎて友部に至る友
 部は小山線水戸線の分岐する處にして驛員乗客の切符を検するを例
 とし乗換への客又雜沓するを常とす、此日亦た然り、内原を經て赤
 塚を過ぐれば一瞬にして列車は俄かに速力を加へぬ、是れ軌道の勾
 配下りなるが爲めなり常磐公園は猶ほ町餘の地にある可きも已に暗

香浮動車窓を掠め來るかを覺えしむ窓外に首差出して去來に「山路
 獵入る犬の眞似」と吾れも笑はるゝ一人なりけり列車は忽ちにして
 公園崖下を過ぎ仙波湖畔に沿ふて走る湖上鳧の食を漁れるを見る土
 俗鳧を指してキンキチと呼ぶ余が幼時湖邊に遊びて彼を見るや友と
 拍手して聲々に「キンキチ〜キンキチ頭に火がついた」と叫びつ
 ゝ彼を驚かすを常とせりき彼れ能く之れを解するに非る可きも忽ち
 水中に没し去るの状恰も頭上の火を消さんと試むるものに似たり追
 懐廿餘年、又一種の感無き能はざるあり

浮むさへ下やすからぬ水鳥の

沈みかてにぞ世をば經にける

水戸停車場には達せり小林國手、飯村茨城日報社長、鶴殿七郎、久木久俊、蘆澤信元、柳旦堂柳澤平の諸氏十數名一行を迎へて歡待措かず珂南漁夫の如き殆んど應接に暇あらざらんとす
一行車を賃して弘道館に至る館中梅千樹舊に依つて馥郁たりといへども先君の遺圖徒に草蕪に委せんとす八木櫻村子歌あり

いにしへの學ひの窓の跡とへは

軒端の梅の今もかくはし

鹿島神社に詣で弘道館記種梅記等を歴覽して孔廟に入らんとせしも荒廢入る可らず氷村子佇立、曾遊の廿八字を朗吟して曰く

卅年前是講經堂、

尙有儒臣記典章、

何事如今人不掃、

文宣廟朽草茫茫、

と聞く近日修築の計畫ありと然り水戸人士として大に修築を加ふるの責ありと一理屈ならべて弘道館を發し一行車を聯ねて北三の丸に出で左折して縣廳前より更に右折仲町を経て泉町を過ぎ常磐公園に向ふ余を乗せたる車夫顧みて問ふて曰く「彼の滿面鬚髯を以て掩はれたるは先生なるか」と余默笑首肯する間に車は既に公園に達せり

(四)

車を下り袂を連ねて園中を徘徊す梅花千株雨雪を経て其色稍衰ふるといへども冷香脉々尙人をして酔はしむるに足るものあり仙奕臺の

邊老松の下に立つて願望すれば心氣唯恍々然として塵界自ら悠悠
たり珂南漁夫時に詩あり曰く

何唯籬角幾枝斜

竹樹渾看着冷葩

自是詩人清福足

滿郊晴雪訪梅花

園中茶亭あり亭を廻つて崖を下れば仙湖暮雪の碑あり碑は是れ實に
水戸八景の一崖下細流あり新川といふ流に沿ふて行く事十數歩二小
童あり梅花に對して釣る誰れか這般の風流をば教へし

梅散るや小さき魚の水に躍る

印象鮮明なと言はねば吾ながら句らしくも無き句をば得たりけるよ
安藤壽伯獨り留つて寫生し身も亦畫中の人と爲りしを知らざるもの

△如し一行は且つ語り且つ笑ひつ緩歩して吐玉泉に至る雪だも如か
ざる寒水石の圓筒あり清冽なる甘泉滾々として筒より湧溢す筒の徑
約四尺老杉蒼鬱として幽趣限なく坐に三伏の涼を想はしむ園後の小
徑を攀ぶ徑羊腸として醉歩に惱むの人多し漸くにして好文亭に入り
何陋庵の茶室見了りて樂壽樓に登れば滿目の風光全く觀を改ため遠
くしては吉田の森三魂ヶ崎近くしては櫻山緑ヶ岡高枕亭趾窈窕ヶ阪
一起一伏一姿一態畫けども成る可らず西筑波に對し東バラ々松を
望む菊池扁舟子の如き珂南漁夫携る處の双眼鏡を手にして放たず
已にして曩に一行を停車場に迎へし有志の士、亭中竹の間の宴席に
款待至らざるなし大小の歌妓盃盤の間に周旋して献酬興増々加はる

安藤伊東兩畫伯は畫帖に臨んで得意の筆を揮ひ珂南漁夫は有志の請に應じて所感一絶を留む

萬樹香雲夢久牽

春風重訪豈無緣

名園景物依稀在

辜負梅花十九年

郷夢有時生枕上の感何ぞ管に漁夫のみならんや時に妓の三絃を弄して此地專賣の磯節を歌ふあり馴れたる耳にも面白し珍らし

碎けて散れてあふ浪の君に思や寄せてひく三筋の糸の糸間さへ短

き夜半の手枕に別れをいろぐ磯節のやんで淋しき松の風

櫻村子戯れに妓名を片紙に記して曰く大には某小には某、某等尤美にして而も艶なりと、越山槐溪子は一朶の白梅を洋服の襟に挿みて

微笑するものゝ如く菊池扁舟子は頻りに大白を滿引し、氷村子の如き屢々鮫鱈の友醋に舌鼓し、時に墨を磨するの一妓を顧み杯を屬して口占して曰く

酒淋漓底墨痕斜

坐上春風詞吐葩

展紙雪兒嬌可愛

雙鬟一朶插梅花

と蓋し珂南漁夫の韻を歩するもの馬場機堂戸所蜀綺の兩子、東湖先生の墓を訪ふの意あり、歸期の迫るを以て果さざりしは尤も遺憾とする處佐竹氏の舊臣源忠彦てふ六ヶ敷名を持ちたる川井如々軒子は父祖の舊城址を訪ふて一首をものせりとて示さる

興未だ央ならず酒猶は壺に滿つるも歡樂は窮む可らずとて聞けい

ザや歸らんとて有志の厚情を謝し一行將に亭を去らんとす一老翁わ
り竹友老人といふ竹器に詩歌を彫し之れを亭の一隅に鬻ぐ世人目す
るに市中の仙を以てす梅たゞき梅羊羹又名物として爰に購ふ可し衆
争つて之れを求む

梅咲くや仙人里に米を買ふ

庭前櫻あり四季櫻といふ四季花を見る可く如今既に破蕾するあり庭
を出で園に入り逡巡躊躇亡歸の思あり園に近うして常磐神社あり義
烈兩公の靈を奉祀す珂南漁夫先づ參拜し衆を麾いで樂堂に至り陣太
鼓を見る胸徑四尺七寸五分胸圍一丈五尺五寸長六尺二寸左右に景山
公眞筆の銘あり銘に曰く「震天動地、起雲發風、三軍踊躍、進思盡忠」

猶天保十二年辛丑冬十一月の文字あり面に丸龍を描く實に公が在園
の日野外練武の用に供せるもの當時公の詩歌あり

昇平今日不忘亂

講武曠原思古深

沐雨櫛風亦何憚

聊呈報國一丹心

真心のかをりもしるし小櫻の

鎧の袖にかよふ春風

憂國慨世の意氣千歳の下懦夫をして起たしむるに足るものなしとせ
んや、氷村子再び秋日曾遊の詩を醉吟して曰く

恍聞動地震天聲

思至當年不耐情

白髮伶人年八十

斜陽空廟坐吹笙

(五)

社畔酒樓二あり清香亭といひ津の國といふ景勝を占むるの點に於て
 客を遇するの點に於て清香亭尤も著はる是より一行は徒歩するあり
 車を賃するあり前後相踵いで停車場に向ひ争ふて今將に發せんとす
 る午後三時廿分發列車に投ず新しき一列車は實に一行の爲めに用意
 されしもの車中猶正宗二打と蜜柑とのあるあり之を外にして有志贈
 る處の行厨あり以て酔を盡すに足る酔の尤も熟するものを鍋田氷村
 子とし菊池扁舟子と爲す氷村子の談話縱横、扁舟子の快辯滔々、共
 に酒戰場裡の豪將に耻ぢずと謂ふ可し下戸なるは麵麩に柑子に餉厨
 に飽かざる處無く眞箇に世外一箇の別天地復利門名路も思ふに暇

らず高濱を経て土浦に至るや日漸く黄昏ならんとして筑波の山容霞
 浦の水態又今朝のものに非ず荒川沖を過ぎて牛久に近づくとや平野茫
 漠たる天の一方、夕陽雲を鍍して金光燦々突如として一幅墨畫の不
 二峰を現す崇高の感禁する能はざるものあり

梅白く夕日をせなに富士暮るゝ

牛久沼を前景とせる夕陽の不二は又更に喩ふべきもの無し、利根の
 鐵橋に及ばんとするや珂南漁夫安藤畫伯長風子及び獵花子等鐵橋釣
 欄の數を賭して或は十五或は十或は十二といふ鐵橋を過ぐるに及ん
 で其の數八を得、這般の兒戲又旅中の一興ならずとせんや

鐵橋の釣欄をよむ春の旅

我孫子に至つて日全く没す、徒歩あらば如何に心細かる可きをなど語りつ柏松戸等を過ぎ行くに酔ふて眠れる者あり微吟猶盃を手にするものあり金町龜有南北千住田端を経て身は再び紅塵堆裡の人となれり

仙人になりうこねたる梅見かな

此日事あり或は疾あつて來り會せざるもの曰く關梅癡曰く塚原澁柿曰長田秋濤曰く大庭雲心等の諸氏諸氏倘在らば更に一層の興會を添へしならむ雲心子詩あり

諸同人探梅於偕樂園。余偶有事不能同行。遺憾殊甚。

賦二十八字。

梅花氣格酒精神。

想見諸公詩句新。

愁寂東風唯有我。

小瓶相對一枝春。

次珂南先生好文亭席上詩韻。

空山流水夢相牽。

明月梅花未了緣。

笑我依然寒骨相。

落人後去一年年。

下村子も亦事ありて約を果さず以て近來の恨事とあし曾遊を回想して數首の和歌を寄す

常磐神社に詣で

色かへぬ常磐の松の心もて

神の御前にぬさをさしけむ

櫻川の清き流れに緑ヶ岡の松の緑ある趣いと深く

覚えてければ

松ヶ枝の緑は春に立かへり

梅咲き匂ふ川邊ゆかしも

家に歸つて酔未だ醒めず餘香猶衣袂に在り、清香亭主人贈る處の梅筆を採つて此の記を作る(終)

◎大林の桃林 (一)

「衰世難行道」あど、下手に頭を悩めず「華時不稱貧」の主義を取つて人生五十夫れさへも保険附ねば不安心の世の中信仰する處は唯

々是れザツクバラン宗風に隨ひ流に靡く柳々で面白可笑しく渡つて渡られねば難船する迄と度胸が据れば一時間でも多く一分でも脱がさず遊ぶ可し遊ばざる可らずと思へる矢先東武鐵道線越ヶ谷驛を去る事五町大林の桃今を見頃との噂を聞き去る三日の大祭日に當れるを幸ひ北千住停車場へと走付けしも夜が明けた斗りと今迄思ひしは違ひて已に早や午前十一時十分過なり發車時間はと見るに午後一時五分扱て、此様な時本社毎月附録でもと後悔先に佇んで待合所に呆然して居ては蜜柑の皮巻煙草の吹殻と共に驛夫に掃出されんも知れずテ隱しの視察にと千住の宿をキヨロつき廻れど俳句の種に成りさうな代物も無く結句疲れ儲けも感心せずと又引返して停車場

前の茶店に新玉子を剝く

春の季に入れてやらうぞ新玉子

漸にして時間來る東武線は此方へと導かれて此間輕便鐵道の布設を要する程山鳥の尾の下垂尾の長々しきプラットホームを進みソコく一等室に飛込めば一等も二等もズツト碎けて内地雜居が影響せしにも非る可れを開放主義は随分恐入つたる而已ならず少し遅れし爲め半座を分けて呉れる美人もなし噫々馬車ならば吊革のあつたものと歎息するは未だ俗氣とやらを放れぬが爲めなる可し既にして列車は大師へ九町餘と立札せる西新井を経て草加驛に達しぬ去れど十分廿分扱て卅分待てども發車せず甲乙の不平尋常にあらず「オイ驛

長さん割引丈け返すよ後生だから助けると思つて出してくんねへ」「いけねへ君昨今運轉の稽古中なんだから乗客は御慈悲病院の患者同様と覺悟す可しと切符に明記してあるよ」と笑ひ又罵る驛夫は「上りが遅れましたので」と詫ふれどハイ草加とは大人しくして居ず「上りが遅れたのは困つたな、下りの遅れたのなら灌腸すりやア濟むんだがと」戯る斯る時に吾は見て過ぎし即景をとて鉛筆を走らす

菜の花や踏切に 女旗をふる

驛長の胸に挿したり桃の花

菜の花の中に紙漉く小唄哉

蒲公英や千住に續くレール路

黒塚の小學校や桃の花

桃咲くや煎餅を干す村の茶屋

停車場に寄附と記せし桃の咲く

菜の花や……………

上り列車は來れり待つ事四十分計りにして初めて新田に向ふ

新田の庄家が籬やこぶし咲く

蒲生を経て越ヶ谷に達し一同無事に到着せるを祝しつゝ下車し大林

にと袂をつらねたる同遊の男女百餘名なんでも他人の往く方に行く

とと吾は少し引下つて随ひ行けば往還をうれて小高き土手に上り麥

畑に添ふてボサリ〜

(一一)

書生あり藝者あり酒瓢を腰にせる老人あり夫人御携帶の紳士あり自

轉車片手にハイ〜馬だ〜と戯るゝ丁稚あり嬢様の洋傘御蔭を蒙

るに由なく大汗に惱む婢あり風俗畫報の表紙にも無き圖の人物種々

雑多笹藪に添ふて麥畑の砂埃を蹴立てつゝ進む様明儀を着て草鞋を

冠た人間の交ぬが不思議と思ひつゝ行くにハタと路盡きて一面の藪

となりしが藪の内に鳥居あるも氣味悪く何神を祭れるにかと怖く

乍ら近寄りて見るに稻荷の祠とは油斷ならず爰へ若い娘が出て藪疊

が一寸雁胴返し酒肴がスラリと並ぶサアれ浮れあさへをどゝあつて

は一大事と眉に唾して睨み廻す内に一行の半は早くも祠の裏手なる竹垣を破りて何處へか行く様子の餘り亂暴なるには驚きしが他へ廻る路も見えねばヌツと踏跨いで大向を唸らせる見得の必要も無き儘恰好の好悪は論ずる處にわらずと四ツ這にありて首尾よく垣を這脱けしに身は忽ち桃花園中の人となりけり木は苔蒸して孰れも若木と見えねど丈高からず花満ちたり園中一の藁屋あり園の主人とも見ゆる老人の咬煙管して一行を見送りつゝ叱らんとせざるは呆れ果てたるが爲めにもわらん一々引捕へられて裸にされば本筋なれど先づ〱眉毛に唾の功能ありしを仕合せとして圍を出で、行くに一寸小高き丘ありて同勢は此處に悉く集りて藪の中から四邊を見廻す

に前後左右共に今を盛の桃の花をらぬは無けれど休まんとするに薙一枚無く飲んとするに澁茶一杯なし互に顔を見合せて愚痴の交換を始める處へ東京から來た一行を見んと腰辨當泊りかけて近郷近在から集りしか如何か其邊は請合はれねど兎に角同勢を凌ぐ程田舎の人の多く群がれるが内に尤も商賣氣のあるらしき女の「ふれぢやア鮎でもふせへて賣ると嘸賣れたらんべいに」との述懐尤千萬なり一行の内には甲「君原來鐵道會社が不埒ぢや無いか割引迄して客を呼ぶ位なら畑主と交渉して掛茶屋かピイヤホールの出張店位は拵えてよ慈姑團子に櫻餅位の設備をせんと言ふ事があるかエ全体君失敬ぢやないか」乙僕にさう怒つたつて仕方がねへせ此處の畑持は東京から

桃見よ來る東京の奴等は香氣な奴斗りだから屹度枝をへし折つて桃の木が根株斗りにあるだんべいソレ垣を結はせるヤツと急に圍してソラ彼方にも此方にも札がさがつてゐるだらう」甲「ムム成程」乙「其札に曰くサ桃見物の者一切入る可らず……ハ、ハ、ハ、久米の仙人入る可らずだ」「オイ笑ひ事ぢやアねへせ新聞も新聞だ明治の桃源は大林に御座いと言はぬ斗りに書き立てやがつて情ねへ目に逢しやアがる」ろりやアさうと桃見に來て反對に田舎者に見れて居るぢも無いだらうポつ〜引揚げやうかなニ腹が減つて足が出ねへつて困るなア杯とボン〜怒つて皆歸つて行く吾を新聞記者と一行中に知る人あらば命も既に危き處永居は恐れと元荒川の堤に出づ水ゆら〜と流

れて主無き小舟を繋ぐ川柳の枝縁ならぬも無し

(三二)

蒲公英咲き土筆萌ゆる元荒川の堤より桃林を顧るに紅霞一抹全村を刷くの佳景到底筆紙の盡す可き繩張に非ず

全村は唯桃咲いて眞赤なり

堤の傍に簞張の茶店あり老婆と小娘とありて茶菓を賣る蓋し同村唯一の社交俱樂部なる可し三人の男ありて此處に憩ひ葡萄酒の壘を傾けつゝ互に太平樂を並べ合ふ處へ餘り疲れたれば吾れも入りて腰打掛くれば老婆は大肌抜きとなり襦袢一枚にて小娘を指圖しつゝ茶をど勧む吾は漸く乾きたる咽喉を潤すを得て無邪氣なる野人の醉語に

耳を傾る内其内の一人は吾に向ひて「折角東京から御座らしつても
 畑へ入れぬへのだから御氣の毒でなりません」との挨拶「イヤ桃
 は遠くから見る可き花だと思ひますよ垣を結つて入る可らずの札を
 吊下げるのも酷のやうだがほんとに此大林の桃を見やうなら此土手
 より外に無い畑主に冷遇されたのが却つて仕合せとなつて思ひも掛
 けぬ好い景色を見付けた所謂塞翁の馬ですな」「へい成程西郷の馬で
 …西郷ツて言へばオイ權作さんね前上野の銅像見たか」と話の反れ
 しも可笑しく覺へつ聽て茶店を辭するに老婆は一枝の桃花を御土産
 にとて贈りぬ夫れより再び堤をたどりつゝ逡巡去るに忍びざるの思
 ありしが餘りに遅れてはと越ヶ谷に向ふに麥隴菜畦到る處として春

長閑ならざるなし

菜の花のチヨボリと咲くや麥畑

漸くにして停車場に至れば三時四十分發の上り列車四時を過ぎて猶
 至らずと不平連の不平は増々熱度を加へつゝあり吾と同じく花を得
 て集るもの七八中には彼岸櫻をかざせるもあり

桃咲くや上り列車の客多き

四時廿餘分にして上り列車到る一行先を争つて之れに投ず腹の空く
 なりし爲めか酔の醒めたる爲か失望せし爲めか上りは存外騒々しか
 らず大林の失敗を取返さんとは非る可きも西新井の大師に詣でん
 と下車する者も多かりき既にして此千住に着し車を雇ひて骨の遊廊

を過ぐるに遊女の階上より「其花を」と望むもありき

二階から花ねたるゝや小傾城

日本堤にかゝりし頃は街燈点々西より東より廓の花に急ぐ人多し廓内の花は未だ蕾なりき

夜櫻や瓢を質に取られたる

● 汐干狩と摘草

彼岸過ぎて柳青み、桃咲き、木瓜咲き、李咲き、莖咲き、櫻も咲き山もよし、海もよし、汐干狩よ、摘草よと、友達の催親類の交際、妻君の要求、子供の強請、一日の休、一人の身体、自轉車に蒸汽を

仕掛け、綱曳跡押に韋駄天を雇つても、義理のたし兼ねる春とはなつたり。去れど桃も櫻も年々歳々ハナについて面白き遊びの趣向も無し汐干狩と摘草、責めては慾につくが當世と悟らずとももの事をれど、下駄埃に咽ばぬ丈けを所擇にして、案内を芝浦から、御臺場かけて蛸、蛤、牡蠣、赤貝、鱈、小沙魚は追掛けて手捕に洲崎の邊まで獲物無きにはあらざれど、馬鹿貝扱ては蜆まで、堀江猫實遠しとせず、船漕出さは存外に鯨のとれる事もあらん、汽車の便にて江の島鎌倉、さらずば銚子に行くも興あり。うろく船を呼留めて煙草といへばピンヘット、酒はといへば壇詰を出す世が世あれば湯船の湯の濁りたりとも、理屈は言はれぬ事と知る可し

扱て摘草には何々よけん、田芹、蒲公英、土筆、芽を露の臺、日の野蒜、嫁菜に睦む蝶の羽も今日此頃の軽さよと誰も三ッ葉の……と調子に乗つて向島は秋葉田圃、夫より田端、三河島、骨ヶ原、雜司ヶ谷、早稻田等重なる處と菊若葉、之れは御庭で摘み給へ

●花季俳觀

◎チン／＼ばしより頬被り、額鬢の花魁も、附髻黒く腕まくり、舌も廻らぬ醉方は、巡查泣しと知られたり。

どの顔も可笑しく見ゆる花見かな

◎濡れ佛のぬれぬ日和を花にして、長松お三子守まで集ひて共に清

水や、此所相應の摺鉢山、足摺小木となるまでも、今日一日と遊ぶらん。

惜しい酒人に強ゆるも花見かな

◎雁鍋に鶴程頸をのばせども、誂は來ず、卷蕨焼けにふかせばうれも空、残るは眩暈頭痛のみ、打鳴らす手も力をし、女中の聲の腸に染む。

賣切れの團子やもあり花見月

◎淺草は大慈大悲の大御堂、ぐるりめぐりて花の雲、矢場の提灯夕暮に、呼名も時につれの客、花村さんとは聞えたり。
豆に飽きて鳩も御堂に花見かな

◎金魚賣種蒔賣も来りけり、花に狂ふも今幾日、筍のびて柳絮飛び蚊が出る蚤もはね出す、サア團扇買へ、簀戸建てよ、夏も隣となれるかも、

花散るや稗蒔賣の笠の上

◎野は蔵せんまいも早や丈のびて、畠には黄金の菜の花や、麥も何時しか穂に出でぬ、案山子立てたり鳴子繩、引く樋の水に咲ける山吹。

簀かけし背戸に山吹七重八重

◎藤待つ間躑躅綻び牡丹咲き、早や朝顔も蔓立ちぬ、里に茶を摘む日も近し、聞たし見たし早苗取。

田の水のぬるみてお玉杓子かな

堀切の花菖蒲

雨催ふ空の何となく氣にかゝれど。行徳までもと約せし程の心に對しても。此一日を仇にやは過さるべき。せめては梶を廻して堀切へかり行きて見ばやと。舟路はるけく鳥がなく吾妻の橋に着き給ふ。かどゝやれば自然風雅にもきこゆれど。實は一錢蒸氣の御厄介にありて石炭の煤をあびつゝやつと河岸へは這ひ上りける。

先づ花に人の心はせきたんの

烟にまかれて急ぐなりけり

吾妻橋よりは膝栗毛の駒にまかせて。思ふがまゝに心の手綱もゆるべ。道草を食ひつゝ、土手をたどるに。右手堤下に中將湯の廣告あり。柱の上に中將姫の像を安置す。初俳子予も共に指して笑へば

縁もなき此土手下に隅田川

蓮葉娘は不忍にころ

など口にまかせて饒舌り散らせば。腹は何時しかケソリとへりて。常ならば素通の言問もなつかしく。初俳子の得意顔なるに腹は立てど。今は其腹をば立てる處か横にする勇氣もなく食氣一方の大將これにありと座敷に通りて。團子汁粉と見事に片付け。餘り其臍甲斐あさに

心あらば頼んで置ず都鳥

團子食ひしと人に語るあ

鐘ヶ淵の邊より右に折れてゆくに。四邊の景色見るからに心涼しく彼方此方に田植する様。さては麥苺る乙女の。節面白く鄙ひたる唄うたひつゝ働くあど。自ら都門の塵を出でし思も動きて。初俳子は微吟しつゝ。瓢分子は駄洒落れつゝ。余は頻りに打興じて馬鹿笑ひしつゝ。やがて堀切につきたるは午後三時にもやありけん。小高園に休みて

四阿もこゝは一際は小高園

客もつどひて蜘蛛手八ッ橋

八ッ橋を渡せし中程に一の四阿舎あり。釣舟形の硯箱に筆うへて。短冊もあり書畫帖もあり。繰返して讀むに歌らしきも無く句らしきもなし。いづれもく不風流なる徒書のみ。園主の心入にもどりて口惜しき事か。四ッ木の吉野園へこれより廻らんといふに。空模様あしく細雨も降出したれば歸途につけり七ッ八より十二三歳斗りなる童の。手に花菖蒲一二把持ちたるが。五月蠅く追すがりて旦那一錢くくと押賣す。余無據一把を買取りたれど。他の二子は買はざる爲め。幾度か彼等に惱まされしぞ可笑かる。鐘ヶ淵より枕橋まで川舟に乗りて下れば。浪靜にして岸邊の若葉緑をかさね。汐満ちて眞帆片帆自ら船をやる景色。畫に見たるとは又格別の趣あり

り學生のボートにて流を上下する様。何とはなく勇しく又ゆかし。淺草に来れる頃又雨に逢ふて蕎麥屋にかけ込む。

傘がモリあたまへ滴カケ込んで

やつとキノバと洒落もセイロウ

途中にて花菖蒲一本失ひければ

傘の柄のぬけ處もや悪かりし

大事な花をいつか落しつ

●春晚首夏

◎新緑◎

春は名残を遅櫻にとめて早や幾里をか住きけん木といふ

木梢きこずえてふ梢みどりは緑あはからぬも無く淡あはく濃こく水を染そめ空そらに映えじて見る目も
醒さるばかりなるが中なかにも隅田すみだの櫓聲ろせい上野かみのの瀆か笛てき芝山内しばやまうちの法は磬ぎん星せいヶ岡が
の啄木しやくぼく又好また箇がの詩材しさいならずとせず

葬禮さうらいの白丁はくぢやうつゝく若葉わかばかち

◎牡丹ぼたん 至いたる處ところの花はな園ぞの此この花はなの艶姿えんし妖態えうたいを認ためざる無し去れど餘りに
多おほく植うならべたるは風情ふうせい少すくし苔滑たけなめらかに湖石こせき蒼あをみたる邊へに一ひと莖こゝろの白葩はくば
香かを吐はくころ世よ比たぐひかくめでたきものなれ

琴ことの音ねに堀ほりをののければ牡丹ぼたんかな

◎躑躅つじ 大久保おほくほの躑躅園つじえんも昨日きのふより開園ひらくせりと聞きく麥むぎ笛ふえゆるく雲雀うんさく
忙せしき田舎道いなかみちの氣散きさんと衛生えいせいなど言いふは餘あまりに俗ぞくなる可べしや

追おひ揚あげて聲聞こゑき惚ぼるゝ雲雀うんさくかち

◎藤花ふじ 龜井戸かめいどに人形造にんぎやうれりと聞きくもうるさし去れど花はは早はやや盛さかに
て見頃みころとはありぬ芝公園しばこう蓮池れんぢの畔ほとりも六七分むくしちうといふ處ところある可べし

藤ふじの花はな其滴しづくから緋鯉ひこひわく

◎雜景ざつけい 花卉かひには此この外ほか芍藥しゃくやくあり櫻草おうそうあり山吹やまぶきあり鮎釣あなつりも猶なほ面白おもしろくホ
ト遊あそぶも興き深こほかる可べし

●首夏しゆげの旅のり (上)

東宮とうきう並ならびに同妃殿どうひでん下成婚ごごこん御奉告ごほうこくとして伊勢いせは山田やまだ、大和たいわの畝火うねび、拵しよ
は舊都きうとに行啓ぎやうけいあらせられし砌みせり、社命しゃめいを受けて行々おんも御模様ごようかど書き

記して送りし序に苗代に鳴く蛙、夏山出る杜宇の聲も捨て難くて
手帳の端に記し置きぬ

花に酔ひし人醒めて新茶に風流を知る卯の花月(舊)、都を出で、先
づ伊勢に向ふ、空晴れて氣涼しく賤が藁家の頂に咲く胡蝶花、鄙び
たれど捨て難き風情多し。

谷合の小家古りにけり胡蝶花

何時見ても嬉しきは富士の峰、いつとてかど歌人の咎めけん、雪は
ちほ鹿の子斑に降り積みて、日に輝けるを見るに、黒金の山に白金
を嵌めたるが如し。雲少しばかり峯にも尾にも立ちかゝれる様又を
く面白し。

杜宇投り出しけり富士の雲

到る處の新緑眼も覺る斗なる間に、麥の黄ばみ渡りて、雲雀の高く
舞ひつゝ歌へるを聞けば、自ら世に遠ざかる心地うれし。

村中で橋の普請や麥の秋

名古屋にて關西鐵道に乗換え愛知蟹江彌富佐屋津島の各驛を過ぎて
桑名に入る夕陽は山の端にかゝりて風ぎ渡る空の景色野面の眺い
ふばかり無く興深し東海道名所圖繪に記せし昔の事を思出しつゝ
行く時雨蛤に名ある處なればにや驛々に之れを賣る白魚も名物にて
翁が「水より白きと一寸」といひし此處あり應て黄楊の小櫛に名あ
る四口市を経て龜山に至り參宮線に移り下の庄一身田を過ぎ津に至

りて宿る伊勢は津で持つといひけん流石に縣下の都ありけり此夜宿の婢の蚊幃つらんといふを、うるさければとて斥けたるに左迄はと思ひし蚊の夜半に群り來りて血を貪る、去れど一旦斥けたる上はと、團扇を城とも砦とも頼みて終夜戦ひしもいと苦しかりき。

憎いやつ叩いてやらん茄子團扇

茄子形の團扇は阿濃津の名産なり。其のあくる日阿漕より山田に向ふ、朝來の兩名殘無く晴れて瀛車の窓吹く風いと涼し、六軒より松坂に至る間右窓に當つて北畠氏の舊城趾を見る、山頂方形の突起を爲して櫛形城の名空しからず、又白米にて軍馬を洗ひ敵に用水の乏しからざるを示したりし事ありしより、白米城の名あり、此邊風景

特に勝れたり。

卯の花や白米城の荒れし趾

など思浮べつゝ又時鳥をも取合せて句にやせん歌にやなど、打案する程に山田町には着しぬ外宮に參拜して清盛楠を見る昔平相國清盛參拜の折楠の枝の冠に觸れしかば命じて其枝を切らせしは此楠なりといへり取るにも足らぬ俗譚あれど淨海其人の氣風を穿ち得たる心地す

瘤多き清盛楠や苔の花

間の山といへる處に名高き杉れ玉の名殘今に存せり昔は路傍に三味線を弾きて錢を乞ひしが、今はいと怪氣ある小屋掛けして木戸錢

を取る事となせり投付くる小錢を受留る技の早さはなかくに形容の言葉も無し

風薫るれ杉れ玉の袂かぢ

内宮前を流るゝ五十鈴川又の名をば御裳濯川といふめり倭姫命の御裳を濯がれしよりの名なりと

涼しさや岩に分るゝ水の音

此川よ宇治橋かゝる長さ六十間巾四間半の反り橋なり此橋の前後に鳥居を置く橋下に物乞の一群あり長さ竹竿に網を付けたるを攜ひ参詣人の橋上より投與ふる小錢を争ひつゝ受け留るに過つ事なし之れを宇治橋の網受けといふ

網受けや乙鳥のついとぬけて行く

これより京に入り大和に行く初めての旅とて見る物聞く物皆耳なれず目新らし

(下)

山田を立ちて龜山に引返へしつ幹線に移りて西に向ふ關驛は昔鈴鹿の關のありし處とて其名高く紫野の禪師が開帳せる地藏菩薩又能く世に知られたり狩野法眼が力及ばずとて筆を投げたる筆捨山も近しとは聞けど見ずして過ぐいとこのこり惜し拙堂が千仞峭崖誰得攀、古松倒挂怪巖間、良工心匠不能畫、投筆名高筆棄山の句を徒又微吟するのみなりき

小便を蟬のして行く地藏かな

加古驛は早や鈴鹿の山間なり是より直立八十呎の高堤三千四十五呎

(八町餘)の長さ隧道に入る此邊の景色いひしらす好。し谷間に湧け

る雲静にして未だ奇峰をなさず木がくれ落つる瀧の白糸日に映じて

漸く色あり

老巖に鷹の羽つかひ學びけり

猿の來て瀧あびて行く谷間かな

此隧道を出づれば伊賀なり夫より芭蕉の誕生地といへる柘植に至る

停車場に翁餅といへるを賣る餅を入れたる笹折に翁の座像を描き兩

の手に桃と櫻や草の餅の句をしるせるも床し

停車場に新茶も賣るや翁餅

此處より又支線に乗りかへて信樂焼に名ある近江の深川瓢箪の名所

と聞こえたる三雲淨瑠璃に帶屋の戀を長く傳へし石部の各驛を経て

草津に至る

清水丈けまけさせて買ふ瓢かな

草津は官線との接續地なり京都大津さては彦根邊への旅客乗換する

とて罵り騒ぐ姥か餅は此町の名物なりやがて馬場大谷山科稻荷の各

驛を瞬く間に見すぐして京に入る

京に入りて見るに聞きしに増して水と女は美しく覺えたれど家造り

の多くは赤く塗立て、風通し悪氣なる扱は町々のいと狭く商家の看

板ばんに提灯てふちんを用ゆる事の猶なほすたれず十五六の少年のれ芥子けしとかいへ
 る頭あたませし毛牒けすねくろ黒き大男の荷車にくるまひ挽きつゝ日傘ひがささしかざして歩める老女
 の禿はげたる頭に黒油こくゆぬり散らせし湯屋ゆやに猥みだりがはしきエビ◎◎ラ◎◎などか
 けつらねたる浴よくする男の石鹼せきけんを用ゆるは少く糠袋ぬかふくろもて顔かほなど磨みがきた
 てたる虻あぶの到る處に多き門の入口に新聞しんぶんね断ことわりしかく云々と記したるなど
 氣に入らぬふしも多かりさはいへ名所古蹟めいやくこせきの數々山水かずくさんすいの眺ながめに富める
 も少からで流石さすが舊都きうとの床敷ゆかしきなつかしからぬかは天明の初年見た京物
 語の著者二鍾齊半山が京は砂糠さごけ漬づけのやうなる處なり一体雅味いつたいがみあつ有て味
 に比せば甘あまし然れともかみしめてむまみなしからびたるやうにて潤
 澤なる事なし綺麗きれいなれど何處どこやら淋さびしと評ひやうせるも面白し

井三間堂◎◎◎ 堂前の掛茶屋かけぢやに憩いこひてラム子を飲む傍なまある沼ぬまに燕子花がきつばた咲
 き◎◎のこれるが憐あはれなり
 三熱さんねつの苦くも無なき色や燕子花
 御堂みどうは長さ六十六間内に運港うんたんに二慶けいの作しやうになれる一千一躰たいの觀世音を
 安置あんぢすとかや一体の御佛みほとけ九尺二間にも當らずなど友ともと戯たわむれつゝ泉涌
 寺に至る
 泉涌寺せんゆうじセンユウと讀むとのみ思ひしに土地ごちの人はセンニユウと呼べ
 り翠巒すいらん自ら深ふかして塵ちり無く山鳥やまどりの聲こゑ閑かんなり釋迦堂しやくぢやうあり觀音堂くわんおんぢやうあり特とくに
 觀音堂の本尊ほんぞんは唐とうの玄宗けんじゆん揚貴妃追福やうきひしゆふくの爲ため其容貌そのようぼうを模もして自ら作り
 給たまへるものとかよ後山うしろやまなる御陵地ごりやうぢには四條帝以下先帝先后せんていせんごに至る迄

歴代の陵ありと聞き寺僧に導かれて遙に之れを拜す観音堂にて

世の人の迷の果てや蟬の脱

清水寺 世に類無き靈刹なり山門に至る迄坂の兩側に連なれる人家

多くは清水焼を賣る客を呼立つる聲喧し華美なる色を焼出してな

らべ店付賑はし清水の舞臺は修繕しつゝありき

風薫る清水寺の舞臺かな

音羽の瀧は名こゝ流れてといふばかりなる瀧なり下流細くつたへ行

く處々に蟹取る可らずといへる立札ありいと面白くこゝ

小蟹取る子供追はるゝ清水かな

新京極 先つ東京の淺草大阪の千日前と並び稱せらる寄席あり劇場

あり見世物あり尤も熱鬧を極む薄暮涼を追ふて四條に至らんとすれば此邊の辻々に袋に螢を入れて賣れる女あり

袋から袂にうつる螢かち

四條橋 夏期の納涼には他に求めて勝れたる場處なし清き流れは下

に涼しき風は其上を過ぎ橋をめぐりて遂に夏無きを知る、藤屋と橋

をはさみてビヤホール新に設けられたり兩岸の燈影水に落ちて水波

激漑樓々簾を隔てゝ絃聲嬌語に和するを聞く更に納涼季の盛ともな

らば又一入なるべしと思はれぬ

簾の裾の三味線鳴らす風涼し

涼しさや扇流るゝ橋の下

圓山公園 古の所謂眞葛ヶ原今は風も騒がず緑樹鬱翠温泉滑にし
て誰が凝脂をや洗ふらん

温泉に夏瘦したる女かな

金閣寺 世に知られたる仙裳かり見る可きもの多し小童あり門を開

きて観覽者を導ひき一々聲高に泉石を案内す又俗に似て俗ならず潮

音洞より餌を投するに池水悉く大小の魚となりて潑漣之れを争ひ

食ふ又一奇觀なり特にうれしかりしは白蛇ヶ池絹笠山の二つかりき

若輩の中や白蛇の塔たてり

嵐山 或日妙心寺に象山先生の墓を吊ひ花園停車場より嵯峨迄瀛車

に乗りて嵐山下渡月橋畔に至り舟を賃して流を遡る事町餘水の清

冽山氣の冷爽實に言外に在り舟は忽ちにして對岸壑石の蟠岨せる間
に着す蒿師に導かれて嵐峽館に入る嵐山温泉これなり浴後一酔一眠
又世上の窮通に關せず

涼しさや小砂利すり行く舟の底

盃に雨のしぶきて夕涼し

此外京の名所のみならず奈良畝火行など記すべき事餘り多ければさ
まではと筆を擱きて又こん折を待つ事とはなせり (完)

● 歸省土産 (一)

胡馬猶ほ北風に嘶き。越鳥且つ巢を南枝に營む。况んや夫れ人類と

して誰か其郷國を戀はざるものぞ。父母堂に在すに於てをや老祖母
吾を待つあるに於てをや。弟妹の鶴首するあるに於てをや。交友の
閭に倚るあるに於てをや。噫吾れ歸らざるべからず。負笈郷關を辭
して春秋の省を懈るもの五星霜。山海の慈に背くの罪たるや又大ち
り

都門紅塵萬丈の暑をさけて。涼笛一聲上野を辭し郷里水戸に向ふ。
田端停車場に至りて輪車一轉す。薰風車窓を打ち。涼味漸く足る。
滿目蒼々として風光自ら脱俗の趣あり。南千住を過ぎ北千住を過ぎ。
密に列子の術を學んで碧水を斷ち翠巒を衝き。奔飛疾走壯快言語に
絶す。少子雀躍窓外を指點して嬉々の聲をなす。其喜亦知るべき

なり

松戸を過ぎ我孫子を過ぎ。既に牛久に入るに至つては、四顧炎帝の
以て其威を専らにするの餘地なし。蓮花紅白亭々として。幽香行人
をとゞめ。新竹老楊婆娑として水樓をかこめるあり。梧陰松影は森
々として。能く嗽石枕流の士を酔はしむるに足れり。茫々たる蓮項
の水田。風に随つて蒼波萬里に湧く。其間三々五々笠影の上下進退
するは。今が農夫の一番草をやとるらん。茸々たる丘山を攀ぢ馬を
驅つて崎嶇を踏むものは。彼等が抹草をや刈收せんとするなるべし。
筑波は遂に其矚眸の間のものとなれり。一幅の畫勢は急變せり。片
雲隻樹も亦有趣味のものとなれり。馬に騎して堤上をゆく野翁。

竿をとつて瀛洲に立つの漁客。いづれかこれ詩材たらざる。土浦に至るに及んで更に一段を進め。風色は雄大となれり。霞ヶ浦の碧水は漂渺として大海を臨むが如く。帆影の去來するもの漁歌の斷續するもの。片々たる水禽の上下するもの點々たる漁家の隠見するもの。一轉一景須叟の變化接迎に暇あらず。筑波の山頂は突兀三千尺雲を貫きて九天を摩し。八州の平野に泰然として君臨するの風あり。足尾。加波雨引等の諸山高低參差として之れを繚繞す

霞水筑峯天地は雷に青嵐

徒に思ふ氷輪十分の影を懸けて。爛々たる明光宇内に浮動するの夜。此山水颯爽の佳境に逍遙して。山靈水妖と共に歌ひ。樵翁漁郎と共に

に酔は。又安んず世故の紛々たるを憂ひ。羽化登仙の樂を羨んや

涼風や慾には月の霞浦

車中乗客稀にして更に苦熱の患あるなし

(二)

漸入山中天漸涼。溪回路轉蘇花香これ成嶋柳北函嶺に於けるの詞。余は東窓によりて微吟以て心を山光水色に放ち。恍然として醉えるが如く。茫乎として自失せるもの少時。石岡をも過ぎ友部に至り。線路は分岐して二となり。小山線に依るの客茲に轉乗せざるべからず

内原赤塚を過ぎて水戸停車場に着す。則ち腕車二輛を賃して余が五

年の久しき夢寐徒に戀々たりし家門に達せる時の所感。今や俄に之を盡す能はざるものあり。一家走つてこれを迎へ。或は團扇をすゝめ。或は爲に冷水を汲み。周旋偏に狼狽を極む。老祖母の如き。無限の歡は唯一掬の涙となつて滴々たるあり。少弟の如きすら。坐に余が身邊に纏綿して自ら怡々たるを見る。父問ひ母應じ。余が約せる三番列車によらずして。二番列車に乗込みしを以て。出迎ひ準備の齟齬せるを説き。親戚中に起りし吉凶。知人に關する禍福盛衰。唯念頭に充塞せる萬般の話柄は。洪河の決するが如く。家人個々の口舌に上りて。一として不順序不整立の雜語ならざるあり。此際に於ける余は會話に於ける未曾有の繁忙を感じき。浴室に入つて

靜に衣を振ひ。身は皎々。氣は察々。南園に面して晚餐の筵を設け。父と共に對して閑噺。一語一酌陶然として舊を談し新を説く。青松蒼鬱として庭隅に千歳の緑を籠め。涼風其邊より來つて爽快いふ可らず。これ曾つて父が手植せる處のものにして。余が郷にありしの日猶は尺に充たず。其雌雄二株名けて夫婦松と稱せしもの。今や既に長じて丈餘に至る園には白百合あり石竹あり。葡萄あり。花柘榴あり。夏菊あり。芙蓉あり。夏菊は今を盛にして。芙蓉は未だ蕾をつけず。「我身ひとりほとどの身にして」「昔の人の袖の香する」「年々歳々花相似。歳々年々人不同」「花發多風雨。人生足別離」等の感一去一來喜憂交至る。門側に一楓樹あり。父はいふ。ふれ余が

水戸城趾より移植せる寸餘の苗木なりしと。此窓に薔薇の一叢あり。四季紅葩玉英を綴る。これ又余が挿木せる所のものたり。老柿樹は枯れて。若木の栗胡桃は天日を遮るまでに及べり。桐は早や少妹婚時の簞笥をつくるべく。杉は以て父が養老の居を構ふるの柱たるに適せり。桃李漸く食ふべく。菜瓜尤も味ふべし。二三の友あり來つて余が歸省を祝す。時に門外鼓聲笛音相和して起る。絃歌亦騷然。これ余が邸前に於て東照宮田植祭（昔し神田を挿秧したる後之を祝せるの餘風なるべし）の爲に舞臺を設けて演劇を催すなりといふ。歸省せる息子舌うちす砂糖水。一年二尺一丈の若楓。

竹の皮落つる音聞け夕涼
 田植祭白地の浴衣揃なる
 水戸の地舊六月中は田植祭殆んど連夜芝居あり茶番あり踊あり
 晩涼よりして夜半に達す其尤も盛なるは祇園會なり六月十三日
 よりして十七日に至る余は期に後れてこれを見ず東照宮田植祭
 は二三年前よりして新に行はるゝといふ

(一一)

水戸城を去ると東方三里。那珂川の長流海に注ぐの處。一勝景あり
 大洗といふ。毎歲夏季炎熱の候に際すれば。浴客四集して大に喧嘩
 雑鬧を極むれども。青松白沙自ら俗界の塵を擯く。巨濤怪岩を嚙んで

飛沫雪を飛ばすの曉。冲天迷濛として帆影港に落ち。玉兔波を蹶つて金波激漉たるの夜。浩然として長嘯樓頭に立てば。渺漫たる洋上海風千里より來り。勇志自ら沸勃大鵬一搏九天に翱翔するの感濶然禁する能はざるを覺ゆ。余は父と共に翌廿五日拂曉余が妻兒及三少弟を伴ひて大洗に遊ぶ。水戸よりして大洗に至らんとするもの多くは陸行せず。杉山海岸に至りて瀛船に投ず。其賃頗る廉なり。去れど余等の杉山河岸に至れる時。不幸瀛船は既に大洗に向けて出發せる後なりき。故に不得已一艘の和船を賃し。一行七人これに投じて那珂川を下る

那珂川は源を下野の那須山に發し。迸奔して常陸の境に入り。漸

く大河をなして。水戸城北の要害となり。急流東下那珂湊に至りて太平洋に注ぐ。其延長三十餘里。鮭魚を以て夙に世に稱せらる。水深くして且つ清く兩岸の風色又畫けるが如し

清き流これを挾みて夏木立

船頭の住む家ならん胡蝶花

岸頭處々男女數十の工夫築堤するものあり。其爲頗る緩慢。歌に和して一舉一動す。恰も兒戲を見るが如し。父の曰く築堤の工如此ならずんば。以て其堅牢を致す事難しと其和する處の歌。音調奇且妙蟬鳴くや築堤の工夫なまけたる

去秋の氾濫によつて枝川橋は流失せり。二條の鐵橋は架せられたり。

一は太田鐵道によつて。他は常磐鐵道によつて。余は後者の前者に
 比して數倍の良築造なるを認識すると共に。太田鐵道會社の前途に
 就て懸念する處無き能はざりし。右岸に一蒼丘あり御調矢場と稱す。
 舊時水藩の土砲術を此處に修練せるかりといふ。今や荒蕪僅に河岸
 の風致を加ふるに過ぎず。轉だ「鐵砲の稽古のあとや閑古鳥」の句
 を回想せしむ。御調矢場の邊一抹の輕縑を飛ばすもの農人麥の穗焼
 をなすあり

麥燒くや烟硝臭き煙もなし

村童の嬉々として水中に遊泳するあり。野翁の默乎として釣を垂る
 あり。蟬聲綠蔭に生じ。犬吠桑園に聞ゆ。千仞嶮嶮の山なけれど

も。泓澄碧冷の水あり。舟子櫓を休めて歌ひ。余は舷を敲て吟ず。
 船下る事二里餘河幅漸く大なり。涼風面を拂つて。素衫軽く驕陽も
 傘下に其威を逞ふする能はず。既にして船岩船山の麓に達す。涸沼
 川茲に會流す

岩船やたしかに酌もよい處

水戸景山公嘗つて水戸八景の勝を求む。岩船の夕照其一たり。翠巒
 碧嶂嵯峨として長江に臨み。上には老松挺々蟠踞して千峯の緑を聳
 かし。下には漁舟釣舸泛々相往來して銀瀾金波萬頃に動く。山上孤
 刹あり。朝鉦暮磬寂寞として幽趣窮りなし。對岸遠近の漁家隱映出
 沒。新に一面の畫屏を開く。櫓聲棹歌松風濤拍に和して。魯陽戈頭

夕陽斜なるの時。常娥粧閣月扇を懸くるの夜。載酒把琴來つて此仙境に遊ば。人生の快事安が天堂蓬萊に求めん

いつの世に誰が乗捨し岩船の

ろの帆柱か松の老木は

(四)

船祝町に達す。對岸湊町との渡口あり。去年新に河口に臨みて百八十餘間の長橋を架せしも。枝川橋の潰落せしと同時に。虹形半ば絶えて今や其床礎の幾分を存するのみ。余等一行舟を捨て、一茶店に憩ひ。一杯の冷水を嚼んで渴を癒し。廓内をすぎて子の日の原に至る。砂礫悉く熱して蒸暑燬くが如し。共に大洗神社の森に向つて走

る。綠陰風涼しく流汗俄に冷かなり

肌抜いて休めば眠し蟬の聲

大洗神社は大洋に面して兀立せる高丘にあり。老松鬱乎として風景絶佳。石階の上に立つて瞰下すれば。奇石怪岩海中に出没し。波濤奔騰散しては岩頭の花となり。疑つては平汀一帶の素練を見る。颯々たる松風。簌々たる濤聲。相應じ相和して。烈日も竟に其威を加ふると能はず帆影遠く去來して。釣舸近く往還す。左顧すれば湊より前濱に至つて灣形屈曲し。右視すれば鹿島灘をへだて、犬吠岬遙に海中に嘴突し。烟波縹緲名畫も其神を寫す能はざるべく。詩聖も終に其筆を焼かん。石階を下つて清泉の潺湲として迸湧するあり。

之を見るも麗玉の如く。之を掬べば甘冷水の如し。泉に従つて小舎を構ふ。眼疾を患ふるもの横臥して。以て其患部を洗滌すれば。平癒旬日ならず。皆神恩の偉大なるによると傳ふ。舍内常に十有餘人の病者を以て満さる。此神専ら漁業を守護するを以て。初松魚の如き先づ其祠前に供し。而して後に在らずんば土人敢て食はずと。此地有名なる割烹店二あり。一を魚來屋といひ。一を金波樓と呼ぶ。余等後者の三層樓に登る。眺望尤も佳なり。樓婢を招ぎて鮮鯉の食ふべきあるや否やを問ふ。婢曰く頃日一尾の高需に應ずるものあり。菅鯛鱸の以て供すべきあるのみと。余聊か失望の感無き能はざりしと雖ども。又如何ともする能はず。酒食を命じて浴室に入り。浴し

罷んで席に還れば調理既に成る。吾兒及三弟先づ食して樓を下り。游泳を試む。去れど海中に其技を恣にし能ふもの年長二弟のみ。末弟は砂上に匍匐し波來つて靜に四肢を浸すを待ち。吾兒は家内に於ける暴虎將軍たるに似ず。此新識ある狂濤激浪の前には。徒に一個の乳猫兒たるの觀あり。唯僅に水中に其足を没し能ふのみ。既にして少弟等岩角の間に奔走して蟹兒を捕へ。以て吾兒に與ふ。暴虎將軍忽ちにして悲鳴をわぐ。これ蓋し蟹刀の爲めに傷けられんとせしなり。長弟蟹兒を捕へて其刀を折る。依て以て免るゝを得たり。余拍手哄笑頻りに快を呼ぶ。父樓を下りて海水に浴せんといふ。余又これに隨ふ。吾兒余が海中に入るを危ぶみ切み之を止む。余慰諭し

て父と共に游泳するもの少時。肢躰漸く冷にして又午熱の酷烈を感せず

松風颯々心太賣る店は何所

時に輕舸一葉の矢の如く進み來るあり。一人の男は金波樓よりして走り出でぬ。手に魚籃を提げて舸中の漁人と語る。忽ち見る漁人數尾の魚をとつて遙に之を砂上に擲つを。銀鱗潑潑として砂上に躍る。魚籃を手にせる男は悉く之を捕へて籃中に收め。漁人は再び輕舸を飛し。曳々浪に従つて去る。傍人に問へばこれ鱸魚なりといふ蘇東坡も賞て食ひたる繪かな樓にかへつて更に酌めば。樓婢一皿の魚鱠を勧めて曰く。これ目前

貴客の傍に潑潑たりし處のものと。噫果して然るか。食はずして其味既に佳なるを覺ゆ

沖に釣る蟹の小船を漕ぎ寄せて

魚賣る磯の風ぞ涼しき

當地方漁業の事に關しては別に説く處あるべきを期す昨年の漁獲の如き平磯濱のみにて十五万圓に上れり祝町に遊廊ありこれ水戸藩公の城下よりして此地に移せるものたり故に今日といへども水戸市中に一ヶの娼樓なし藩公の明斷聞く人之を稱す

句老て天に月なし。吾公去つて三秋已に蕭條。誰か蚤賓閣上の興を
 解す。吾來つて今や昔日の風韻を追はんと欲すれども。未だ兔爪の
 空翠を破るだもなし。徒に晚涼を追ふて水城に歸る。途中句あり

車夫老て路はかどらず綿の花

田草取る嫁の菅笠新しき

馬子の汗ぬぐふ木蔭や清水湧く

清水あり甜瓜を冷し翁これを賣る

最後の句頗る奇調或は名けて流行躰とも稱すべく新派とも稱するな
 るべし。此日いばらき新聞を閲して。米門の高弟永井鳳仙子の歸省
 中なるを知る。翌朝書を寄せて以て報ずる處あり。書未だ達せず鳳仙

子早く既に余が歸水せるを聞知し。遠山不眠坊（大學生）小林湖畔
 （京都高等學校在學）二子と相携へて來り訪ふ。共に新俳壇の秀才と
 稱せらる。麥酒一行文を論じ俳を語る高談雄辨四筵を驚すものみれ
 かり。翌々日を以て共に相會し。勃々たる万丈の氣焰を戦はし以て
 平素の積鬱を一掃せんと約せり。午後余は鳳仙子を訪ひ。共に千波
 湖畔友鷗亭に赴く。亭は湖を隔て、階樂園と相對し。後は懸崖丈餘。
 竹樹蒼々として烈日の照射を遮り。飛泉數條あり清きと瑠璃の如し。
 前は湖水の半面を望み。又階樂園よりして妙法ヶ崎梅香岡等の一帶
 を見るべし。妙法ヶ崎よりして蜒々蛇行し。鐵車の軌道を横斷し櫻
 川に橋架して湖の一端を劃するもの之を東京街道とし。猶は梅香岡

の窮する處遙に梅戸崎を認む。亭は近く蓮花亭々紅白を争ひ。青藻
 綠葦風致自然の妙趣に乏しからず。亭中老夫婦あり。粗野朴訥去來
 唯客意に任じて。更に追從輕薄の行なし。爐前に茶を煮。亭後に浴
 湯を設けて客を饗するのみ。他は團扇と棋局とを供ふるに過ぎず。余
 密に思ふ斯翁これ當年の桑屋三夢に似たりと。楣間に巖谷翁の書を
 掲ぐ。友鷗亭の三字たり。墨痕淋漓青樓紅閣見る所のものに異なり。
 余等が至れる折。千波近村の村吏十餘名。酒を提げ鷄肉を齎して來
 り相獻酬し。頗る喧噪を極む。依つて鳳仙子と相顧みて亭を去る
 水亭に鷄を割き酒を煮る村吏かな
 藻の花や何の苦もなき水すまし

水亭の主翁蓮を折り茶をすゝむ

俄頃白雨の沛然として來るあり。余等狼狽走る事町餘。常磐祠前津
 の國樓に投ず。小酌余は二面の白扇を啓きて畫を鳳仙子に求む。子
 醉に乗じて筆を遣る。

墨勢平素に勝る。余又雨中の暮景を寫生せんとを勸む。子これに應
 ず。筆に従つて眼前の佳景一片紙中に見るを得べし。扁舟一葉蘆荻
 の洲に掉し。孤馬蕭々草徑の間を過ぐ。煙雨迷濛として遠近自ら濃
 淡を分ち。樓前の老杉の如き其位置に於て其容勢に於て。寫實以外
 に決して畫家の想描し能はざる處たり

白雨古杉にむせびて鐘湖に落つ

畫家醉ふて扇に畫くとんぼかな

資賓閣は水戸光圀卿(西山公)の那珂港に設けられたる處あり。公在國の節月色漸く満つるの頃に至れば。常々此閣に來つて海上の夜色を賞し給ふ。公殊に初秋三五の月を以て仲秋晚秋の月に比すべしとあし。三秋の月を稱して名月と呼ばせられき。

桑屋三夢は茶人なり。妙法ヶ崎の邊神崎に庵を結びて寡居し自ら樂む。西山公一日蒿舎を訪ひ茶を乞ふ。三夢足痛あり稚兒の如く公の御前に足を投出して茶を献せしといふ。公謝禮として蘆屋釜を賜はる。又三夢の用ゐる居たりし釜に銘を横雲と給ひぬ。蓋し三夢の如きは茶仙あり

(六)

翌日余は偕樂園に遊べり。景山公偕樂園記を撰して曰く。非管以供他日裘褐之所。蓋亦欲使國中之人各所優游存養焉と。ふれ我國公園の嚆矢たるべきものか。園は城西常盤村にあり(故又呼常盤公園)地開豁にして丘陵起伏。南仙湖に臨み。西筑波を望む。櫻川の清流綠ヶ岡窈窕ヶ阪の邊を逶迤屈曲して。園外を流れ終に湖中に入るあり。東は遠く三魂ヶ崎吉田の森仙波村の高岡一帯。高低參差として湖畔の勝を構ふるあり。城南の風色一眸の間に集る。園の南端一茶亭あり茶菓を賣る。名づけて梅菓子といふ。佳味尤も口に適す。此茶亭よりして崖下を瞰る。一碑ありこれ水戸八景中の一なる仙湖暮

雪の碑なり。園中梅樹數千株を植ゆ。躑躅及萩花の如き又自ら四季を飾るに足る。亭側に老松の盤々たるもの數株。其下に石局二あり。一は將棋一は圍碁の樂に供すべし。園の西北隅に好文亭あり。樓を稱して樂壽樓といふ。茂林修竹鬱葱として樓後を繞り。崖に沿ふて七曲と稱する細徑を下れば。俗寒水石と呼べる噴泉あり。雪白なる寒水石を以て井洞を造り碧水は滾々として其内より漲溢す。老杉天を掩ひ。蟬聲鳥語幽趣限なし。涼氣肌に迫りて爽快いふ可らず。泉は一所に湛へて小池をなす。池中蓮花あり芳藎香葩媚艷として人に媚ふ。これよりして竹樹の間を経て好文亭後に出で。亭中の茶室何陋庵(對古軒)の待合にうふて樓に登る。樓上夏なし。川田甕江詩

あり曰く層樓曲樹臨平野。怪石奇巖倚古松。と關雪江は曰く。宿雨初收新樹暗。浮嵐纔動暮山微。王公舊樹空無主。唯有呢喃燕子飛。と福羽美靜翁は曰く。『ますらをのれこし、風やのこるらん世のなみならぬ園の涼しさ』と春花秋月時として興あらざるなし。雪時且賞仙湖景、又此園中の専らにする處
 松の露石局に落つ幽なるか
 白百合崖に咲きて幼子兄を呼ぶ
 子ばかりを船に残して藻荇かな
 近來仙波湖水や、涸れんとして。水草頻りに長生す。目下浚渫しつゝありといへども。充分の功果ある可らず。唯那珂の支流を遠く疏

通して。以て永く此勝景を愛保し。合せて灌漑に使せんと計畫あるを聞くに。聊か慰むる處あるのみ。鳳仙子句あり

水とみろく蓮どころく仙湖に日斜なり

これ其實景を描きて周到なるものたり。鎮靈社及常盤神社に賽し。歸途神崎寺に至りて祖先の墳墓を拜し。又神應寺に所親の靈を弔し。今昔の感禁する能はず

山寺の仁王口開いて蜘蛛の子を吐く

人の親の青鬼灯を手向たる

夕顔や墓石の文字讀難き

手向たる櫛に憐れ蟬のから

翌余が爲めに鳳仙佛骨不眠坊湖畔諸子津の國樓の閑室に會せりとの報あり。去れど余は此雅會に列するの榮を失へり。後深く諸子が幹旋する所ありしを知り。空しく遺憾の念を懐けるのみ。翌日佛骨鳳仙二子余を訪はる。則ち共に連珠吟を試む。鬪をさぐつて不幸余は發句をなすに至れり。一字を題せり

一天星満ちて句氣骨に入る

詩なるか語なるか句なるかを知らず。詩語句奇怪なるものといふべきのみ。いはらき主筆佐藤氏又、余と相見んとを望まると去れど翌早朝余は出發上京に決せるを以て。唯一句を氏に残せるのみ。

君に逢はでかへる怨や青嵐

噫霞水筑峯懇に汝が送迎の勞を謝せん。總ての知己は他人となり。親友は仇敵とあり。世人は紛々たる俗界の榮枯を以て。余に接する事冷熱自ら異なりといへども。霞水筑峯噫汝が今回の厚意をして願くば永世無窮たらしめよ。

二度夏に逢ふ心地なる歸京か
借宅のいよ／＼狭き土用かな

● 綠陰紅燈

◎花菖蒲 ◎ 土万松平の人々の丹精空しからず眺あさかの花がつみも都の内に粧を改めて天保以來名花の數を出せり米麥も水害多くして

作るに由無き堀切の村落は此花に養はるゝよと去る人の語りぬ小高園の祖先が富士詣の土産今は如何なる名にか咲くらん

正宗の小壘ならぶや菖蒲園

◎杜鵑 ◎ 杜鵑は雨に聞く可きものなり深夜に聞く可きものなり遊子慕郷の涙 情人後朝の怨吾れ其の聲を聞く毎に必ず之れを思浮べざる事なし

旅日記つけ忘れたり杜宇

◎新茶 ◎ 一椀の清香須磨の關守も夜や寐られぬ頃なる可し閑庭日長ふして碁客未だ至らず松籟死し去つて窓外啄木を聞くの時小童流泉を煮て玉露仙味多し

詩を添へて自園の新茶もらひけり

◎金魚 翠簾風を迎へて檐馬聲鏘々隣人は語る豆苗長ずると數寸と
家婢は言ふ梅子既に酸味を帶ぶと前池藻萍の間隠見金鱗遊ぶ其美其
艶筆に規す可らず

附木船覆へしたる金魚哉

◎大相撲 櫓太鼓の響八百八町の夢を破つて蝙蝠飛ぶ誰彼時勝負附
賣る聲巷々に通ふ常陸山、梅ノ谷人氣は立つ幟幾筋土俵の砂の數限
り無き好角家の役にも立たぬ瘦腕や擦らん

若葉越し太鼓櫓の高う立つ

◎祭禮 夏の祭は勇しく心地好きものあり揃ひの浴衣派手を競ひて

万燈の武者繪髻は五月蠅し黄麻の襷に繋がれし達磨起上るに由無く
樽御輿に飾られて澁團扇頻りに飛ぶ
短夜や母は祭の揃衣縫ふ

一掬の涼味

土用中の涼しさは嬉しからざりしにはあらねど残暑となりてよりの
照込み米のなる木知らずと言はるゝ都の人と共に住む身には唯苦し
き心地のみぞすなるせめては午睡にても貪らんと思へど朝日夕日に
攻立られて夢落付かず去ればよ家賃の安き家には棲むまじきものな
りけり

枕持つて寢所さがす暑かな

星ヶ岡はいと近し俗物共の寄つてたかつて溜池を埋立て、より船通
ふ可き景色をさんぐくにしてのけたれば折角の眺は見る影も無くな
りにたれと緑陰鬱邃猶涼味の追ふ可く尋ぬ可きもの無しとせず晝は
蟬聲梢に高く夜は虫語崖を廻つて静なり社鼓朝の露を振ひ亭灯夕の
風を迎ふるの時茶を煮るに適し碁を圍むに宜し

蟬鳴くや丸裸にて碁を圍む

朝夕は凌ぎよしと近隣の人の挨拶交はずを聞きて歐陽子ならんには
髯をひねつて噫之れ秋聲にわらずやと歎息する處なる可し小庭に種
蒔きて樂しみ待ちし朝貌は蔓既に生垣を這ひ餘りて猶朝々の色無し

いともどかしみ繁合へる葉など搔分けて見るに蕾のニツ三ツやふ
くだみたり傍に立てる童を顧みて今幾日ありてといへば片手の指二
ツ折りて示しつゝ嫣然に打笑めりける

朝貌の蔓細りけり秋の風

足無性の番附見立に東の横綱とまで學友に推れし程の吾なれば都
に入りてよりは一入無性は昂じて足冥理にや盡果てけん脚氣といふ
病にまで取附かれし身の湯下清香露杯の眺慕はしからぬにあらぬ
ぞ不忍まで行くが厭さに蓮の花見るに一番近きはと聞けば芝公園の
辨天の池ころと勧められて未曾有の早起して或朝午前八時といふに
行きて見ぬ日は高く昇りたれど木影涼しく小鳥に追はるゝ蟬の羽に

露こぼれて病葉の散るに浮く鯉鯉真鯉の徒に泡を一つ吐きては力無
げに沈むも興深しや蓮は花盛を少し過ぎたれど猶見る可き姿無きよ
非ず幽香表に薫じて辨天堂に打鳴らす磬の音も自ら尊くは覺えたれ
「乗る事はまだ望みなし」と古人の心にひかざるゝぞなかゝに罪多
かる

蓮の花坊主となりて秋の來る

芝浦の海水浴としいへば常に俗地とのみ思なして遊ぶ事稀なりける
を今よりは四年前の夏強ひて伴はるゝ事ありて行きしは月ある夕を
りけり夫より年々歳々自ら見ずして思ひはかりし事の過なりしを知
りておとづるゝには至りつ今年も去る日いと暑かりければ行きたり

浴みして糊板の如き浴衣涼しく欄に寄りて沖遠く打見遣れば空は低
き邊より紫立ち夕日に染むる雲の色々水に落ちて波平に歸帆歸帆を
追ひ漁歌聲櫓に和するの景神飛び魂去つて羽化登仙の趣乏しからず
隣樓の生洲に孤鶩の閑に逍遙するあり背後に二條の波線長く引きて
静中の動意自ら脈々たるを覺えぬ彼は世を怨みてか生を樂みてか友
を呼ぶ可き聲はある可きに………雲は光を失ひて何處にか失せぬ
空は次第に澄み渡りて銀河白く今や東天は次第に明け渡り正玉兎
波を洗んとはすなり心無き友はいざとて盃を勧めぬ顧みて満引一笑
すると同時に一道の金光座を射ると急に侍婢月よと叫ぶ俗地却つて
俗ならず仙氣横溢す

波ひた〜織出したる風涼し
其船よ月を何處邊も残したる

●涼と暑

(上) 暑き家

共同掃溜の臭ポカリと風に通ふ裏露次。家賃と共に低き家根の。軒先暗く數十の蠅群れ遊びて。拂へども〜つぎぬは蜘蛛の巣と借錢。かへす踏板の下に蟻穴を穿ちて。動物學者には乙でげす楠柯のゆめも。結び下げたる簾は古び破れて。上がれば六疊の疊悉く表綻び床をはちれてブハつくもよけれど。無惨や彼方此方に腸を見せて。

蚤はゾ〜升ではかる程湧けり。六疊の内三疊は。古戸棚古葛籠布呂敷づゝみの爲めも填められて。僅に残る三疊に火鉢あり炭箆あり玩物箱あり。食ちらせし干物の屍狼藉たる能代の膳あり。襪にくられたる貧乏徳利横はれり。土鍋あり破團扇あり。一人の病みたる老父と。餓じさうなる顔したる三人の子供とあり。病人は蒸すが如き暑さ。病に身軀の苦痛を覺ゆるが爲めに。絶へず唸き嘆きして寝がへりうてり。子供は八歳五歳二歳ばかりあるべし。一人は絶へず何事をか囁づり。一人は泣虫にて聲を惜まず泣けり。一人は彼方此方這摺りて。灰をつかみ土瓶を覆へし。果てに居小便をしつ掌もてピチャ〜とうてり。風の通ふべきは東向なる勝手元と。西向

ある小窓のみなり。されど小窓より西日は鐵をも熔すべき光を射て。向ひの質屋の土藏焼石の如く。夜に入るまでも熱氣を送れり。廳て夕暮となりぬ蚊は總軍を揚げて。彼方此方より一大進撃を試みんとして軒先に呐喊せり。ガタつく二人乗の車を挽きて。此家の主人は稼につかれつゝ歸り來れり。繼ハギある紺地の被衣に。汗鹽は白く地圖を畫きて。土塵にまみれたる脛には流るゝ汗猶幾筋かの河をあせり。眼凹み頬こけて髯疎にのび。恐るべき死の相は彼を十年ならずして墓石の下に見棄つべきを豫告せり。子供を叱りつゝ勝手元より出で來れる此家の妻は。垢染みたる白木綿の二布ばかりして。身に短衣だも纏はず。齒糞黄ばみたる口。かきむしりたる枯草の如

き髪。寄らば如何なる惡臭をか感ずらん。良人が投出す小錢を。八歳ばかりなる長子に與へて米屋へと走しらせぬ。程なく家中は煙となりぬ。蚊の總軍は突貫すべき勇氣うせて。遂に何處にか潰走せり。三疊足らずの疊に六人は身を蚤蚊の犠牲としてねふらざるべからず。噫夏は此家に如何に無情の威を以つて臨むや。冬が此家にあせし虐遇を。汝來つて再び繰返へさんとするや。何ぞ涼しき風を贈らざる。何ぞ一杯の水を惠まざる。汝をして帝王たらしめよ。歴史は千歳世に極むべき痛罵を以つて。汝が暴戾殘忍の罪を鳴らさん。噫憫れある一家よ。一家の爲めに夏と冬とは寧ろ世に無からしめよ

(下) 涼しき家

塵の浮世の苦しき暑さは。水にすむ河鹿の聲聞くからに面白く。掌
 を打水の滴。たれし翠簾に風渡りて。前栽の緑色濃く繁合ひたる彼
 方此方。床しくもるゝ燈籠の燈影。奇石を築山の前に疊みて。玉を
 砕く一練の瀑泉。落ちて淀みて心字形の池とある。池よ添て柳は緑
 の髪をうゝぎ。蓮花紅白亭々として。濁に染まぬ色香世に勝れぬ。
 香木を匠みし臺の欄。水晶を刻みし數間の障子。坐につけばヒヤリ
 とする敷物。如何なる國よりか渡りたるらん。挑げて秋は通ふ數箇
 の提灯。これをや岐阜の名産といふめり。
 蟬鬢。花顔いづれ劣はなき柳の腰元。玉の肌は雪とスキヤの。裾か
 ら薫る涼風坐に満ちて。又々ゾツとさせる主公の物好。吾愛三夏日

長一。とは唐人にもかゝる全盛の者ありしや。知らず。
 奥方は奥方丈けに立勝りたる御標緻。湯上の髪つやゝかに鶉の羽を
 照り。品は何なるべき白地の浴衣フワリとゆるやかに召され。腰元
 に籐編の長椅子を高欄近く据えさせ。これによりて氷をと御意ある。
 レモンに致さんか蜜柑に致さんかど。商人めかして一人の腰元打笑
 みつゝ。玻璃の器に一塊の氷を盛り來り。小さき銀製の氷鉋とり
 よせ。コップを左の手にとりて。右の袂を口にて咬へつゝ。サツ〜
 と氷をうぐに。氷は雪となつてコップに堆し。傍なる腰元蜜柑水の
 入りたる壘のキルクを抜きてこれに加味し。青螺をもて山水の象眼
 したる紫檀の盆にのせて。いざめしませとさゝぐれば。奥方はニツ

コト笑えまれつゝ。これを飲のみ干ほし給たまふ左右さゆうよりは。絶たへず團扇うちあはをと
りて煽あほぎまゐらする腰元こしもこもありけり。

主公しゆんこうは星ヶ岡ほしおかの茶寮ちせうに納涼のふれふの會あひあひありて。歸かへり來きませるは八時前後はつじちゆうごありき。直ただちに浴室よくしつに入りて腰元こしもこに汗あせを流ながさせ。大形おほがたの浴衣ゆかたに白縮緬しろちぢめんのシゴキ無造作むざうさにグル〜とまきつけ。葉卷しやがくゆらしつゝ。奥方おくがたと共に臺うたなに登のぼれば。ビールあり林檎りんごあり。奥方おくがたは琴こをとつて鈴々しやうしやうと奏かなで給たまふ。清歌妙曲せいかめうきやく涼意益々りやういますます動く。主公しゆんこうは猶飽足なほあきたらでや。避暑ひしよとして逗子づしに遊あそばんか。大磯おほいそか日光にっこうかと仰おほせ給たまふ。奥方おくがたは磯部いそべの別莊べつさう然しかるべしと答こたへ給たまひぬ

噫あ、なつ夏すむよ涼すずしき夏なつよ。汝なんぢの權威けんいと富おそとを恐おそるゝ物ものなるかな。汝なんぢは忘れ

たるかの如ごとく。否心いなこころあるかの如ごとく。自みづからの職分しやくぶんを棄すてて秋公あきの本領ほんりやうを犯おかさんとす。汝なんぢをして形躰けいたいあらしめよ。面おもても唾つばし頭かうべを撲たたつて櫻川たいこ某もちの手に托たくせん。

● 孟 蘭 盆 會

「此魚このいさなを親おやにあげたや魂祭たままつり」と、古人こじんの句意妙くいめうなるかな、儒教じゆけうの説せつく處ところ、佛道ぶつだうの導みちびく處ところ、孝かうを以もつて人倫じんりんの大常たいじやうとせざるなし、儒にに孝經かうけいあり、佛ぶつに報恩品ほうおんほんふ父母おんの恩おんあり、彼の基督教きりすとの如ごときすら、神かみを以もつて父ちちとし、基督きりすとを以もつて子ことし、聖經せいけいを通とおじて比喩たごへを親子くわんけいの關係くわんけいにとれるもの多おほし、夫れ何なんの恩おんかあつて父母おん掬養きくやうの恩おんに過すぎん、山やまの如ごとく海うみ

の如し、人其父母を失ふや不幸何物かこれより甚だしき、朝夕に之を思ひ、春秋四季之を祭り、夢寐恍惚以て長に其恩を紀せざる可らず、左に少しく孟蘭盆に關せる面白き事柄を集めん

「釋氏要覽」に曰く孟蘭盆會は、これ釋氏の孝を述べ恩を報ひ、苦を救ふの要たり、目蓮の母をすくふを以て始とす、梵語には孟蘭此に救倒懸（倒懸救器なり）といふ、盆は北方の器なり

（日本記）に曰く齋明天皇の三年七月始めて孟蘭盆を設け同五年勅して孟蘭盆會を諸國に下し講せしむ。

右によりて考ふるに、齋明天皇の三年（無年號）は、神武紀元千三百十八年に當れば、今二千五百五十八年に至る其間千二百餘年を経た

り、以て我國に孟蘭盆會の如何に長く行はれたりしやを知るに足らん。

「見た京物語」盆中提灯なしみな行燈をかける。盆踊の脇指菅蒲刀の如くして賣る踊にありく子ども皆いろくいろどりたる繪をかきし提灯をともさせありく踊ある町は門々に提灯出す目印にや丸き小提灯高く吊す

「老の長咄」其後我庵に人々あつまりし折から文月の事なり施餓鬼のはあしに付て目蓮母の地獄に落ちしをあげきしによりて佛はじめて施餓鬼をなせしといふとをいひしにさる人いへらく是方便のうろなり佛法をひろめんが爲めに大切なる母に悪名つけてのうろは是目蓮

ならではありがたし佛もうろとは知りつゝうあづき給ひての法會なり云々。

「吉原雜話」中萬字屋玉菊追善のため仲の町へてうちんを出しける其時水てうしといふ文句は蘭洲が作りしかりかくて揚屋町三味線彈河榮がもとにて會あり云々元文元年七月四日茶屋中より願ひ候へどもならぬ旨申年番へかまはずとぼしたるゆゑ道恕江戸町名主はらをたつ同十六日五町年寄より十八日迄ゆるしくれと願ふ云々（燈籠のはじめなり）

「公事根源」天平五年七月始めて（？）孟蘭盆を大膳の職にうなふ云々「徒草」こと年の名殘も心ほろけれなき人の來る夜とて玉まつるわざ

は此ごろ都にはなきを東のかたにはなほさる事にてありしとぞ云々「報恩經」同經に六盆といふ事あり二月十五日寅時來次日午時歸五月十五日卯時來次日巳時歸七月十四日卯時來次日午時歸八月十五日辰時來次日申時歸九月十六日未時來次日申時歸十二月晦日午時來正月朔日卯時歸。

「近代世事談」走百病の條下に昔は正月十六日にかぎる事なり後七月十六日をして終に春秋二度とす常に隙なき仕のものも此日は父母の家に来り寺院に詣で先祖を拜するなり又孤獨の者はあへて依るべき舍なしたゝ藪林の中にあろびて樂とする事なり

「用捨箱」粥の木折かけ燈籠の條下に

又魂祭たままつりに昔用ゐし折かけ燈籠ごろうも江戸には絶えたりまづ物の本ほんに見えたる種々を抄出せうしゆつす「俳諧世話書」に（折かけ燈籠腰折燈籠）とあり又「五人女」貞享三年印本五の卷「なき人の來る玉まつる業とて鼠尾草折敷て瓜なすびをかしげに枝豆えだまめかれぐに折かけ燈籠かすかに棚經せはしく」などいふ事見えたり又寛文六年の印本「洗濯物」に火をともし百合ゆりは折かけ燈籠ごろうかな

信直

又「續虛栗」に

親おやは鬼子おにこはくちをしきみ箕虫ひしよ

其角

折かけ張はらん月の文月ふみつぎ

野馬

又「秋の日」に

色黒いろくろき下部しもべつまげてかしらまり

鼠彈

切籠きりかご折かけ凄すこき夕ぐれ

一井

猶同書には其圖そのづをかゝげたり見るべし今略之同書中卷に高燈籠たかごろうの條下「畫本月並の遊」にのせたる畫をのせ頭書をひきて（前略）

玉祭たままつりとてさまぐの珍物ちんもつをとゝのへ精靈せいりやうをちさうする老若らうにやくともし火をかゝげ佛名ぶつめいを唱へかなしむなり近ちかき頃見うしちひし佛ほとけには三年の内高燈籠をともしければ云々

又「金臺録」享保十九の印本の句をひきて

吉原の灯ひをさげすむか高燈籠たかごろう

咫尺

京の東山大文字は弘法大師かうぼうだいしの初て作る處淨土寺村慈照寺村の上の山

に有毎年七月十六日兩村の土人四百餘人松明を燈す聖靈の送り火と云ふ七月六日山に入て松木を二三尺に切て日に乾す十六日の晚これを携へ山上に至る大の字の跡あり弘法大師の畫する處なり所々に少き穴を穿ち小石を以て徴とあす凡大の一字横の一畫其長四十間に及ぶ炬火十箇餘也左豎の一畫八十餘間炬火廿箇右の一畫六十八間炬火廿九箇餘携る處の薪を徴の石の上に積同時に火を點す其光赫奕たり其六日に代る處の薪誤つて他事に用ゆる時は其家災をあすと傳ふ松ヶ崎妙法の火舟岡山舟の火愛宕山鳥居の火も同日に行はるゝなり和泉式部の歌一首あり

あき人の來る夜ときけと君もなし

我住む里や玉なしの里

俳句には盆に關せるもの

盆の月ねたかと門をたゝきけり
 棚經や手まはしばやにかへらるゝ
 家は皆つるに白髪の暮まゐり
 松の葉につゝむ心をはすの飯
 客ありといろがしがるや盆の中
 はねまわる馬で迎へん生みたま
 送火や思ひくゝにひとり言
 大文字や一筆山をろめはじめ

野 宗 芭 支 句 紋 梅 蝶
 坡 居 蕉 考 空 村 笠 夢

寐た家の燈籠あはれ月夜かち

小娘のれひさきしるしかけをとり

やぶいりにもどつて京のをどり哉

等枚舉するに違わらず

未 陌
其 角
許 六

「閑窓倭筆」生身魂。七月盂蘭盆に至れば生ける兩親を供養す其盆經

にのする發願の文に曰く

願くは現在の父母をして壽命百年病なく一切苦惱の患なからしめ

ん云々

「和漢三才圖繪」に刺鯖中元の日の祝用にす云々又蓮の飯は孝妣の靈前に供し又以て親戚に贈るを禮式とす云々荷の葉を以て蒸糯飯を包

み觀音草を用ゐて是を縛る云々

盆市よて賣るもの切紙燈籠はうづき提灯素麵乾瓢空閑梨木酩酊鼠尾

草荷の葉苧柄茄子供養膳蓮花瓜生靈竹菰等の類をうる昔は踊の用と

して三尺手拭奇特頭巾大鼓團扇等を賣りしと團扇はうれならねども

今も賣るめり

定家撰「明月記」に燈籠に關せる記事あり曰く

近年民間に長竿を建て其末梢に燈籠をかけ紙を貼し擧げて遠近と

もに之を見る流星に似たり

「修行記」七月中元(十五日)の日地官下り降り人間の善惡を定む諸大聖普く宮中に詣し(中略)餓鬼囚徒共に解脱を得せしむ

「五雜俎」に正月望上元七月望中元十月望下元とす云々とあり

「續猿蓑」に惟然が句あり

かなしさや麻柄のはしも大人なみ

迎火送火は聖靈の來去を送迎するなり麻柄を門前に焚くなり迎火は

七月十三日黄昏送火は同十六日

大齋日七月十六日釋氏要覽の記する處によれば閻羅王は和譯遮惡王

の意惡をさけて行はざらしむ閻魔ふれなり此日を以て奴婢も暇をこ

りて之に齋す

經木流のあるも此日なり施餓鬼の行はるゝは七月一日より十五日迄

の間なり水灯會は川施餓鬼の一なり十六日夜宇治川に船を浮べ數百

の灯笼を點じ讀經執施餓鬼

後堀川院寛嘉二年七月初めて燭を燈す十四日夜より晦日に至る上元

下元には燈燭ある事をしと一書に見えたり

盆踊の濫觴は歌垣(一名カッヒ)の遺風なるべし歌垣とは上古男女山

上市頭相會して唱歌し踏舞し貴賤を分たず後支那より傳へし踏歌は

此類なりと盆踊の唱歌を靈元上皇の命により編せりと稱する一書あ

り諸國盆踊唱歌といふ

朝廷にては主上晝の御座の南の間にて御拜あり舊幕府にては東叡山

三縁山の寺々布施して供養せり、猶記すべき事數多けれど略す。

◎百花園と萩寺

「春夏秋冬花不斷、東西南北客爭來」と詩佛老人が書き残せし筆の跡
 文政より今に至つて猶新なるを覺ゆる百花園の春は左程に嬉しから
 ぬと秋の眺は朝の露夕の月都近しとも思はれぬこゝいとめでたけれ
 萩の枝もたわゝにして美人の力無きが如くなる女郎花の艶にして葛
 の花の寂びたる尾花の招ぎ顔ある藤袴の誰がぬぎ捨てしちぞ思出さ
 るゝ一枝一葉態を異にし色を争ふ見れども飽かず家居占めてちぞ園
 主を羨むなるべし桔梗も咲きぬ紫苑も咲きぬ金線草の鄙びたれど生
 々しき雁來紅の華麗あるが如くにして淋氣なる一々に其名を數ふれ

ば名あるものゝみにても九十六七種にも及べりと去る閑人の語れる
 も可笑し晝は蝶蜻蛉の種々出でつ隠れつ日影を追ひて暮るゝ事の速
 なるをかこち夜は虫の聲々唧々と亂れて明る事の猶遅からんを願ひ
 やはする碑前紙を裂いて句を題するの詩人あれば池塘筆を執つて破
 荷又對するの畫家あり此花をこゝ裾模様にとせがむ嬢の姿杯かく虫
 を追ふて乳母を惱ます坊やの心邪氣無しといふべし、扱見頃は此月
 中旬を最とし下旬に近づくに隨つて秋の哀れは増りゆくめり」百花
 園より龜井戸の萩寺へは馬車人力ならばいざしらず徒歩にてと志
 す人あらば園の左側より引船の流を渡りて請地村に出で東南に路を
 求めて進まば押上の堤防に出づ可し夫より柳島妙見の向河岸を横川

に添そふて數十歩問はねど萩寺は花に隠れず萩は紅白くわうはくいづれも老株に
 して既すでに二分以上の開花を見る唯遺憾たひかとする處は園内の境域頗る狭
 きの一ひと事なり去れど序ついででに天神境内に入らば此所にも萩は數十株あ
 りて韻士みんし雅客がかくの來遊を待てり萩の花を團子屋だんこやで賣るものと心得たる
 人々には如何いかなれど昨今此邊の景色けしきなか〜に見所多く百舌鳥鳴く
 木この間に柿や、色付いろづき稻子飛いなこぶ田の面は早稻既すでに刈る可く野川の水
 清きよく流れて目高の群むれの肌寒ひやげなる破れし案山子かざしの弦絶ゆづえて狡鴉更よ
 驚おどく事無なく鳴子なるこの繩なわは新あらたなれど引ひかでふ眠る年寄あなごを侮りて雀頻りに
 餌えを漁あさるなど興深く瓜の花咲く生垣いけがきを隔へたて、子守歌聞こまうたく心長閑こころなごに草
 鞋草履つるせる田舎茶屋おにに鬼おにも十八の赤襟あかだすきかけていらつしやいの聲なま訛なまれ

●つゝれの袖

るも面白おもしろからずや」其他は向島に猶新梅屋敷上野に鶯花園淺草奥山
 麻布の笑花園仙華園せんわ少し離はなれて大久保花園などなるべし

木きの間に蟬せみの聲こゑかれて

水みの面おもの蓮れんの葉はは破やれて

淋さみしき秋は來りけり

つゝれの袖を如何いかにせん、

門田の稻いねの花咲きて

野邊のべに千草の花咲きて

涼しき秋は來りけり

つゝれの袖を如何せん、

我戀人は旅立ちて

親しき友はみまかりて

悲しき秋は來りけり

つゝれの袖を如何せん、

空は夜毎にすみゆきて

露は葉毎に置きまして

うたてや秋は來りけり

つゝれの袖を如何せん。

俳諧 柚味噌

峠から峠へつゞく枯尾花

今だに残るとちの實の餅

念佛會これより加賀の國ならん

早稻刈上げて絹機を織る

檢見役を月に饗す村名主

縁緒を誇る系圖一卷

只管に憂しと見し世の忍ばれて

長の娘のひとり琴弾く

東路へ我が思ふ人落しやり

紀念の歌をつくぐと見る

誘ひ合寺へ集る公家と武家

こわれ瓶子を捨てる小流

山間の冬は月さへ物凄く

天狗の鼻の痛む雪焼

寝るべりて圍爐の澁茶すゝり立て

新曆しらぬ里の長閑けし

ちらほらと南の枝は花となり

貝殻家根にもゆる陽炎

飯蛸を甘しくと都人

書を言立に徹尋ねる

編笠の姿似たりと呼戻し

謠小聲に菖蒲葺きけり

蝸牛はろりと落つる軒の下

天氣つゝいてよい月を見る

田舎から乳母のとゞけし栗と梅

鬼灯うつとならす台所

接待の日も物堅き家風にて

唸ると聞けば金もねろろし

傾城けいせいの東あづまの方に身みうけされ

涙なみだに褪あせる袖そでの紅絹裏もみうら

布施ふせよとて伽羅一包あままゐらせて

御殿ごてんの内の急いそに淋しみしき

今日けふも亦また塀べいの落首らくしゆを取とはがし

誰たぞやあるかと疝かんはし走る聲こゑ

散ちる花はなのハラ〜と一ひとしきり

讀本よみほん借かりに出いる永ながき日ひ

◎山路の秋

壹駄いちだ三十六貫目乗掛下十貫より十八貫輕尻三貫より六貫人足荷五貫

目迄めぢと道中だちゆう荷物掛目御定のやかましかりし昔むかしは知らず汽車きしやに汽船きせんに

肱枕ひぢまくらして草鞋くさぎのひも長くかゝらず千里二千里夢ゆめの内うちにすぎで影膳かげぜんの

汗あせさめぬ内に歸かへらるゝ難有なまき世よに山路の旅たびの珍めづらしとて書かきつく汽

車しやの柳やなぎヶ瀬せより先さきは通つうせずと聞ききて俄雲助あせどもの怪あやしき駕籠かご用意よういし

つ一儲まつけせんと迫おそるを斷ことわりて手荷物片手に汗あせを厭いとはず如是かゝる時にころ旅

の眞意まことは知る可べけれと喘あへぎ〜進すすむに風雨かぜあめの爲ためめに崩くづれたる山畠やまはたに

蕎麥そばの花はな白しろく洗あらひ去いられし橋はしの袂たもとに芒穂あきかこに出いで、秋風あきかぜの動うごき涼すずし

山畠やまはたの蕎麥そば咲さいて雲白うらからず

橋はしつくる小舎こやをめぐりて草くさの花はな

柳ヶ瀬より程無く椿坂といへる村に入る廿四五軒ばかりの民家あり家の構造自ら他と異なりて藁葺ながら神寂びたり破風に水といふ字を彫めるは火難を避くるの心にもやあらん此村より先は越前と近江との境にして椿坂峠椽木峠など五里に餘れる山路峻しく中河内に宿はありしが去六月に全宿鳥有の災に罹りて鞋買ふ可き家もあらずと聞き家名ばかりは旅宿らしき大黒屋といふ晝餐したゝめ人足を雇ひなぞす女主人は胴周二尺餘なる大土瓶提げて茶など勧めつゝ昔は縣令様にも泊れしものなりしが汽車の出来てより客ある事無けれど警察より此宿に一軒も宿の無くてはと申さるゝが儘に名のみ業はすなるなど述懐聞けばいと笑止にも覺えつ山路に日暮れてはと靴

を草鞋にかへて椿坂峠にかゝる見上る兩側は山高く聳えて雲靜に動き見下す左右には溪流淙々として石に激し巖に嗚咽ふ路は悉く磊塊たる岩石にして馴れぬ草鞋の穿心悪しく幾度か蹶き人足に笑はるゝもつらし椿坂は左程に峻なりといふにはあらねど峠の長さ事二里に餘り今は樵人野夫の稀に通ふのみなれば徒に風雨の荒廢するに任せ溪流の之れを斷ち荆棘の之れを塞ぐを見る空は雲亂れて雨を催ひ風は尾花に戯れて山賊の棲家やこゝらなる可きなど思ひつゝ

牛の糞よくる路なし芒原

暫くして中の河内となん呼べる村に入るに全村五十餘戸焼残りたるは僅に數屋何時焼けしやと問へば躊躇して答えず漸くに新曆にては

知らずといふ去らば舊曆にてはと返すに六月廿六日なりきといへり
舊六月廿五日は八月の朔日なるべし去れど未だ一軒も新しく造られ
しものなし各自に焼残りたる家財を集め小舎掛けして山より木を切
りて運び鋸を入れて木取りしつゝ一人二人の大工らしき男の悠々と
手切の蓑、木の葉に巻きて口にし、鑿と槌とを手にして穴など穿つ
を見る

煙草無き里や煙草の木の葉巻

焼跡の小舎に芋煮る夕哉

斯く徒步にて峠越する人吾れのみならず前後して十餘人いたはしき
女のゆきなやむなりけり中の河内の焼残れる家の前に萱に似たる葉

の細く短きといと小さやかなる草の葉とを乾したり何ぞと名を問へ
ば萱に似たりと申せしは菅にして小さき草の葉はホウキンの葉なり
といふホウキンとは如何なる草にして乾して如何にはすると押せば
爐の邊掃除しつゝありし男のこのホウキンなりと示すを見るに都に
は草箒木といふものなり乾し貯えてヒタシとす味忘る可らずとなん
菅刈は之れ年寄の仕事かな

●冬、の山里

いたゞける柴をおるせばあられかな、宗之が風流も目前に見る驛路
の霜柱踏しだきて、細き畔道いろぎゆけば、田の面の氷朝日の影に

きらめき、遣水の潺々と音して枯れたる草の下にかくれゆくも寒けしや。案山子の笠の破れて、弦も何時か絶えたる、風に干菜からびて、木づるしとかやいへる柿の、葉もなき梢に赤ふなりたる、井の端に芋洗ふ童、椽先に綿を績ぐ姫、鄙びて淋しきが内にも趣多しや。紅葉にもれし杉の一叢左に折れて、苔蒸せし石の橋渡れば、古き寺あり、寺の庭には黄金色なす银杏葉の散り布きて眉白う長き寺男のこを掃あつめて燃きつゝあたゝまるに、煙は静に四邊をかすめ、後なる山の麓も書けるが如く朧なり、軒傾きたる本堂には住持の僧の朝づとめするにかあらん、鐘の音かすけく響きて年ふりし松が根に頭のかけたる石の御佛立てるも憐なり。寺男に路を問ひて山

路分け入るに、人通ふと稀なれば、枯れたる尾花蔓茨、路をとざして進むにかたし。脚の下より起つ鷓鴣、飛ゆく方を見上ぐれば、梢をわたる猿の群、追ひつ追れつ争ふは、如何なる木の實なるやらん、松の下蔭染め残す木の葉の今が色に出で、峰の嵐を厭ふに似たり。やうやくにして巔に至れば、遠き山々近き人里、うねり流るゝ川を上りて、見えつ隠れつする帆影、直ぐなる街道を彼方此方断えつ續きつする馬車、世にいふ活畫とやらんこれなるべし。木の切りすてし株の上に腰ををれるして、面白き景色の静なるが如にして、時々刻々に變りゆくを見やり居たる背後に、近づくものゝある氣はひしたれば、フト振返り見るに馬にも等しかるべき大きな鹿なり。

今までは動かざりし吾の、動きたるに驚きてか、鹿は蹄を立て角を
 負ひて、谷間の方に走せ去りぬ。風少し吹立ちて山靈自ら語り、雲
 洞底を出で、未だ高くは飛ばず、山樵が薪こるにか丁々の響山彦に
 こたへて、寒山無人と賦したりける唐詩の心も自ら思出られ、神す
 み氣昂りて雲に乗り風に御するの術も身に得たるが如く、掌をうつ
 て歌ふに、興しきりに來りて樂窮なし。去れど何時までか斯くてあ
 らん、幾重かさなる落葉を踏みて、やうやく谷間に下りゆくに、枯
 れたれども清く冷なる、水の白く蒼く玉となり糸となり、涓々淙々
 として落ちゆく末は谿川となりて、はては何地の海にたゞゆる。溪
 川に添ふて家五ツ六ツたてり、鷄鳴き、犬吠ゆれども、遠く塵の世

をへだて、人の心も自からゆたけく、争ふ事なく、盗む事なく、
 いとむつましふ交るを見では、都の住居のいと恐ろしき心地もして
 さらしく立ちかへるべしとも覺むざれば、永久に住まばや此山里。
 分け入れば冬ものどけしとこしへに

すまゝく思ふ山かけの里

● 磬 女 行

濠より濠に落ちてゆく 水音高く夜はふけて
 往來の人も途たえつる 辻に落葉の音寒し。
 路の傍の燈火の 影かすかなる邊には

何をか漁る瘦せ犬の
 露にぬれたる捨石に
 小竹の杖に身を支え
 霜と争ふ髪のもも
 豊なりけん肉うせて
 土にまみれて黒みたる
 身には縫目も分かぬまで
 ゆがみし背に結びたる
 かくても命捨てかねて
 嫗は今し眠りつゝ
 地を臭ぎつゝ不迷ふなる。
 つかれし腰を休めつゝ
 やつれし嫗の眠りける。
 あるか無きかにぬけ落ちぬ
 肌は自づしはみたれ。
 足にくひ入る藁草履
 破れ汚れたる單衣
 包の内や何あらん
 古三味線を抱きたり。
 如何なる夢をゆめむらん。

蝶鳥歌ふ花の下
 管絃奏つ月の宴
 やさしき君が玉盃を
 楽しき戀をちぎる夜や
 犬は嫗を見出しつ
 楽しき夢は破れたり
 輕羅に風も薫りつゝ
 玉釧露に照り添えつ
 半のみほし打笑みて
 飽くべき時もあらぬなり。
 牙をならして吠え出てぬ
 衣は露にうるほへり

●雨露覺帖

(上) 田舎のすまゐ

今は唯ねばるげにのみ覺えたれど、
 茅葺家根新らしく、
 雑木山の麓、

水清き小川流るゝ邊に建てられたる一軒家これ久慈郡里の宮村の村
はづれに、父母祖母共に水戸より引移りて住みし新らしき吾家な
りき。

木吊とかやいへる幹高く瘦せたる柿の木あり。霜寒き旦、節穴多き
雨戸縹ひらきて其梢を見上ぐれば、葉は悉く落ちたるに、柿の實は
紅もて彩りたるが如く赤くなりて、高く低く五ツ六ツ残りたるを、
鴉の二羽三羽來りて争ひつゝ啄む。小き手もて雨戸を打たゝきて追
へば、鴉は先づ靜に頭を傾け此方を見下ろして、暫し動かざりし
が、吾がますゝ焦立て、雨戸をうちならし、足踏みして追ひ立つ
る様に、ゆうくと羽づくろひして、一町餘り田をへだてし向ひの

松山を越して、一羽消え二羽消え、消え果つる頃しも、吾佳家より
は北に、一段高く、雜木山を抽きて葦高く見られたる庄家の家の邊
より、放螺の聲朝風に響き渡りて、餘響は奈落に、奈落に次第く
に沈むか、九天に九天にいよゝ高く飛び去るか、低く細くなりゆ
くを。幼心に訝しく、何ぞと母に問へば、狀使を呼ぶなりと申
されぬ。狀使とは何するものぞと折返して尋ぬるに、手紙を持ち
て村より村に走せゆく男なり、此男向ひの松山の邊に住めれば、夫
れをば來よとて呼ぶなりと、つぶさに説給ひけり。

暇ある折柄とて、父は里の子に、文讀み物書く道を教え導き給ふに、

寺子といへりしもの七八人はありけり。其寺子の内に新家の丑といへる十二三斗りなるがありき、丑は遊ぶ事にかけては、何事も人に勝り、力も並ならず強かりけれども、學問の道をばフツと嫌ひて、父母に責め立てられ、我父にもしばし説き諭されけれども、性根は更に改まると在らざりしのみか、遂には親々の目を忍びて、金銭を盗出し、叱られるれば二日も三日も鎮守の神の椽下に伏し、又は小松繁れる芝生に眠りなどして家に歸らざりけれども、吾をば如何に思ひなしたりけん、日として訪はぬ日はなかりき。吾父もあらず母も臺所に在る折など、日當りよき障子の影に足投出して、足の欠け損じたる馬に、胴ばかりなる人形、幾度か餘念なく、乗らぬものを乗

せんと試みつゝある折など、『坊ちやま居るか』と子供には似合はぬ太き聲してヌツと障子の蔭より、色黒く鼻平たく、眼のみいとさかしげなる顔差出して、笑ひ顔つくり、懐より必ず駄菓子つかみ出して『又持つて来る』との一言と菓子とを殘して何處にか去るなり。機悪しく吾傍に母などの針仕事をせしてはせる時は、黒き顔も平たき鼻も見せず、障子の切れたる穴より、菓子袋のみ押入れて去るとも多かりき。或日吾れ唯一人門邊の小川に沿ふて、蒲公英莖をどつみつゝ遊び居たる處に、何處よりか丑は出來りて、共に來よ好きもの買ふてやるべしとて手を取る。父も母も彼をよからぬ者と噂し給へど、吾れ幼心に少しも悪しき者とは思はず。連立ちて村は

づれなる、里川の流に沿ひて建てられたる家にゆき、ガラ〜、薄
 荷菓子、有平、鐵砲玉、胡麻菓子、肉桂など望むがまゝ、買ひて與
 へられ。又送られて喜び歸りたるに、父と母とは恐し氣なる顔し給
 ひて、『誰にか、丑にもらひしか、かへして來よ、捨てよ』など罵り
 叱り給ひぬ。これ程和解のわからぬ事はなかりき、丑はやさしき者
 なるに、親切なるものなるに、どのみ思ひ居けるに。丑は其後も五
 日ばかり毎日來りて、六日目頃よりハタと來ずなれり。『丑は來ない
 ね、如何したの』と母に問へば、『丑は悪いとして、縛られて柱につ
 ながれて居るの』と答ひ給ひぬ、かくと聞きて悲しく哀れになりて
 如何にかしてゆるしてやらんと思定めつ、吾家よりは雜木山を越し

て、裏手に當れる彼の家に、其日の暮なんとする頃、吾れは走せつ
 けて、『ヤア一人で如何して來さした』と驚く彼が父をにらみて
 『なせ丑を縛つて置くの、早くゆるしてれやり、丑は坊を可愛がるん
 だから、早くゆるしてれやりな、なせ縛つたの』と言ふを聞きて、
 彼が父は涙ハラ〜と流し『坊ちやま難有ふ御座います、丑の野郎
 は子、縛つて置きました子が、昨日から太田へ奉公につん出しまし
 た。遠い所へやつちまつたんだから子、大人しくかつたら又連れて
 來ますべい、ア、賢けい坊ちやまだ、此村で丑の畜生のこと尋ね
 て呉んかすつたな、坊ちやま一人だ、難有ふがんです。サア暗くなる
 から、送つて上げますべい』と吾を吾家に送り來りて、丑の父は吾

父母の前に又泣きつゝ何事をか語りしが、吾は母の膝を枕にして、
丑々といふ聲のみ聞きつゝ、何時しか眠りて仕舞ひぬ。

此村に住みたる折、いと恐ろしかりしもの二つありき、一は狐火、
一は助十とかやいへる酒亂の男にして、村には狐のつきたる男と呼
びて、女子供は、其聲をきき、影を見れば、顔色を失ひて逃げ迷ふ
りき。吾家の東北に連れる山あり、其山には折々狐火とて燃ゆ、夫
を始めて見たりしは、父と共に庄家の家に赴きて入浴し、吾は父の
背に負はれて、今や吾家に入らんとせる折、父は『アレ狐火が燃ゆ
るぞ、見よ』と言ひ給ふに、母も内より戸をひらきつゝ見給ふ。火

は炬火にても焚く程にて、明には見ゆれど光無く、少しく青みを帯
びて、二三十も連なりて燃立ち、等しくバツと消えては又一ツ燃え
二ツ燃ゆと見る間に、バツと一列につらなりて燃ゆ。消えては燃え、
燃えては消ゆ、空は薄曇にくもりて、四邊の淋しさいふばかりなく
湯上りの身にも寒氣骨に入りて、夫よりは又狐火が燃ゆるぞと教え
られても、出て見る勇氣は更になかりし。
助十は丑が家の前に在りて、家根もあれはて、壁落ち柱ゆがみ、疊
といふ疊なく荒蕪二三枚しき、残りは落間になり居りて、彼が職は
桶屋なり。村内に唯一軒の桶屋とて、獨身又は餘る程の賃をば得る
ものを、酒に性根を奪はれて、少しにても賃を得れば酒にかへて酔

ひ、酔ふたる時は村内を荒れ廻りて、更に仕事をせず。衣は破れ髪は垢つき、目の色又常ならず。彼は狐のつきたりと人に言はれうめしか、自ら言ひうめしか、果ては酔ふ度に狐の鳴聲をなし、小豆飲食はせよ、油揚げ食はせよなどいひて狂ひまわる。或時崖高き上に祭られたる稻荷の祠に酔ひて伏し居たるを、村人の見出し追出さんとしけるに、彼は狂ひ出して崖より轉び落ち、手も足も顔も血と泥とにまみれて、ヒヨロ〜と歩出せし様を、通り合せて見たるわれは、驚き叫びて家に走せ歸り、熱に冒されて二日程やみぬ。其外には天井なき落間の家根裏を、青大将といへる蛇の鼠の子を食はんとて、白き腹を見せつゝうねり行く様なりき。里の人々はこれを少しも恐れ

ず、名をば忘れたるも、折柄遊に來り居たる、十二三の娘の、竿にてつき落とし、之を手もて捕ひて、様々に弄び、高くなげ上げては之をうけとめ、襟などにまつはらせたるを見て驚くの外は無かりき。

吾家より二町餘り、小川の流に隨ふて行くに、小川の果ては、小高き山に衝當り右に曲りて、淙々音して谷間に落ちゆく。此小高き山を御富士山と呼びて小き祠あり、老爺婆々の多き所なり。老爺婆々どの此里の方言にて、山蘭の花を言ふなり、田の面の氷解けて芹三葉つむ日となり、庄家の庭に櫻盛となれば、四方の山々霞渡りて、其景色幼心にも何となく心地よく覺へぬ、寺子二三人を伴ひ、父は

酒瓢さけひさごなど用意よういし給たまひて此御富士山このおふじさんに遊あそびたるとありき。吾わがは裸山はだかやまを彼方かなた此方こなた走はせめぐりて、老婆おんち婆ばん々ば兩手りょうてに餘ほごる程ほど摘つみ取り、父ちちが酒飲さけのみ居あ給たまふ傍かたわらに坐ざして、握飯むすびを母ははが索蘇しその葉はをもて包つみたるを食くひたる時ときのうまさ、今いまだに忘わするゝ事能ことあたはず。都人みやこびとはヨモかゝる味あじをば知るまじ。

(下) 城下じやうかのすまゐ

七歳しちさいの年としの暮くれ、又また父母ふぼと共に水戸みづとに歸かへれり。梅香ばいこうヶ岡をがの下したなる、下谷したやといへる所ところに住家すまかを定めぬ。下谷したやは仙波沼せんばぬまに沿そふたる町まちにして、町の人々ひびびの多くは、其頃御獵場そのころごれうばとからざりければ、大半たいはん此沼このぬまによつて生活せいかつしたりき。鰕えび、鮒ふな、鯰なまづ、鰻うなぎ、田螺たにし、鯉こひ、雁がん、鴨かも、菱ひし、蓴菜じゆんさい、蓮根れんこん、ちど其重そのおもなるものにして鰕えび、鮒ふな、菱蓴菜ひしじゆんさいは其内そのうちにも勝すぐれたるものなりき。眞菰まごもや蘆あしの悉ことごとく枯かれたる葉はに、且あしたの霜雪しもゆきをわざむき、北風水きたかぜみづに渡わたつて渚みづはに薄氷うすらひを見る頃ころより、鰕えび、鮒ふな、鰻うなぎ、田螺たにし、鯉こひ、雁がん、鴨かも、菱ひし、蓴菜じゆんさい、十艘じゅうさうにも至いたるべし。之これを商賣ありはひとする人ひとからぬも、鰕えびをすくふ事ことの面白おもしろしとて、女おんななどの舟ふねを雇やこひて慰なぐさみ半分漕出はんぶんこぎだすもありけり。吾母わがははの親許さかは宮みやの下したとて、下谷したやよりは沼ぬまつゝきにあり。舟一艘持ふねいっさうもちたりければ、母ははは暇いとまある毎ごとに吾われと母ははの妹いもにして、十五六じゅうごばかりあるを伴ごもひ隣家りんかの女房にようばなど誘さそひ合あはせて、鰕えび、鮒ふな、鰻うなぎ、田螺たにし、鯉こひ、雁がん、鴨かも、菱ひし、蓴菜じゆんさい、四升ししやうばかりも物ものの入いるべき筈はずもて、枯かれたる藻もの邊へりをすくふに、一度いちどにて一合多いちがふおほくは二三合程かふほどの小鰕こえびを得うるなり。一日いちにちかくてあらんに

は、五六升より多くを得る事易し、商賈にする者日毎八升よりは少からずと聞く。

吾れ舟の内に行火を据え、母の前垂にて頭をつゝみ、其上に父の古き襟巻して、あたゝまりつゝ、折々は去年の菱の實の黒くかりたるが流れ来るを拾ひ、又は玩弄の手桶に水汲入れ、鰕と共にすくひ上げられたる雑魚を放し、柳の枝にとまれる白鷺を追ひ、水中を泳ぎ去る小鮒の群を驚かし、餘念も無く遊びくらし。辨當をつかはんとて、母が川柳の枝を折りて即座につくれる箸をとり、飲食ふ時の樂又なく覺えたり、柳の箸の匂ひ、これも都人にはどんなものか知り難からん。仙波村に母の親が多く畠地を持てり、吾父も下谷に來り

てより其近くに、僅なから畠地を買はれぬ。母方の祖母は丹精なる人にて、雇人へのみ耕作を委せ置ず、折々は自ら鋤鋤を採りて働さぬ、朝早く船に乗りて出で、天氣よき日などは吾家近くに船を寄せ、母にも體の爲なれば共に行きて草などとるべしと勸めて伴ひぬ、吾も母の行くべき所には必ず所く、人に其頃笑はれし如く、全く腰巾着なりしなり。麥青み渡りて菜の花黄金を敷き、見渡す限り春ならぬ所も無く、蝶を追ふて畠中の小道を走れば、雲雀驚き起ちて、朗かなる音色高く、囀りつゝ見る間に空に消えんとす。鎌を母の後より持來りて、土を山に築き、石もて家をつくり、埒の竹を細く折りさして垣ゆひめぐらし、母などの抜きて捨てたる草を集めて、庭ら

しく植え、菜の花を摘み來りて置きらばなどして遊ぶ時。母は鎌を失ひて彼方此方求め給へど、吾も此時は早くも鎌を忘れて、今や竹の枝を得つ紙を引さきて旗をつくらんとせるあり母は吾邊に鎌あるを見出して、靜に笑ひつゝ叱り給ふ。兵助とかやいへる、毛むしやらなる雇男、仙波村に住める者として、薩摩芋ふかして茶受けにと持來る、筵しき展べて、藥罐の水呑みつゝ、之をもて空腹を癒し、野鼠を捕らんとて麥畑を漁るに、野鼠の土を掘り立てゝ行くを見出し、手にせる棒もて土をかき散らせしに野鼠は居らずして、大きな土鼠一匹、不恰好なる手足して這出で、狼狽てゝ又も土の中にもぐり込むを、其上より小便してかへり、母にかくと語れば、『うんな

いたづらすると阿父さまに申して、御祭禮に金魚を買つて上げません』と言はれて、泣き出したる事あり、御祭禮といへば、東照宮の祭にして、年々舊四月又行はるゝなり。これも下谷に住める時の事なりき。裏手なる竹藪にブツチメとて小鳥を捕ふる罾をつくり、其内には米又は豆や豆餅を散らして、天晴山鳩にてもかゝれよと念じて眠りにつきしが。夜は未だ全く明け放れもせぬ頃より、これが氣にちりて目の覺めぬ。母の寒ければと制し給ふを聞かず、寢床より走せ出で、戶外に出るに、星の光は空に氷りて、片破月の影も次第に淡く、権現の森には鴉の一羽二羽早や啞々として罍をはなるゝなり。地上霜白く置きて、青苔滑なり

し庭にはの面おもても、餅もちの龜裂ひわる如ごとくわれて、踏ふめば霜柱しもばしらグサと音おとして碎くだけ、
 まだあたゝかき足あしの甲かうに、一ツ二ツ其その碎片かけたるが飛とび散ちれる、冷つめた
 しとも冷ひやたかりし。井戸いどの内うちよりは水氣湯煙すゐきゆげの如ごとく立たちのぼりて、昨よ
 宵いの滴しづくはツラ、となりて釣瓶つるべに結ひべり。藪やぶに入りて畏わなを見るみるに米こめも
 豆まめも悉ことごとく失うせて、畏わなは其儘そのまなり、失望がっかりして家いえに入いらんとする籬まがきに
 南天なんてんの實み赤あかき邊へり、一羽いちばの鴨かもの死ししたるを見出みいだしぬ。如何いかにして死し
 居かたりしぞ、定さだめて鐵砲てつぱうなどにてうたれたるならんと見るみるに傷きずもな
 し、幼おきなき吾われには片手かたてにては持もちかぬ程ほどの目方めかたあり。喜よろこび叫さけびつゝ、之これ
 を母はの前まへに持もちて行くいくに、母はもブツチメには珍めづらしき獲物いものよなど笑わら
 はれて、能よく之これを見みて居給あたまひしが、これ病やみたる鴨かもなり此瘦このやせて骨

のみなるを見みよと示しめし給たまへぬ。父ちちも起出おきいで給たまひて、捨すてよと命めいじ給たま
 ひき。捨すてずして吾われに賜たまへ、弄もてあそびにせんと言いひて又叱またしかられたる、本意ほんい
 なき限かぎりなりき。
 此外このほか田舎馬なかむまに居眠あねむりして、田たの中うちに落おされしと。母はと共ともに親許せきにゆき
 て、母はの父ちちが大事だいじにせる牡丹ぼたんを、花はなの蕾つぼみを悉ことごとく摘つみ去さりしと。螢ほたる
 狩かりの遊あそび。蟹取かにとりの樂たのしみ。栗拾くりひろひ。菖狩たけがり。舟遊ふなあそび。蛙釣かへるつり。蟬せみさし思出おもひだせば轉うた
 た昔戀むかしこひしく、又床またゆかしふのみたどり入いるなり。

◎子守唄

春の野

あれ〜彼處に揚雲雀。
麥は穂に立つ波をうつ。
寢て居る牛の尻尾が。
れ髯が痛い泣く莖。
泣くと鶯に笑はれる。

春の海

船は出る船かへる船。
帆かけて走るは帆前船。
鞠に羽子板羽子の兒。
太鼓に竹馬風車。

あれ〜此方に飛ぶ蝶々。
菜には黄金の花が咲く。
邪魔だと蒲英公がふくれば。
頭振ふるなよなアふるな。
鶯に泣くと笑はれる。

煙の立つのが蒸氣船。
船には何が乗せてある。
凧に雙六歌加留太。
夫がほしさに鯛の子が。

波から頭を出したれば。

鷗に頭をつゝかれた。

送年の詞

人の世の事の煩しさ。筆にも詞にもつくし難し。富めるも賤しきも老ひたるも若きも。己が各自求むる處ありて。二六時中さらに心安からず。兎やせん角せんと迷ひありきて。ろこはかどなくさまよひ。泣きつ。笑ひつ。罵りつ。争ひつ。よしなき罪をさへ犯し。定まれる命をだに。半にして失ふもあんなれ。
名と利と誰かは人とし人の願はざらん。さはれろを思ふの心ひたすらにして。正しき道を捨て。悪しき企にも及ばんは。いと口惜から

ずや。

世の諺にも『正直の頭に神宿る』とかやいふなる。唯人は正しき道を守り。望の足らざる時は。自らつとむる事のいたらざるを責めてたゆみなくして進まんと思ふべし。

今年もはや流るゝ如く過ぎて。師走てふ月にはなれり。世の人は巷を馳せちがへて。新なる年迎へんとてさはぐ。『今年はやからぬ年なりけん。幸なくして過ぎぬる。来る年はさもあらずあん。金あまたもうけて』などいふも愚かしや。『来る年はどりの年とよ。アナめでた。何事も来る年にこゝろ待つべけれ』など聞くも片腹いとふ覺ゆなる。人程あはれなるものはあし。人程心あさはかなるはあらず。

老に老ひて死に近よれども。迷の雲心の中に立ち曇り。邪なる事をのみ思ひ入りて。曉覺てふ尊き光露だもてらすことあし。若きはいや増りて何事にも誠心少く。『若き内に』とて諸々の罪を犯し。ろのよからぬ事してけりと。思ふ事あきにしもあられぬと。耻かはしとも思はず。改めんともせず。『年若ければ』とて自らゆるして。誇顔なるを痛ましける。

吾れ都にのぼりてより。五年が程に。其心様悪く。なす事道にたがひて。一時は榮えたる主人の。十人餘も世に沈みはて。又浮む瀬もあらずなりもてゆき。田舎にかくれはてたるもあり。夜逃とやらんしたるもありけり。夫れにはかへて。貧しく賤しかりつる人の。

心正しく身を責めて。今は世にはづかはしからず住みなし。妻も子も新しき衣などとのへて。春待つてふ嬉しき音信聞もの又十人餘なり。

目前に見たりし試を思へば。身の毛もよだつ計りに覺えて。謝禮運が笠の影とも。身にうへて忘れずなん。

舊き年悪きにもあらず。新しき年もよかるべきにあらず。人に對して信あり。親には孝。主には忠。妻子兄弟には慈情深く。奴婢を使ふにも。我身をつみて仁を忘れず。世を心安く住みはてなんころ。

何よりの願なるべけれ。悪しき心は舊き年と共に捨てよ。心より改めて迎ふる年の。いかで

人のため悪しからんやは。悪き心を改めずして年を重ねるは。悪しき心を重ねるあり。來るものは富にはあらで苦なり。待つものは喜にあらずして涙なるべし。汚れたる心もて。新なる日の光に遇ふは。耻としはぢの至りところ。れもほゆるなれ。

新玉の年の初の飾には

清き心にますものぶなき

●身のなる果

山寺の鐘の音につれて。颯と吹下ろす風に。暮れまでは夕日に錦の色をほこりし木々の紅葉。バラ／＼と枝を放れて。枯れたる尾花が

上に落ちつ。暫時を頼む程もあらせず。尾花はすさまじく長のびし
白髪ザハ〜と振り動して。うるさしと言はぬ計りにこれを地に振
落しぬ。露に睦みては夕の月に緑をたへし若葉。花を包みて榮華
の春を占めける夢さめて。霜柱 及と叢立ちたる冷たき濡地に末路
を歎く秋とはなりぬ。

細き流あり。小石に水觸れて肌に先づ寒氣を覺ゆ。岸には枯れたる
萩さては葦茅など掩ひ重りて。破れたる蛇籠に螢の光も早や見られ
ずありぬ。左に小高き杉の林ありて。いづれの梢とも分かず。黄泉
より幽鬼の叫ぶが如き聲して。梟は二聲三聲鳴き居たりしが。飛去
りしか再び鳴かず。風の音も亦騒がず。夜は次第に深くなりまさり

ぬ。右は一望荒れにわれたる野原にして。武藏野の昔をしのぶ淋し
さ。あらずもがなの燐火彼方此方に燃へて。野犬の吠ゆるも仄に聞
ゆ。捨てたる馬の屍をや貪るらん。

此所數歩の間に一ツの塚あり。六尺餘りなる苔蒸せし石の地藏立て
り。名も知られぬ蔓草。背より腹よりはひまつはりて。上求菩提の
理をば見すれど。參づる人もなければ。四時の雨闕伽をなして法身
を浴し。霧不斷の香を焚きて春秋の手向怠る事なし。尊像の腰より
下は枯草にとぢられ。數基の卒塔婆折れ朽ちて。最早や其職分に堪
へざるかの如く横たはれり。

冴へ渡りし空に泥雲動きうめて。廿日餘の月を掩ふ時。人の死の息

の次第しだいに弱よわりゆくが如ごとく。光ひかりうすらぎゆきて。ろを吐はく時亡骸なきがらを放はなる。魂たまの如ごとく。蒼あほく白しろき影所かげどころ柄からにや物凄ものすこく見みゆ。
 此塚このつかの前に人たの立たてる姿すがたあり。雲間くもまを洩もる。月つきを見上みあげたる折をり。其その怖氣おそろしげなる容貌ようぼうは明あきらかみに見みられたり。年としは四十路よそぢばかり計かなる女をんなにして。長ながく振亂ふりみだせる髪かみも。病やまひにやよりけん半なかばは抜け落おちて前髪まへがみより頭かしらの半迄なかばまで
 は赤あかき肌地はだちをあらはし。熟じゆくせる山葡萄やまぶどうの如ごとき色いろに膨あがれ上ありし顔かほ。左ひだりの頬ほに丸まるき膏藥こうやくは張はりたれども。搔破かきやぶりてか肉赤にくあかくせば濃血うみち流ながれて。唇くちびるより喙あごに傳つたへ。ポタリ〜と枯草かれくさを染そめぬ。眼めは臉落まぶたおちて目元血めもこち走ばしり。鼻はなはゆがみてあるべき形かたちを失うしなひぬ。上唇うはくちびるは嚙かみとられたるが如ごとく肉腐にくくされ失うせて。前齒まえばは白しろくあらはれぬ。濃うみと血ちを以もつて染そめた

る縊つれ縊れ、つゝれの名なだに覺束おぼつかなき迄まで破やぶれたる衣ころもにつゝまれて。昔せに一枚いちまいの古ふるき菅菰すがこもを負をへり。肩かたより左ひだりの脇下わきしたに汚よごれたる袋ふくろを下さげた
 り。帯おびといふものなく。荒繩あらなはもて二重ふたへに廻まはして右みぎの脇わきに結目長むすびめながたれぬ。吐つく息いき閣々えんえんとして腥なまぐさく。悄然しようぜん竹杖たけづえにすがりて立たてる様さま。畫ゑがける
 卒婆塔そごぼ小町こまちの面影おもかげはものかは。
 暫しばらくして此怖このおそろしき女非人おんなひにんは。何事なにごとをかブツ〜口籠くちごもりに念ねんじつ。地藏ぢざうの石像せきざうに向むかひて合掌がっしょうせる様さまなりしが。思おもひせまる事ことありてやワツと正躰せうたいなく身みを打伏うちふして泣な入りける。
 野犬のいぬは友ともよびつれて次第しだいに近ちかよれり。空そらは今いま一面めんに曇くもりて月つきある夜よとも覺おぼへず。非人ひにんの姿すがたも見みへずなりぬ。野犬のいぬは此憐このあはれなる餌ねを見出みいだし

たるを祝するかの如く。一聲高く塚の邊に叫びぬ。闇を劈く一聲の
悲鳴。噫終に飢えたる數匹の犬の腹をや肥したるらん。大雨ドツと
盆を傾けて。風又梢に荒れ渡りぬ。

狂ふ心の高麗の郡。既能とやらんに倉持某とて。名は躰をあらはす
有富なる百姓ありけり。一人娘ね艶世に稀なる美人に生れて。父母
の甘き嫉に孝といふものを知らず。世の人にもはやせられ。殊更
若き男の我一顰一笑を事々しく立ち騒ぐを見て。貞てふ心失せ去り
ぬ。見渡す畠にゴロリと水瓜の丸き盆の月。今日明日ばかりの樂み
と心浮るゝ夜半。村の學校に奉職して。美男の噂隠なき或若先生

に袖をひかれ。仇なる夢を結び染めてより。人の罵も白糸の亂るゝ
心一筋に。命も物かほと思入りたる様。兩親も我を折りて終に戀男
を養子となせり。睦しふ一年は過ぎぬ。ね艶は眼を病みて治療の爲
め東京に出で。去る病院に通ひけるが。何時しか代診某の柔姿に
志を傾け。眼は癒へたれども家にかへらず。父は強てこれを連か
へりぬ。これよりね艶は戀婿なる良人を仇の如く思ひなして。家内
一日も風波穩なる事なかりき。或夜終にね艶は多くの金子を懐にし
て家を脱れ。東京に來りて隠れぬ。搜索いと厳しかりければ。代診
の男と手をとつて大阪に走れり。大阪に一月計り日を送れる内に男
は病みぬ。醫藥も頼みなしといふに至りて。薄情にもね艶はこれを

見棄て。或旅役者に心をうつしつ。次第に悪しき淫蕩なる行爲を積み。立派なる毒婦となりて。幾度か獄につながれぬ。去れど天は未だ懲し誠しむべき罪の悉く報はれざるが爲めに。恐るべき癩病の力によつて美しき肉を腐らし。幾多の情人に注ぎし玉の如き涙は。濃となり血となつて流れぬ。故郷を忍ぶ心動きぬ。父母の安否を氣遣ふ身とはなりぬ。犯したりし罪は皆自らを攻めぬ。人目をつゝみて夜我家の門口に立てり。去れど父と母とは死し。家は主人を異にせり。噫死あるのみ。今父母の墓前に死すべしと思定めたる運命を憫れむ人も誰かわらん。知れる人も知らざるまねして。箒木をどつて追ひぬ。袖にすがり裾に戯れし男も。鼻をつまみて道をさけぬ。

噫此罪に安からぬ心の惱を、いやすべきは死あるのみ。有馬山の麓なる父母の墓に詣ふでぬ。……天は野犬の牙を以つて於艶が命を絶ちぬ。世の罪は多く世に報はるゝなり。彼は多くの寶を積むとも。美しき衣を着て廣やかなる家にすむとも。彼の罪は彼の心を日となく夜となく夢現の間にもせめて。束の間も安き心を與へず。彼は酒の力を假りてこれを慰めんとす。能はざるなり。心にもなき慈善を行ふて慰めんとす。能はざるなり。人よ罪は魂を殺すべし。汗を飲み塵を食ひて世にいやしめらるゝとも。清くして安き心を汝の寶とせよ。總ての世の寶を集むるとも。清き心の光に勝るべき寶は有べきもの

に非るなり

(完)

● 静御前

吉野山峯の嵐のはげしきに。吹き分けられし花の雲。名残は袖に薫れども。夫さへ今は生中に。涙の種と鳴る鐘の。夕を送る聲と聲諸行無常も心から。曉る浮世の淺猿しや。増して此身は捕虜の警護厳しく鎌倉に。引れくして春霞。立ちうめてより憂旅の。やつれをうつす山の井の。其處としもなき草枕。結ばぬ夢も幾夜経て。現に越へし箱根山。積る苦勞はなかくに。富士の高根も數ならず。其白雪の下消に消も入りたき我思。猶悲みに大磯や。末の歎きを海菘か

る。鹽屋の煙にむせびつゝ。ゆけば袂もなみならで。身を知る雨にうば濡れぬ。乾してほしさよ星月夜。鎌倉にころつきにける。御同胞の中あれば。よしやよしなき世の人の。讒言を申せばとて。斯くまでつらく情なき。御仕置ころ心得ぬ。宿世の縁もたいからず。現世の程も露ばかり。仇し心は持給はで。皆兄君の御爲に。源家の爲につくし瀉。かゝるべしとは不知火の、消すに消されぬ功は。知らでれはすか。さては又忘れはてさせ給へしか。こは何事を憂てやな。鶴岡にて我舞の。手振一差御所望とや。一差舞の御所望とや。……あなや……腹立しや。怨めしや。折るにまかせし路傍の花の。ろの古にてもあ

らばころ。今は主ある花の身の。散れよとあらば兎に角に。如何なる風の誘ふとも。又粧をあらためて。何思出に笑むべしや。……いやくいやくうれは賢からず。憤を包み。耻をすつるもなかくに。君の爲としなりもせば。忍ぶに何か片糸の。亂れくるしき事あらん。夫れ秦の華陽夫人は。琴歌に依つて帝の難を救ひまらせけるとかや。いざや吾もいかでかは。……去らば疾く鶴ヶ岡に参らふ。

天下に羽をのす鶴ヶ岡。八幡宮の別殿に。源氏恩顧の大小名。ならば衣紋の目もよしや。時も治まる太平の恵を袖に染競ふ。色にかやく大廣間。雖さへたゝぬ立烏帽子。いと凜々しく見へにける。

四海の敵を残りなく。うつや神樂の音につれて。君の臨御と警蹕の。聲に等しく頭をたれ。ハツと敬ふ勢は流石天下の大將軍。類なくこそ見へにけれ。御台は殊に華麗に。櫻重や紅梅の。襦衣薫る春の風。フハリと靡く柳腰。腰元女房とりづくに。晴と粧ふ有様は。四季折々の花の色。花の姿の美しくしや。

我名にも似ぬ心かな。我名にも似ぬ心よの。かゝる榮華を見るにつけ。御痛しや我君は。今はた如何にれはすらん。御身はこれ峯を放れし雲。御行衛をとへば流るゝ水の。往てかへらぬ陸奥や。淺茅ヶ原の朧月。傾く御運引かへて。やがての影を忍摺。忍びて通ふ關の戸や。さして宿かる家もなく。心は細き巖路。思は絶ゆる岩橋の。

かけて不頼む主従も。今は交互に慰めて。力を合せ氣を合せ。はる
 には逢へど梓弓。ひかるゝ心故郷に。猶迷ふらん悲しやな。
 伶人樂を奏つれば。静は黄金の鳥帽子を戴き。身には模様も花鳥の。
 色をつくせる水干を。いとゆるやかに着なしつゝ。太刀一口を佩き
 添ふて。設けの席にすゝみたり。
 實に美しや判官がさしも。情の深かりし。これや静の前なるよ。春
 調ひて梨花一枝雨を帶たる容顔。秋闌よして芙蓉露に惱めるの姿、
 繪にも及ばず詞にも。つくしはつべきやう。あらじ。扇をあげて静
 にこれを翳せば。新月光をねさめて眉にあり。袂を拂つてれもひろに
 これを褰ぐれば。落花香を潜めて腰に粘ず。……………去れど自ら。

心の憂は色にかくれず。心の憂は色に鼓の音に出で。憐をこむる
 笛竹の。一節もあるにこれは又何時逢瀬とも白拍子。差手引手も力
 なや。

吉野山峯の白雪ふみ分けて

入りにし人のあとぞ戀しき

戀しやな。知らぬ山路と詠みたりし。迷ふ心は貫之が。筆のすさび
 も身につみて。忍ぶに餘るくるしさに。絶えよと願ふ玉の緒の。い
 つまでかくてながらへん。唯頼む。君同胞の中間も。春の氷のつる
 解けて。共に榮を三千歳の。御代に逢ふべき曉を。

賤や賤々の苧環くりかへし

昔を今になすよしもかな

昔を今になすよしも。かなはずば如何にせん。

御台をはじめ諸大名。憐れと絞る袖の露。いづれ思に鬼は無き。頼母しき世に在りながら。ある甲斐も無き判官の。御連は如何なる宿世ぞや。宿世如何なる御運ぞや。

名御歸館と夕間暮。松風颯と吹落ちて。跡は淋しき御燈の。影に櫻のひら〜〜

●衣通姫

籬の邊卯の花白く。寒からぬ雪もや積むとれもはゆる曉。片われ月

の光も薄く山の端に落ち残り。寄せてひくつてふ琵琶の波の。静なるが上に朝霧淡くこめて。往來する蛋小舟の帆影も未だ風を孕まず。夜邊の枕に通ひし松風も今朝は聞えぬ軒の若葉かくれ。思もかけぬ時鳥の一聲に。庵の障子開きて立出る人あり。世を住み憂くて雲を戀ひ水に従ふ隠者なるか。三つの車に火宅をのがれ。浄土蓮台の御法を修せる僧尼にやあらん。

アナ思も掛けずよ。かゝるいふせき庵の椽に立出づる人を見るに。目元涼しくして璃瑠水晶の光を動かす。唇丹ふして蓄の花の綻ぶるをまつにも似たり。黛遠山の影をのこし。肌は越路の雪の結びなせる光澤自ら輝き。丈にも餘る緑の髪ふさやかに薫ありて。綾錦の數

は重ねざるも。御寐起の姿にもや。白妙の紗布の下に紅の御肌着を
つけらる。唐衣の紅梅重といふにもやあらん。身を柱にもたせて静
に耳聳て。今一聲もかなと思入り給ふ風姿。いかある夷も此御艶麗
ある姿には。見るから心こころ和やはらくなるべし。こはこれ賢くも允恭天皇
の御皇后の妹君にわたらせ給ふ姫君なりけり。餘り御姿のうるはし
ふ人とならせ給へば。御肌の光澤も衣をとほす計りなればとて。衣
通姫とは御名を呼びあはしけり。帝姫が美しき稀人の由聞食し。
如何にもして後宮に呼迎ひ奉らんと御使七度にもなりけれども。姫
は流石に御姉君の覺さんやうもうしろめたく。只管に否み奉りけれ
ども。あかしくに帝の思ひとまり給ふ御氣色もなし。姫はこれをし

も憂き事に覺して。乳母の尼の近く庵結びて。佛の道に心をすまし
行を修めて住みけるを訪ひ。吾れも共に飾をねろして。同じ法の御
弟子ともなりなんと打詫び給ふを。乳母の尼は押しめてさましくに
慰め。御母君の方へも此由使して申傳ひければ。母君にもれどろかせ
給ひて。迎ひの人を送りこし給ひけれど。姫は猶ほ此浮世はなれし
庵ころ。あかしくに却つて棲よけれとて。頓にはかへり給はず。今日
も主の尼は御佛に供へまづる花摘んとて出でゆき。母君より侍にと
てれこし給ひたる女房一人の側にはべりて。御母君の如何ばかりか
淋しく待ちこがれ給ふらん。疾く今日はかへりて御心をもろえまゐ
らせ給へなど諫めまゐらせ居たる處に。勅詔かしてみて舍人中臣の

鳥賊津。駒の足搔に夏草の露を踏みしだき。一人の雑色を伴ひて此庵室をばねどろかしける。去れど姫には唯御涙にのみくれ給ひて、わりなく辭み給ふに、鳥賊津も此御有様を見まゐらせては、御痛はしさに心も折れ、「君の如何に仰給ふかはしらず、兎にも角にもよきに申してころ」とて歸るも流石武夫の情なりけらし。

去れど宿世如何なる御縁かありけん、帝はいやましに焦れ慕ひ給へて、密に鳥賊津を召させられ、御文こましくしたゝめ「こたびは必ず姫を伴ひ來れよかし」と繰返しての御誕なり、鳥賊津重ねての御使、只管にいなみ奉れど、帝なか／＼にゆるし給はず。この上はたゞ死を以て姫に御旨を傳ひまゐらせ、いかにもして宮中に伴ひまゐ

らせんと、駒にまかせて都を出でしは、秋の初風身に染みて紅葉いろづく頃なりけり。

坂田の里の片邊、草の花咲く細道に、虫の音しげき夕間暮、鳥賊津は姫が庵を訪ひ「再び勅命を蒙りて御心を煩はし奉ることのうたてさよ、去れど臣として君の嚴命背き奉るに由なし、唯疾く宮中に伴ひまゐらせなん、其上はとにもかくにも」姫より君に理をつくして聞え奉らん、素より賢明にわたらせ給へば、いかで姫が御志を仇になし給ふべき、まげて吾心に隨ひ給へよ」と帝よりの御文を出し、姫にすゝめまゐらせけるに、姫は御文を手にだも取らせ給はず「帝の御情聞き奉るだに心も消ゆばかりには覺ゆれども、今隨ひ奉り

て姉君の意に違はんと、忍ぶる程ならば玉の緒の絶えなんころ勝るべけれ」とむせび入り給ふ。烏賊津聲を勵して「かくまで申し候ても御うけがひあらざるか、去ればとて此儘には都にかへり難かり、歸らば重き罪に命を墮すこと火を見るが如し、兎ても死すべきものならば、此場を去らで淺茅の露に身をまかせ侍らん」と庭前に伏して糞を食ひ、水を呑み、七日七夜に至りて肉落ち骨立ちて、食をすゝむれどもこれをうけず、死を待つ烏賊津の姿を見ては、姫も流石に心折れ、今帝の仰せを背き、重ねて忠義の人を亡ふ、其罪輕しといふ可らず、吾が身一つをなきものにして、都に赴き帝にまみえん、と俄に烏賊津にかくと傳へ、共に都にはまゐり給ひける。帝烏賊津

が姫を伴ひ來れるを見て、いたく喜ばせ給ひつ、烏賊津にかすくの御褒美あり、姫をも後宮に召し入れ給はんとせるに、はたせるかな御后のこれを知りて嫉き事に覺されければ、帝にもろをはいからせ給ひ、宮を藤原に造り設けて、姫をこれに入れ奉り、翌くる年二月梅咲く頃、帝藤原に幸し給ふ。帝透垣より姫の御居間を垣間見給ふに、姫は椽近ふ立出で給ひ、帝を戀ひまゐらせて、御聲うるはしふ「わがせこが來べき宵なり笹蟹の、くものれこなひかねてしるしも」と打返へし詠じ給ひけるを、帝さかせ給ひて其志を感じ、御返歌ありけるよし后に告げまゐらせし者ありけん、后の御けしきすぐれさせ給はねは、又姫を河内の茅

淳にうつし、帝は遊獵にことよせて、しばしく幸したまひけるが、
 或日は帝を見て申させ給ふやう「君しばしく茅淳に幸し給ふこと
 妾よく其實を知れり、去れど嫉妬よりと聞し召し奉らんことのつら
 くて、今日までは露知らず氣よて打過ぎ候へども、君としては民の
 疾苦をも察し給へよかし、」と理をせめて諫められければ、帝も其理
 には背くべきやうもなく、夫よりは御幸もいと稀になりゆき、飽か
 ぬ心地に夢地の逢瀬はかなみ給ひしも、浮世のさがとやいふべから
 んめり。

姫御容顔も御心も世になく美しくればはしつるも、つたなき御運はい
 かんともするに由なく、涙がちに年月を送り給ひ、老ひては佛に仕

へ奉りて、一向専念成佛の悲願に心を碎き給ひしと傳ふ。

◎女四人

春も早や二月の末、今日は特に四邊は長閑に霞み渡つて、御濠端の
 柳の芽も青々として、御濠の水はトロリと油のやうに淀んで、細々
 波もたゞぬ。催眠劑の染み渡るやうに、風といふ程でも無い心地よ
 い風が面をなでゝ行く、土手に金鈕のやうな蒲公英が、ニツニツ咲
 いて居る、一羽の蝶が翅も軽々と其上に暫し舞の袖を翻して居た
 が、俄に何にか驚いたやうに、パツと高く飛上つて、日比谷の原の
 方へと去つた。自分は東京府廳前の原に立つて、枯れたる草の間に、

青み渡る若草の香に酔ふたかの如く、世上の事は一切念頭に消えて、
 何を思ふとも無く見廻して居た。するとガチャリと帯剣の音がして、
 ボク／＼と靴の音のしたので、フト振返つて見ると、色の黒い、口
 の大きい、眼色の厭な光を帯びた、丈の高い看守が片手に帳簿のや
 うなものを抱いて、深編笠を被つた女囚に手枷を加つて、其上腰繩
 をつけて、今鍛冶橋から地方裁判へ護送の途中らしい。女囚は風通
 の袴に藤色小紋の下着を重ねて、一步一步燃ゆるばかりの緋縮緬を
 蹴出す、其足の色は雪のやうに白く、指などは象牙で造つた人形の
 やうに見へるのに、其指其足に食ひも入る可き藁草履を穿かせ、其
 上やわ／＼した手に鉄の枷を加つて、腰繩をつけて追立てる、こ

れ位残忍な事はあるまい。恁う思ふと、一層其看守の冷酷らしい顔
 が、愈々憎體に見へて、ア……………鬼、實に鬼である、彼は月幾圓
 の俸給を得て、這樣的職に衣食して居るのであらふ、自分が若し看
 守にもならねば衣食が出来ぬ、衣食……………馬鹿な看守のやうな、
 押丁のやうな……………土を食つて死ぬ迄も厭だ、寧ろ僕は立場にな
 る。イヤさうでない、看守押丁其職は成程微々たるものである、然
 し國家の安寧秩序を保つ上に於て實に必要なる吏員である、誰も好
 まぬ、誰にも可愛かられぬ、然も薄給に甘んじて其職に盡す、自分
 は國民と共に感謝せねばならぬのではあるまいか、處で此女囚、成
 程姿は美しい、顔も定めて美しいのであらふ、其美質……………、之

れが却つて罪惡を犯す可き尤も有力な要素である、其要素を此女は如何に應用したのであらふ、殺人、竊盜、詐欺、拐帶、兎に角一の罪惡を犯したに相違あるまい。此時女囚は看守を顧みて。小聲に何をか言つた、看守は更に威儀をつくつて、睨付けて『知らんよ、愚圖くせず早く歩け』と慳貪に叱られて、女囚は又歩き出したが、自分の立つて居る前を通り掛つて、密と自分の方を見た、其顔を見ると實に絶世の美人、自分は其美………寧ろ或魔力に打たれたやうな感がして、思はず一足下つて、ステツキで漸く體を支へた。女囚は太き吐息をして、看守に追立てられて過ぎ去つた。自分は何時何處を通つて、歸つたか家に歸つて、机に憑つて窓前の

梅花に對して居た、鶯の世の中を和げるやうな聲が隣の庭から聞いて來る、突然二枚半計の達摩風がバタリと窓前に落ちた。

●日本海の日

吾れ船に乗る事を好まず、乗れば必ず酔ふを以てなり。去る秋用事ありて、金澤より高岡を経て、伏木の港に至り、其日は一泊して、翌早朝汽船に乗り直江津まで至らねばならず。磯臭き臭だも一椀の食を減ずるに足るものを、荒海の中にも浪の荒さを以て有名なる日本海に、上等室とても無き小蒸汽船に投じ、十時間以上動らるゝ苦、先づ恐しき限なれど、人力車を雇ひて陸行するも猶ほ四五日は費さ

いる可らざる道程、他に施すべき術なければ、宿の主人に命じて中等乗券を購はせ、翌朝五時宿の下男に導かれて埠頭に至れり。解は既に二回三回と乗客を送り込みて、吾が乗りて本船に移れるはその最終のものなりし。下等船客は皆甲板に席を撰びて、食ひ、飲み、笑ひ、罵る。吾れは先づ室に入りて提鞆其他の手荷物を置き、甲板に立つて港内を見廻すに、水蒸氣一面に立ち籠めて、淡墨もて畫けるが如、半空に浮べる山の背より、今昇らんとせる朝日の影、幾筋にか分れて、閃き渡る光崇高く、水禽の翅重氣に緩やかに飛び交へる、真帆片帆の沖をさして、漁らんとてか出で行く光景、馴れぬ身には物珍らし。去れど氣にかゝるは天候の變化なり『大層好い鹽梅

たが、風でも出るやうな事は無いだらふなど』今錨綱を引揚げんとして、傍に近寄れる船員に問へば『午后から少し荒れるか知れません』とは心元なし。汽笛は勇しく朝風を破りて響き渡りぬ、積荷は悉く積入れ了り、荷主は船員に何事をか傳言しつゝ、『今度の船で屹度往くだから、辛抱して小遣でも溜めて居ろつて言つて呉れ、ハ……大層逢ひたがつてたつて甘く頼むせ』ハ……畜生奴』と悪言聞きながら頼まれて、……別れがつらいと泣いたじやないか……と流行唄を唄ひながら之れも錨綱へ手を掛く。振鈴は二聲三聲出發を告げつ、錨綱は忽ち引上げられぬ。一聲高く汽笛は名残の響をどいめて、機輪の水をさる音凄じ。吾は室に歸りて中等

を獨占ひこりじめに占めて打臥うちふしたり、甲板かんばんに笑ふ聲と、波なみの音とのみいと喧かまびすし。一時間過ぎ二時間過ぎ、船は三四回停船ていせんして、客を迎むかひ荷を積み入れたるらし。今の内にころとて一寢入寢ひこねいりねて、目を覺さませば、荒磯あらいそ海みに近ちかしと言ふ人の聲に、甲板かんばんへと攀登よちのぼりて見るに、實じつに珍めづらしき絶景ぜつけいかな。長汀曲浦透迤ちやうていきよくまらだとして、老松らうしやう所々に亭立ていりつし、陸りくには漁家點ぎよかてん々、海うみには漁舟ぎよしゆう泛々として、網あみするあり、釣つりするあり、好畫材こうがわざい、又好詩材こうしざいたり。本朝多く和歌わかにありらみの縁語を用ゆるも又所以ゆゑある乎やなど思おもつゝ過ぐ。傍わらわに立ちて吾れと同じく此景このけいを眺ながめ居ゐたる旅商人あり。

* * * * *

随分女ツてへものは恐おそしいものです。俺われは此通り年二度、春はると秋あきは門徒もんごの佛具ぶつぐを持つて、越中越後信州の方まへまで廻まわります。仕入しいれですか、仕入しいは金澤と京都です、金澤でも唯今たいまは立派たひまに仕上げます、然しかし相手あいては京物を喜よろこびますで。へい佛壇ぶつだんは皆陸迴みなりくまわしにします、一ツの佛壇ぶつだんで二百圓三百圓といふのを毎度二ツ三ツは屹度きつこ注文ちうもんされます、何なにしろ身代しんだいの半分はんぶんは佛壇ぶつだんにかけるといふ位くらいですから、別誂べつあつらいとなると大したものおほなものが御座ございます、小道具類せうどうぐも外ほかの御宗旨ごしゆじのは賣うれません。夫つまれで商あきなに出せば二月三月とかゝる事が御座ございます、サ其留守そのろすに旅役者りやくしやと密通ちやくつて、旅先たびさきから爲替かわせで廻まわした金、家に在あつた目欲めほしい品物しんぶつ一切賣飛うりこばした金を持つて逃にげ腐くさつたのです、俺も夫つまからといふ

ものは商賣に出るのも厭になつて、此春は到頭怠けました。スルト
 難有いのは御得意で、なせ來ない、此秋は是非來い、外の手から燈
 蓋一ツ買ふ氣にならぬ、金が入用ならば先へ送つてやると……………
 實に他人様でさへ恚う仰しやつて下さるのと思ひますと腹が立ち
 ます。最初から私の考も間違つて居りました、身元も何にも知れ
 ない流浪者なんか、亡母や兄の異見も用ゐずに引摺込んで……………ほん
 とにれ耻しい話で御座いますよ。聞けば今東京の吉原で女郎になつ
 て居るさうで御座います、好氣味で御座いますな、旦那俺も此秋は
 商賣の方が片付次第是非一度東京へ出まして、一晚其不貞腐を買つ
 て、立派に離縁狀を渡して、百圓なり五十圓なり呉れて歸つて、ろ

して今度は實体な女房を持直さうと思つて居りますよ、未練なんぞ
 爪の垢程も御座いませんや。

話の内に親不知も過ぎ、程無く直江津へとは着きぬ。此一日の航海
 は實に珍しき風なりしと船員も語れり。夕陽は既に没して岸頭には
 燈影點々、舳は波を切つてヤツシ〜〜。

●夜蒸氣

(上)

朝からの大雪、風に飄へつて積むこと尺餘、夜に入つては粉雪と

口に入れる事が出来ませんや。此天氣でもつて種が不漁なんださう
 ですよ、子旦那東京じゃ正月、田舎じゃ今日が師走の十五日、氣が
 氣じやありませんや。でも難有い事にやアから見えても樂隠居でさ
 ア、アハ、、、』と笑ひて吐く息酒臭し、『ろりやア結構ですな、何
 歳ですや』と吾も此時飢者が食を撰ばぬ相手、これでも無きには
 ましとの愛想『六十に三足斗跨ぎましたよ、子ですか……夫れもあ
 りましたがね、子寶ツて世間では言ひますがね、なアに子かんぐ……
 いますもんか。實子よりやア他人がいくら頼母しいか知れません
 や』と老商人の詞は何故となく小しく激したる調子なり、『でも世間
 じやさう思つてないやうですな』と挟みたる一語に老商人の眼はか

いやきぬ、『世間……世間の奴等馬鹿でサ、だから譬にも親馬鹿と言
 ひます』と猶唇のむづつく折柄、出帆の暗號なる汽笛は、けたゝ
 ましく鳴響いた、時は午後八時半、客も三四人は殖えたかやうに覺
 えた、岸を打つ浪音、半ば氷となつて降りしきる雪、夜はくらく風
 寒く、如何か海上無事であればよいがなぞ、懸念も出る。同じ解は
 彼の老商人をも助け乗せて本船に移り、携ひし小行李によれかゝり
 て足なげ出せし内、房州丸は靜に波をきつて靈岸島を乗出した、風
 は強く波は荒れて、一二の女客は、今更ら乗込んだのを後悔して
 居た。

船は早や一二の臺場を過ぎたらしい頃合である、室内を照らす洋燈薄暗く、一種異様の臭氣が鼻をつく、一人の女客は手拭をとつて鉢巻をして、風呂敷包の上に額を投げた。老商人は黙つて何か考へて居るらしい、『なかくゆれますなア』と詞を掛けるに、『まだこれからです』と答えぬ、吾は用意せるピスケット袂より出し、『失敬ですが一ツ御摘みなさい』とすゝむるに、『ヤどふも畏れ入ります』と恐るゝ一ツ摘みて口に入れたる折、『先刻實子よりは他人だと仰しやいましたかね、實際不幸な子を持つて心配するよりや、いつろ能く出来た他人の子を養子にでもした方が割でせうな』と口火を付くれば、『さうですとも、ほんどの事です、耻を申さなきや分りませ

んがね、今から五年前まで大事に甘やかして、自分ながらも鳶が鷹だとか雁だとか思つて、人にも自慢して、此奴の爲なら身代も生命も入るもんか、とまで思つてた息子がありません。たつた後にも先にも一人てんで、他愛なくまかれつちやつたんですね、ソレ風邪だ、婆さん早く醫者だ、ソレ疝氣だ、藥湯をたてる、マ、遠慮するを擦つてやる、親馬鹿でさア、馬鹿親が寄つてたかつて息子を馬鹿に仕上るんです、これが不孝者の製造法でさ。學校が厭だヨシ〜やめてしめへ、それが好きだ、ヨシ〜買つてやれ、これが欲しい、ヨシ〜尤だといふ始末で、敬が……名を敬太ツて言ひました、敬が二十二になつて、サア徴兵検査……人身御供にでも取られるやう

な騒ぎで、婆さんは茶斷鹽斷魚斷、俺も大山へ登やら、成田へかけつけるやら、検査日が来るまでにや、精も魂も盡きる程信心しました。處が其一心で……一心は恐しいもんで、躰はよかつたが鬨で脱れた、ソレ祝をしると喜んでかけ廻ると、村長から呼付けられて叱られた、親はこれ程大事にかけて、これ程可愛がつて、結果はどふでしよ、實に御話になつたもんじやありませんや、他人の女房をさらつて欠落てんでサ。夫れも其家に母親一人娘一人の所へ二年前に養子をして睦ましくして居たのを、何時か出来合つて引張だしちやつたんで、母親は聲にすまぬツて首をくつて死んだツて騒よかりましたる、さア黙つちや見て居られませんかや。人を頼んで渡をつ

けて、香奠といふ名で百圓、こゝこれも世間に對して出さなくちやア濟ませんや。子なんぢ入るもんですか、こんななにされたツて今だに斷念られませんか、と眼中には涙あふれて、終は聲も打沈めり、『れ若いせいでしたかたがありませんね、又其内ア、悪かつた、相濟なかつたと思付いた日にやア屹度歸つて來なすつて、夫こゝろ孝行をなさるでせう、誰も一度はろんな不心得な事をやりますよ』と慰むれど、老商人は『だめでサ、今更歸れた義理ですか、耻しらずに歸つていも來たら、叩き殺すか、叩き出すか、二ツより仕方はありませんね、兎に角入られませんかや、俺ちの眼のクリ玉か黒い内や入れる事た出來ません。だから去年夫婦養子をした所が、ろろつて大事

ものは商賣に出るのも厭になつて、此春は到頭怠けました。スルト
 難有いのは御得意で、なせ來ない、此秋は是非來い、外の手から燈
 蓋一ツ買ふ氣にならぬ、金が入用ならば先へ送つてやると……………
 實に他人様でさへ恚う仰しやつて下さるのと思ひますと腹が立ち
 ます。最初から私の考も間違つて居りました、身元も何にも知れ
 ない流浪者なんか、亡母や兄の異見も用ゐるずに引摺込んで……………ほん
 とにね耻しい話で御座いますよ。聞けば今東京の吉原で女郎になつ
 て居るさうで御座います、好氣味で御座いますな、旦那俺も此秋は
 商賣の方が片付次第是非一度東京へ出まして、一晚其不貞腐を買つ
 て、立派に離縁狀を渡して、百圓なり五十圓なり呉れて歸つて、ろ

して今度は實體な女房を持直さうと思つて居りますよ、未練なんぞ
 爪の垢程も御座いませんや。

* * * * *

話の内に親不知も過ぎ、程無く直江津へとは着きぬ。此一日の航海
 は實に珍しき風なりしと船員も語れり。夕陽は既に没して岸頭には
 燈影點々、艇は波を切つてヤツシ〜〜。

● 夜 蒸 汽

(上)

朝からの大雪、風に飄へつて積むこと尺餘、夜に入つては粉雪と

なりて、何時やむべしとも思はれず。東京灣汽船會社の房州丸は、早や出帆の準備にかゝつた、待合室には僅に十四五人の客が、いづれも寒さうに、隅々へ寄り集つて、各身に物價騰貴の話やら、漁の有無、蠣殻町の相場の話などに、五分十分ともどかしい時間を過して居る。雪はサラ〜〜と音して、室の入口に立てる吾襟元に吹入れば、思はず身顛して室内に入り、羽子羽子板大風呂敷につゝみて持てる老商人の隣に腰を下ろし、外套のポケットより巻蓑を取出し、バチリとアルコール、マッチにて火をうつせしに、老商人は不審さうに之を見つめ居たりしが、『どうも珍らしいマッチで御座ますな、專賣で御座いますか』と軀を前に傾け、小さき凹みたる眼も

て吾が顔を見あげぬ、『これですか、別に珍らしい品じやありません、アルコールランプを應用て工夫したまで、』と一二度火をうつして示したるに、『へー、成程よく出来てますな、アルコールとやらは焼酎の強いやつで御座いませう』とます〜〜感心したらしい、『まあさうです』と軽く答へてマッチをポケットに入る、折、老商人は火皿のつぶれて煙脂黒くこびりつきし眞鍮の煙管とり出し、『どうか恐れ入ます、旦那は何處までになりますか、へー船形で、私は那古の者で御座います。誠に此天氣ではね互さまに出るにも入るにも難儀で御座ますな、何分押詰つて日があいで、私などは昨晩出て今晚かへると言つた始末で、折角楽しんで出て來た天麩羅さへ、

口に入れる事が出来ませんや。此天氣でもつて種が不漁なんださう
 ですよ、子旦那東京じゃ正月、田舎じゃ今日が師走の十五日、氣が
 氣じやありませんや。でも難有い事にやアから見えても樂隠居でさ
 ア、アハ、、、』と笑ひて吐く息酒臭し、『うりやア結構ですな、何
 歳ですや』と吾も此時飢者が食を撰ばぬ相手、これでも無きには
 ましどの愛想『六十に三足斗跨ぎましたよ、子ですか……夫れもあ
 りましたがね、子實ッて世間では言ひますがね、なアに子さんず……
 いりますもんか。實子よりやア他人がいくら頼母しいか知れません
 や』と老商人の詞は何故となく小しく激したる調子なり、『でも世間
 じやさう思つてないやうですな』と挟みたる一語に老商人の眼はか

いやきぬ、『世間……世間の奴等馬鹿でサ、だから譬にも親馬鹿と言
 ひます』と猶唇のむごつく折柄、出帆の暗號なる汽笛は、けた、
 ましく鳴響いた、時は午後八時半、客も三四人は殖えたかやうに覺
 えた、岸を打つ浪音、半ば氷となつて降りしきる雪、夜はくらく風
 寒く、如何か海上無事であればよいがなぞ、懸念も出る。同じ解は
 彼の老商人をも助け乗せて本船に移り、携ひし小行李によれかゝり
 て足なげ出せし内、房州丸は靜に波をきつて靈岸島を乗出した、風
 は強く波は荒れて、一二の女客は、今更ら乗込んだのを後悔して
 居た。

船は早や一二の臺場を過ぎたらしい頃合である、室内を照らす洋燈薄暗く、一種異様の臭氣が鼻をつく、一人の女客は手拭をとつて鉢巻をして、風呂敷包の上に額を投げた。老商人は黙つて何か考へて居るらしい、『なか／＼ゆれますなア』と詞を掛けるに、『まだ／＼これからです』と答えぬ、吾は用意せるピスケット袂より出し、『失敬ですが一ツ御摘みなさい』とすゝむるに、『ヤどふも畏れ入ります』と恐る／＼一ツ摘みて口に入れたる折、『先刻實子よりは他人だと仰しやいましたかね、實際不幸な子を持つて心配するよりや、いつろ能く出来た他人の子を養子にでもした方が割でせうな』と口火を付ければ、『さうですとも、ほんどの事です、耻を申さなきや分りませ

んがね、今から五年前まで大事に甘やかして、自分ながらも鳶が鷹だとか雁だとか思つて、人にも自慢して、此奴の爲なら身代も生命も入るもんか、とまで思つてた息子がありません。たつた後にも先にも一人てんで、他愛なくまかれつちやつたんですね、ソレ風邪だ、婆さん早く醫者だ、ソレ疝氣だ、藥湯をたてる、マ、遠慮するを擦つてやる、親馬鹿でさア、馬鹿親が寄つてたかつて息子を馬鹿に仕上げるんです、これが不孝者の製造法でさ。學校が厭だヨシ／＼やめてしめへ、それが好きだ、ヨシ／＼買つてやれ、これが欲しい、ヨシ／＼尤だといふ始末で、敬が……名を敬太ツて言ひました、敬が二十二になつて、サア徴兵検査……人身御供にでも取られるやう

な騒ぎで、婆さんは茶斷鹽斷魚斷、俺も大山へ登やら、成田へかけつけるやら、検査日が来るまでにや、精も魂も盡きる程信心しました。處が其一心で……一心は恐しいもんで、躰はよかつたが鬪で脱れた、ソレ祝をしると喜んでかけ廻ると、村長から呼付けられて叱られた、親はこれ程大事にかけて、これ程可愛がつて、結果はどふでしよ、實に御話になつたもんじやありませんや、他人の女房をさらつて欠落てんでサ。夫れも其家に母親一人娘一人の所へ二年前に養子をして睦ましくして居たのを、何時か出来合つて引張だしちやつたんで、母親は聲にすまぬツて首をくゝつて死んだツて騒まかりましたる、さア黙つちや見て居られませんや。人を頼んで渡をつ

けて、香奠といふ名で百圓、こゝこれも世間に對して出さなくちやア濟ませんや。子なんぢ入るもんですか、こんななされたつて今だに斷念られませんね』と眼中には涙あふれて、終は聲も打沈めり、『れ若いせいでしたかたがありませんね、又其内ア、悪かつた、相濟なかつたと思付いた日にやア屹度歸つて來なすつて、夫こゝろ孝行をなさるでせう、誰も一度はろんな不心得な事をやりますよ』と慰むれど、老商人は『だめでサ、今更歸れた義理ですか、耻しらずに歸つていも來たら、叩き殺すか、叩き出すか、二ツより仕方はありませんね、兎に角入られませんや、俺ちの眼のクリ玉か黒い内や入れる事た出來ません。だから去年夫婦養子をした所が、ろろつて大事

にしてくれて、俺等夫婦は樂隱居、今度だつて暮の仕入に來ると言つたら、別に小遣も心付けて、一日位遅れてもいゝから、東京で珍らしい物でも食つて呉れと言ふでせう、さうされると猶のこと早く歸つて、少しでも多くもうけさせたいんで。他人の方がいくら頼母しいか知れませんや』『さう言へばさうですな』、と吾も此老商人の心を察して、慰むべき詞も胸につかへてしまつた『さア此菓子かれ厭から此方に葡萄酒もありません、一杯注ぎませう』、とこれより雑談にまぎらして、吾も葡萄酒一二杯傾け、横になりし後は知らず。枕元よて人の罵る聲、走るが如き響に、フト驚き覺めて何事と問へば、投身者のありたるかりといふ。女か男かと問ふに、男なりき

といふ、傍を顧みるに老商人はあらず、若しやと心騒ぎて氣鐘室の方に近き、客室に人立ちせるを押し分け見るに、老商人は手に矢立と一枚の紙とを握りて、『船をとめて探して呉れ、探して呉れ』、ともかくを船長はじめいろくに宥めすかし居る所なり、『どふしました、どふしたといふんです』、と吾が問ふを力として、『オ、旦那敬が今身を投げたんだ、此矢立と此遺書……此船に乗つてたんだ、とどめさして……旦那どめさして、探して……』兩手は押えられて足のみをばた〜させた、手を放したら次いで飛込みもしたらふ。風はいよ〜荒れ立つて、雪も颯々と吹つける、浪の舷をうつ音の物凄さ、何とも景容の外であつた。

磯家の月

(一)

未だ日は沈んでも餘光を西天に染めて。四邊もさして暗くはないが。大洗神社の森は早や夕霞を込めて。吹來る海風も何となく肌寒く覺ゆる。波間にちらほら泛んで居た小舟も。渚に一羽二羽遊んで居た鷗も。何時何處へ往つたのか影もない。海は夕風になぎて。さしもの荒海も眠るかの如く靜である。唯岩をうつ音のヒタリ〜と聞ゆる計だ。燈臺には燈を點じたのであらふ星の如き光が淡く木の間を徹してチラつき始めた。那珂の川口一ツ隔て。前濱や湊の方へ還

る帆影が。白く黒く靜にだん〜と消えて行く。二日の月がやううつすりと銚子の岬にかゝつて。淋しさうに黒ずんだ海原をのぞいて居る。』大洗神社の一の鳥居の方から。節面白く漁歌唄つて松原をやつて來る男があつた。其唄がぼつたり止んだと思ふと。渚に黒き人影が二ツ顯れた。一人は唄をうたつて來た廿四五の男で。今一人は十七八の娘である。間もなく日は全く餘光を收めて。空には星も幾つか惰けた光を放ちうめた。

『藏さんどうしても明日の船で乗出すの。又半月ばかり逢ひないねへ。』

『出たかアねへがの。久しくおまけたから旦那の前もよくねへし。』

今度ア一稼ひこかせぎして來こざアなるめへ。歸つて來せへすりやア。又ね前の阿母おつかあにも相談して一諸いっしょになれるやうにする積だから。辛抱して居て呉れるよ。ソラこんな物ウ買かつて來た。さして見る。よウ一寸つひさして見るよ。』

『オヤ好櫛い、くしだよ。疾とつくツから買ひたくつて居た處だよ。澤山たくさんとられたつたらふね。氣きの毒どくだつたね。ソラさしたよ似合にあふだらふ。』

『なんだか折角せつかくさしてもくらくつて見へねへせ。オ、好いい匂におひがするぢ。餘り粧飾しやれ腐くさるねへ。氣がもめてなんねへ。此節アどうだ矢張り猩々しやうじやうの辰奴しんぬやつて來るけへ。來るだらふ。』

『來るよ。來て五月蠅うるさいけれど。あんな奴にどふするもんかねだがねへ。此節餘程阿母よつほどおつかあがのせられてるやうだから心配しんぱいにゐるよ。早くね前さんが歸つてくれないと如何どうな事になるかと夫ばツかりサ』

『さうか。なアに其内にやヤ鯉かつをぎ時ときになるから十日もかゝつたら歸つて來るせ。たゞね前まいだけ今の氣きで居て呉れりやアいゝんだ。ね互たがひにまだ一ツ寐ねした事こともねへんだが。約束やくそくだけで夫婦ふうふになつてるんだ。ヨシカ野合くつつきあひで夫婦ふうふになつたといはれたくさい。十日や十五日でも顔かほが見みられねへかと思ふと。何なにだか悲かなしい氣きがしていけねへ。夫おつじやアしつかりして待まちつて居てくれ。仲間なかまの奴等やつらに笑わらはれねへやうによ。今夜こんやア一諸いっしょに酒さけでも飲のみてへんだが。いろ／＼明日あしたの

支度しだくがあるからこれで別れるぞ。エ於磯泣く……泣いてるな。
 エイ延喜えんぎでもねへからよせへ。

男は女を抱きよせて。自分の袂たもとで涙なみだをうつと拭ふいてやつて。態わざと笑つて居るやうではあるが。心は同じ一滴ひとしづく。堰餘せきあまつて女の顔へふりかゝつた。

『うら御覽ごらんじ自分ぶんでも泣いてるくせに。人ばつかし叱しかつて。』

『ナニ泣ないた……泣きやアしねへ。ううだ松まつの木きから露つゆでも落ちたんだらふ。』

『屹度きつこ十日位で歸つてくれかい。内の阿母おつかあさいわんなでさきやア。一年二年別わかれて居たつて少しも心配しんぱいはないんだがね前も知つ

てる通りだから。ほんとに妾わたしやアね前が船ふねに乗ると……悲しくつて……』

男の胸むねに額ひたいをあて、獻すゝりあげ献あげる。男もや、聲こゑが曇くもつて來たが。思切つて女をうつと押おしのけて。

『其處そこが辛抱しんぱうだ。永くつて十五日だ。何時いつまで居ても話しやアつきねへ。遅おそくなるから別れるせ。』
 と殘惜のこりをしげ氣きに一二步踏出ふみだすと。女は急いで袂たもとを捕とらひて。

『待まつておくれ。なせさうね前はぐん氣きだらふ。』
 男の手をジツと握にぎつて。怨うらめしげに其顔そのかほを見上げた。ア、可愛かわいい女と思つて。男も又これを抱だきしめめた。後は限なき戀こゑを黙々もくもくに語かたつて。

二人は身動もしなかつた。月はいつか落ちて。波間をゆく船の燈が。一ツ二ツ遠く見へた。近くの茶屋の二階から。客でもあるか氣樂らしい笑聲がきこえる。少し風立つて来て岩をうつ波が颯々と白く碎けろめた。

(二二)

磯濱の裏町に海を見晴してといへば。別荘にでもと思ふ人もあらふか。杉皮葺の上を貝葺にした。小さな破屋が一軒たつて居る。砂原の方へ倒れかゝつて居るのを。やつと竹やら木やらで支えて居るのだ。其近くには煮汁と云つて魚の汁やら油やら腸やらを腐らせた肥料の桶が澤山貯へてある。其臭と言つたら何とも彼ともれ話になら

ぬ臭だ。風でもある日には殊更其臭が吹込んで来て慣れぬ人には一時間とも辛抱が出来ぬ。其悪臭も馴れては左程でないかして。此破屋に一人の老婆と。色の黒い目の大きな漁師らしい三十恰好な男と。何か話しながら差向で酒を呑んで居る。

『阿母さアグツと乾しねへ。何時になく心持よく酔つちやつた。まだ澤山あらア。』

と言ひながら樽をふつて見せ。尻をぐるツとまくつて坐り直した。老婆は嬉しさうにニヤ／＼笑つて。

『まア話しながらゆつくり飲まふ。辰さん何時引取つてくんなさる。又邪魔でもへいつちやア面倒だから。成丈け二三日の内の方

をつけて置きたいよ。ね前の都合はいゝかね。』

『いゝとも。實ア今夜でもいゝ。たがさうもゆくまいから明日引取る事としやう。其積で金は持つて來たのよ。渡しどくから阿母明日の朝でもあ……………』

老婆は持つて來たと聞いて。いよく笑壺に入つて。

『承知したよ。明日は早く出掛けて。前借だけ返して引張つて來らア。なアに親の威光でグウともスウとも言はせやしねへ。ね前に連添やア彼奴も仕合サ。アハ……………』

『じやア阿母アこれが十兩よ。これが五兩で十五兩ある。五兩は結納とやらだ。今少しと思つたが差當つて都合が出來なかつたから。』

これで我慢してくんな。其内又どふとかすらア。』

少し面目なさうに頭を搔て。十五兩老婆に渡すと。老婆は満足らしく手を打ふつて。

『少い處かね。澤山だよ。こんか心配なんぞしてくれなけりやよかつた。折角だからじやア頂戴して置かふ』

と搔寄せて一枚々數えて見て。懐から胴卷をこき出して其内へ吞ませてしまつて。

『未だから子供だから世話もやけるだらうが。可愛かつてやつてくんなさい。ね前のやうな働のある亭主が澤山あるもんか。サア婿姑の堅めとやらだ。一杯あげるよ。ろりやさうと柏屋の船は』

どふしたんだらふ。アノ藏奴も乗つてゐてへじやないか。』
辰と呼ばれし男は冷に笑つて。さゝれたる猪口を落付いて一口飲
んで。能代の古膳の隅へのせ。

『四日前の嵐で澤山やられたつてへから。大方其内にでもへいつた
んだらふ。氣の毒なこつたが仕方がねへ。』

『なアに藏の野郎奴に歸られちやア。又いろんな事を言つて。れ磯
をだまくらかしにかゝられて始末にをいねへ。死つてくれりやア
却つて仕合だ。』

『やうぢやさうサ。だが此方の女房ときめたからにやア。よしんば
無事で歸つて來ても。指てもさゝせやしねへよ。なア阿母ア。』

どんよりした空は。何時しか雨となつて。南風につれてザツと夕立
めかしく降出した。

『やア降つて來た。辰さん手酌でやつてくんち。少し鰯を乾して置
いたから。一寸とりこんでくるから。』

『なんだ阿母ア。俺が取込んで來らア。年寄が立つとがあるもんか。
他人らしいと言ひツこなしだせ。オイ辰これくだからッてば。
ホイ來たと俺が夫位の事はやツウけらア。今から親子だ。これで
もなか〜孝行もんだせ。アハ……………』

其翌朝魚來屋のれ磯は店先で煙草盆の掃除をして居ると。繼母の於

銀がやつて来て。主人にあつて一時間餘り相談して居たと思ふと。やがて其場へ於磯も呼ばれて

『いろくよく氣をつけてくれて。手放すのも惜しいが。ね前の一生の身の堅めだといふし。阿母アが自分で今いふ通り。足腰も思ふ様でもなからふから。家へかへつて随分孝行するがい。前貸もまだ少し残つてるが。それは禮やら祝やらにやるとして。其代り假令少しは迷惑でも。夏場などには。ちよいと来て手傳つてもらひたいなア阿母ア……』

『ろりやア上げますよ。上げますとも。コレ於磯折角旦那が御親切にあア仰つて下さるんだ。ね禮申さないか。なせ御返事を申さ

ない。イヤもふ此通りの我儘者で御座いますから。嘸ど御遣ひにくふ御座いましたらふ。難有ふ御座います。』
於磯はハツと驚きて胸先づふさがり。心を落付けて此場を何とかしてのがれんと思案すれど。唯胸躍り涙徒にせぐりくるのみ。無理に手を取つて引ずられて。我家に伴はれし迄で。ほんの夢心地。

『今日お暇をもらつて来たのも外じやアないが。此阿母も次第に年はとるし。不漁はつく。此順じやアなか〜ね前の仕送位じやア。好きな酒の匂。かけやしいから。婿をとつて少し樂をさせてもらふつもりだ。ナニ嫌だ。嫌だ。嫌で濟むかへ。辰さんを婿にするんだ。辰さん位の働者はねへ。第一親切な人だ。あんだ

ど。無理だ………無理も糞もあるもんか。親の目鑑で持せるんだ。繼親だと思つて馬鹿にしていやがる。其仕置はかうしてやるぞ。ウヌツ此阿魔ツ………かうか………これでもカツ』

於磯は打ちたゝかれて。叩き殺さるゝが却つて願とまで思ひつめて。齒をくひしばつて。唯泣く計りだ。此際にも案じらるゝは藏吉の身の上。若しや廿日餘にもありて歸らぬを見れば。板一枚下は地獄の波の上。過日の嵐は船を沈めて。無敢果最後をとげはせずやと。鐵火箸の筈さへ。少しも身には痛くない。於銀は増々烈火の如く憤りて。襟頭ひきよせ殴ちこらさんとする處へ。駆け込んで來たは猩々辰。於磯はゾツと身ふるひした。

(三)

剛慾非道な繼母の折檻に。又も打叩かれんとせし折。駆け込んで來た辰藏は。情らしく二人の中へ割つて入つて。皺だらけの額に太筋たてゝ。口汚く怒鳴ちらす銀をさだめ。一方には詞やさしく磯をなぐさめる。其厭らしい作り聲が。死罪を宣告する判官の聲のやうに身に染みて。れ磯は口惜しいやら恐しいやら。室の隅へ小さくなつて泣伏して。唯袂を噛しめて居る。すると繼母のれ銀と猩々辰とは。小聲で何かささやいて。辰は又れ磯の側へにじり寄つた。軽く肩の所を二三度たゝいて。今度は背を抱へるやうにして。酒臭い口を耳のそばへ持つて來て。

『れ前も何時まで子供でもなからふせ。産さぬ中でもたつた一人の阿母に。ろう心配かけちやア濟むめへ。なんで全躰阿母を怒らせたんだ。エ何んな事で腹を立たせた。ヨ』』

返事をしると手に力を入れて背をゆすぶる。れ磯は躰の痛む程縮つて小さくなつて、何とも返事をせぬ。まさかこれ前が厭でも言放れぬのだ。

『辰さん放擲つて置な。癖にあるよ。一通り剛情な阿魔じやアねへ。今からフン縛つて痛い目を見せてやる。なアに生やさしい事でゆくやつかね。』

『だつてさう手荒お事を仕ちやア悪い。いゝから俺にまかせときね

へ。いゝつてばうれよりやア暗くなつたから。燈でもつけて一杯やらかしねへ。其處へ章魚——一鈎買つて来たから。ナアレ銀坊お前も泣かねへで酌でもしてくんな。』

狐色にすくけて。處々油染のある行燈に火はともされた。一種生臭い匂のする濕つた室内は。ポーツと明くなつて何となく却つて陰氣に見へる。戶外には岩をかむ浪の音と。何處で叩くのやら法華の太鼓の響が。絶々に淋しく聞える。繼母のれ銀と辰藏とはお磯にかまはず。飲みはじめた。れ磯は猶もジツとして居たが。二人がだん／＼酔つて来た様子を見て。ソツと起つて足早に逃出さうとした。然しさうまで酔つては居ぬ。辰藏は飛か／＼つて袂をとつて。恐しい

顔をしてれ磯をにらみつけた。平生からして餘りやさしい顔でもない辰藏が。酔つて怒つて戀の怨をといふのであるから。實に怖い恐しいのであつた。濃い逆立つた太い眉はつり上つて。底光りのする圓な眼は酔ふたせいか赤味がさして。横びろの口をぐいぐいねじつて。口元から少し泡を吹いて。赤黒い顔へ血がさしたから。何とも言へぬ色合になつて。角が出ぬ計りだ。筋呉れだつた毛だらけの手で袂を鷲握にされたので。れ磯は思はずアツと叫んでべたりと坐つてしまつた。辰藏は急調子で。

『れ前よげる氣だナ』

『逃げやうツて逃がすものか。太てへ阿魔だ』

繼母のれ銀はよろしくしゝながら。起つて入口をしめて錠を下した。

『かうしときア大丈夫だ……。イヤ待て。用があつたけ』

と下した錠を又はづした。辰藏は見咎めて。

『なせ錠をはづしたんだ。何處かへ出掛けるのか』

『なにね米を買つて来て置かねへと。明日の朝焚くやつがねへから。一寸往つて来る。後はたのんだよ。しつかり頼んだよへへへ。』

と何をか嘲笑ふ如く笑ひつゝ。箆を小脇にして立出づるを。辰藏は見送つて錠をば下ろした。れ磯の前に大安坐をかい。何處から持つて来たか目の前へ。磨すました大出刃を突出し。ニヤリと笑つて

片肌ぬいで。わざと燈影にピカ〜とかざして見せた。これを見て
れ磯は恐ろしさにアレーと言つて顔をうむけた。うむけた方へ又出
刃はキラリと突出された。

「男が言出しやアどふで命懸けだ。阿母が承知の上は俺の女房だ。
船幽霊の藏吉に義理立して。亭主の俺に耻をかゝせりやア。破れ
かぶれだ。黴り殺にふるしてやる。氣を落付けて返事をしろ。サア
れ磯……………否か……………應か……………」

人家はなれたる處といひ、夜もやゝふけて浪あるゝ音の高ければ。
ヨシヤ叫びたりとも誰かは來り助けん。れ磯は黙して眼をとづれば。

辰藏は其頬に冷たき出刃の背をあてぬ。ハツと驚きて飛退く手を確
と取つて放たず。方にまかせてズル〜と引寄せぬ。

漁師の藏吉は十日程の豫定で。他の仲間と船を出して。伊豆近海で
十二分の漁をして。船をかへさうとすると大暴風にあつて。二日二
夜吹廻され。辛くも房州洲の崎へ漕ぎつけた。此時此近海で沈めら
れたり。行衛の知れなくなつた船は三十艘餘りあつたといふ。それ
を聞いて一同は顔見合せて。これも此所の辨天様の御加護だと雀躍
して。いろ〜の供物を捧げ一七日參籠した。一七日も過ぎたから
乗出さうとすると。天氣模様が定まらん。辨天様に伺を立てると。
神託がよくない。到頭又十日ばかり逗留して。やつと歸つたのは。

豫定より廿日餘り後れて居た。魚は房州で金にしたのを船主に渡し。各自は難儀をしたからとて。特別の分配をもらつて。其夜はうるつて祝町で遊んで。久し振で底抜け騒をした。

然し藏吉は迷惑だ。唯一時も早く磯にあつて。約束の日取りの後れた怨をきく。又其言譯もして楽しく話したいと計り思つめて居る。夫れゆる人よりも早く祝町の廓を出て。ブラ〜砂山を通つてくる。後からオーイ〜と呼ぶ者がある。振返つて見ると仲間て字を放蝶金といふ男だ。

『誰かと思つた。歸りか……………』

『歸りかツて。ね前もあんまり友達甲斐のねへ男だせ。どうせ来る

なら一寸誘つて呉れたつていゝじやアねへか。アハ……………。夫りやアさうと怪いたアね磯の阿魔サ。ね前もさぞ腹が立つだらふが。どふで性根の腐つた女だ。きれいさつぱり思切るがいゝ。ム〜さうよ。こればつかしやアほんのこつた。さうサ十日もたゝねへ内に魚來屋から暇をとつてよ。此節じや網乾場の六が居た處をかりてよ。ちん〜鴨でやらかしてる。じやアまだね前知んねへのだな。餘り薄情だから少しやア困らしてやんねへ。誰もさう言つてらア。全躰あのお銀婆アがろくでねへからだツて。

とこれより輪に輪をかけて。藏吉の顔をのぞきながら煽動て見る。藏吉はクワツと一時は髪の毛も逆立つ計りに感じたが。元來腹のあ

る男だけに。ジツと氣を落付けて。存外平氣で聞いて居る。たが心の内は煮え返つた。其内道が違ふからといつて放螺金に別れて一人で小松原にかゝると。フト思知らせてやらふ。三人共生しては置けぬといふ氣になつた。自然と立留つて暫く考へた。如何して殺してやらふ……………。

朝霧は次第に消えて。海から吹いて來る風冷に。のほせたる頬をなでらるゝ心地よさ。フと東の方を見やれば海と空との間より白みろめて。其邊に一筋二筋の横雲。半ばは赤く半ば黄金の色をなし海上に産るゝ朝日を待つて。此美しき産衣につゝまんとするのであらふ。

藏吉はホツト吐息して思ひかへした。

『悪い。どうしてそんな悪い人殺などを……………これが迷ひだ。若し相摸灘であのまゝ死んだらどふだ。仲間に笑はれても世間で指さされても。俺は死んでるのだと思をふ。さうすると腹も立たぬが。今だにどふもお磯の心が知れぬ。イヤ馬鹿ぞ知れぬとがあるものか。知れ切つてる。薄情ものだ。俺をだまして居やがつたのだ。彼奴ばかりはと心をゆるしたのが迷だ。今日は久振で逢つていろゝ行末の相談もして。事に寄つたら柏屋の旦那にすがつてなり。一所になつて睦じく世帯を張つてなと、思つたのも晝餅だ。今日逢つたらどんなに喜ぶか知れぬ。早く其喜ぶ顔が見たい……………』

馬鹿く〜なんでもこんな事を考へたのか。

など、心の内に繰返しながら。我にもあらず何時しか通へ出た。町の人は早や彼方此方。氣も軽々と勢よく往來して。各自に其身に應じた稼をはじめて居る。誰を見てもニコ〜して居る。更に自分程不幸の人も見えぬ。世の人は楽しく働いて暮して居る内に。自分は何如しても除者にされたのである。懇意の居酒屋へ飛込んで。一合足らずの量を過ぎし。二合入三本の酒を夢中に鯨飲つ。強めて酔ふて我住家と定めたる柏屋持の網小舎に歸り。其儘大の字に倒れて前後も知らず寝てしまつた。

(五)

餘りグツスリ能く寝込んで。日の暮れたのも知らずに居た。少し薄寒くなつて來たので。フト目をさまして見ると小舎の内は眞の闇。其闇の内に何人か歔歔けて泣いて居る。流石に驚いて古葛籠の上のマッチをとつて。火をカンテラにうつして見ると。一人の女が正體なく泣倒れて居た。お磯だお磯だ……………うの丸鬚を誰が結はせた。己れ一思に叩殺してと拳を握りつめたが。握りつめたまゝどつかと坐つて。一二吹煙草を吹つて。わざとヨソ〜しい欠伸をして。無言で小舎から出懸けやうとした。お磯は飛付いて。ジツト其顔を見上げて。

『藏さん腹が立つたらふ。憎い女と思ふであらふ。どうで妾はお前

に最早可愛がつてもらふ事は出来ぬ。それは妾も知つて居る。唯だ今一度お前の笑顔を見せておくれ。』

女は男の袖にしがみ付て泣ながら掻口説いた。藏吉は暫く石の如く突立つたまゝ返事もせぬ。

『藏さん妾しやア今更ら愚痴じやアないが。なせ早く歸つて下さらなかつた。妾しやアお前に合せる顔はない。しかし怨はいくらでも云ひたい事がある。妾しやア今夜覺悟して家を出出して來た。憎いとも思ふだらふが。可憫さふだとも思つて下さる。』

お磯はオゾ／＼しながら藏吉の顔をのぞいて。しがみ付て居る袂の切れる程ゆすぶつた。藏吉は猶頑として動かぬ。朦朧としたカンテ

ラの火影が。此二人の半面を照して居る。其顔色は二人共に蒼く黒ずんで此世の人とも見えぬ。餘り男の無情ので。お磯はいよ／＼胸一杯に悲みは充ちて。絶つて居た袂を放し。ドウと倒れて身顛して泣た。涙の血となる迄も泣いた。

藏吉は腕組したまゝ突立つて目をつぶつて一言もいはぬ。女は又泣ながら摺寄つて裾へすがつて。

『藏さん今夜だけけたつた一言……宥してやると云つて下さへ。妾しやア死ぬ覺悟で出て來ました。死んで言譯はしますから。一言宥すと云つて下さい。今一度お前の笑顔見て死ぬにも死たい。それ程氣強く……氣強くしてお前の胸はすぐであらふが。藏

さんどふぞで御座んす。可憫さうだと思つてなら。たつた一言宥してやると云つて下さへ。モシ藏さん……………」

藏吉の四肢は猶ほ動きもせぬ。お磯は最早や男の心の動かぬを見て決心した。起上つて帯引ひめて。亂れた髪を無造作に搔きあげ。

『藏さんうれじやア随分達者で居て下さい。これがお別れで御座います……………」』

と言残して戶外へ飛出してしまつた。藏吉もハツと思ふと同時に。吾知らず戶外に跣足で飛下りたが。最早やお磯の影も形もない。空は一面にかき曇つて雲足は矢を射るよりも早い。月は時々薄墨色の光を見せて海より吹上ぐる風は磯馴松を揉立てゝ居る。

憎くい女ではあるが。命を捨てるといふのに捨てゝも置けぬ。其儘一散に渚へ駆け出して彼方此方と尋ねた。風にあはられ岩に砕かれ。小山の如き大濤が大陸をも一呑にせんと。咆哮しつゝ岸を噛む聲。足元もゆるぐ斗りに覺えて。凄じき事は形容の仕方もない。

彼方をすかし此方をすかして見て。流石物事に驚かぬ氣丈の藏吉も。今宵は小石にさへ足をとられて幾度か轉ぶ。帯は解け膝頭は破れ。血は砂や貝殻を染めつゝ一二町北へ海端をせゝつた。此邊には一層多く大岩が海水の内に衝出して居て。濤の勢も音も一通でない。松に吹荒む風の音と呼應して。聲限り叫んでも自らさへ其聲を感せぬ。スルト其岩の内でも一番渚を離れた岩の上に。夫かと思ふ人影が見

へた。藏吉はうれと見て大聲上げて。

『お磯待つてくれ。お磯…………お磯坊——』

と一生懸命。三尺斗の高さある岩へ飛上つて。ボツと一息つくとき大濤はざんぶと其岩に當つて。藏吉は岩から逆に突落された。其折手も足も顔も岩角に摺破られて。二目と見られぬ恐ろしい姿で。猶ほ濤に浮つ沈みつ抽手を切つて。彼の人影の見えた岩に泳ぎつかうとした。其時岩の上からザンブと身を躍して飛込んだ者がある。アレお磯だ。藏吉は其身を轉じて。一搔潮をかく手先に觸れたのは女の躰。屹度帯の當をつかんで。プツ／＼と水を吹きつけ。以前の岩角へ泳ぎかへして。片手を岩にかけ。片手でもがく女を引上げる

やうにして。顔を見るとお磯だ。まだ氣は確で居る。

藏『プツ／＼お磯ゆるす。ゆるしてプツ／＼…………』

磯『ブツ妾ア嬉しい…………。死んでも…………。』

藏『プツ一諸にツ…………。』

お磯と藏吉とはニッコと笑つて抱きあつた。大濤は空を捲いて。ドツと二人の上に落るとろのまゝ。二人の形は全く没してしまつた。形ばかりか魂までも此時此世から没したのであらふ。底の藻屑となつたのか。但しは魚腹に葬られてしまつたのか。

濤は益々荒れ風も益々荒れ。空の模様は次第に物凄くなる。電光は闇を筋違に南より北にきつて。閃めくかと思ふと。又東から南へも

閃々たる光を投げた。其度毎に波は蒼白く光つて。風と波との間に
 迅雷轟くを聞くと同時に。急雨盆を覆へして。天地の怒を示すので
 もあらず。雷は幾個處となく落ちたといふ。
 天は雷雨の爲めに思の外速に晴れて。月は今までの天變をも知ら
 ず顔に。澄み切つた空に落付いた。涼しい影を磨で居る。
 町役場の役人らしい男が。今一人の漁師と一人の老婆とが。一ツ小
 舎に雷火にうたれて死んで居たと話しつゝゆく。

◎ 心 如 雲

『文政天保の頃。谷文晁と共に畫家の二老と稱せられたる。春木

南湖が傳中の一節。寫し來つて筆下雲湧き水迸るの感禁する能
 はず。去れどろを讀者に問ふは未だし。』
 天上幾萬の星。これ一枝の華けるに非ずや。大洋幾億の明珠。これ
 一管の餘滴ならずとは如何。宇内萬物何物か畫いて成ざる。形なき
 物をも畫くべし。風の如き煙の如き靈たりと。夢の如き幻の如き鬼
 たるを問はざるを。畫は形ある物をうつして。其形を得るに過ぎ
 ずといふか。其物の形の上に更に大なる者を畫かざる可らざるに非
 ずや。

* * * * *
 垢染たりといふよりもムサ苦しき一人の少年。ニツの小さき包を肩

に投げて。菅の小笠に朝風を弄びつゝ。磯部の方より妙義山の麓へ
 と志しぬ。ふれ遂に春木南湖として。書名を一世に轟せし一大偉人
 なりけるなり。去れど世は未だ彼を知らず。彼又彼を知らざりき。
 築山の如き西國の山の數々。見れども心樂しまず。鞋をかへして今
 日茲に。得たりや得たり怪嶽奇峯。一步にうつる好風佳景。氣躍り
 神走りて送迎轉いろがはし。滿身刺繡もて鬼形を畫きたる。肉肥へ
 眼圓にして熊の如き毛の四肢を掩へる。いづれ一曲あるべき四人
 の雲助共は。一挺の駕籠を路の邊に下ろして。何をか頻りにさゝや
 き居たり。南湖は夫とも心付かず。淺間が嶽に立つ煙。赤城の山に
 湧く雲の。行衛に心をまかせつゝ。其前を過ぎんとするに。雲助共

は行手ふさぎて「先生どうか駕籠に召して下さいまし」賃などを載
 くとは申しません。是非御召なさつていたゞきます」など迫る。南
 湖はこれ山賊などの類なるべし。吾れ師よりの添書を得て。高崎の
 豪商山田屋に宿り。一對の金屏を染めて。少しはもらゐたる謝儀も
 懐にせり。思ふに彼等は疾くみれを知りて奪ひとらんとはするなら
 ん。「いや少しも疲を覺ぬから。駕籠はよしませふ。」と行過ぎんとす
 るに。一人は前を遮り。一人は袂をとつて放す。他の二人は駕籠突
 つけて乘れよと迫る。振切つて往かんとするに。ソレと彼等は目交
 して手とり足どり。南湖を駕籠に押入れて一散に走せ出す。今はあ
 らうふも益なし。彼等とても人なり。其望む所を與へば。他に恐る

べき者にもあらず。暫く爲すが儘にまかせてゐると。「今少しゆつくりやつてくれ。逃げもどふもしない。さう急がれると目がまわつて。肝心な景色がだいなしになつてしまふ」彼等はやゝゆるやかに進めり。去れど駕籠の兩傍に。絶えず二人の男は付添ひて油断なし。見下せば麗なる老木の杉の梢は。紗布の如き雲に包まれて夫かと思れど朧なり。風ありとは覺へねども山氣自から嶺の松が枝溪の岩角に觸れて聲あり。山深くして路いよゝ峻しく。雲を縫ふて鳴く山鳥の音はあれども。伐木丁々の響も通はず。

駕籠にゆられ〜て何處まで擔はるゝぞ。「何處へつれてゆく。此所邊へ下してはくれないか。」雲助共は答もせず玉なす汗を絞りつ

ゝ。曳聲合て幾肩か人換へ〜「オットドコイしてこいな」。流石に物に驚かぬ南湖も。茲に至りてやゝ怖氣つきぬ。今は景色どころに非ず。目を閉ぢて心に南無〜と神佛の名を誦しぬ。

駕籠はどまりぬ。「さア先生お下りなすつて下さへ」。目を開けば岩石方數十丈。突兀として空に懸り。平なること砥の如き所に。席をしき展べ筆硯おどならべて。これも仲間なるべし素裸なる色黒き一人の男六尺ばかりなる細長き木の枝を。三本打交して頂をば藤蔓にて結び。其頂より繩を垂れて大きやかなる藥罐をつり。下には枯木落葉など焚き燻べて。酒を暖めつゝ待てるに似たり。林間暖酒焚紅葉の有様。誠に意外の意外といはまくののみ。「ふれはどふじ

や」彼等の内の頭立ちし一人は。恭しく南湖が前に手をつかへて。折も習はぬ膝窮屈氣に居住をつくり。先生これにはかういふ仔細が御座います。」と説くを聞けば。やさしき心掛かな。彼等は俺を畫工と知りて。うの揮毫を請んとはせるも。報ゆる所の資もなく。迎ふべき家もあらず。依つて強て茲に請じたるなりけり。南湖は將軍の御前に召されたるよりも。禁裏の障子に筆を揮ふよりも。遙にまさりて此妙しき席に。彼等の爲め筆をとるを喜べり。意氣傲然山いよ／＼高く溪いよ／＼深し。崖にのぞみて四顧すれば。仙氣骨に迫るを覺ゆるのみ。崖を廻つて數株の楓あり。溪をへだて、彼方の嶺にも多くの紅葉あり。松柏の緑其間に映じて。飛瀑千

丈雲より落ち、鬱々滢々。又雲に消ゆるの絶景。壯なりといふべく。大なりといふべし。乾魚をあぶり酒あた／＼まれりとしてすゝむ。南湖はこれを辭せず。俗に五郎八とかやいふ茶碗になみ／＼とつがせて。忽ち五六杯を傾けぬ。「どうだお前達もやらないのか。」と見廻せば。共に咽喉ぐびつかせて。頭をかきつゝ、蹲踞るのみ。南湖は氣ます／＼昇れり。大海に筆をひたして。蒼穹に畫くとも。容易く勃々たる腕は愈しがたし。「サア何でも書かふ」南湖筆をとつて坐に直れば。彼等は清冷玉を溶せるが如き清水を器に盛り來り。傍にありて墨すり流し紙をのべなす。先生どふで願

ふんですから。勢のよいやつを願ひませふ。辨慶が大肌拔で。長刀をかついで月を見て居る處はどふで御座います。「俺には女がよろしふ御座へやす」「どふでせふ念佛鬼が榊酒くらつてる所は」南湖は各自に好む所あつて。注文の面白さに打興じ。「よし〜種々變つた題が出るぞ」と縦横無盡に筆を走らすれば。忽ちにして辨慶。忽ちにして美人。又忽ちにして念佛鬼。躍々として皆生けるが如し。南湖は筆を休めて又茶碗をあぐる事數杯。「紙が二枚残つてるが。これへは俺がかきたいと思ふものを書かせてくれ。」「よろしふ御座へますとも何でもおかきなせへ。」

幾千年の雨と露とは巖に蒸して苔の花となり。霞と雲とは老樹の梢

に凝つて葛蘿の錦を秋に誇る。

南湖は筆をとつて眼を閉ぢ。又忽ち見開きて直に筆を下せり。雲あり龍をつゝみ。風あり虎に添ふ。龍虎怒つて争ふ。活氣沛然として紙中のものにあらず。更に筆をかへして残れる一枚の紙に。「朝出山雲夕宿雲。山雲無意我如雲。山雲堆裏雲耶我。細見雲容我亦雲。」と書終つて筆を投ぐれば。全山風俄に騒ぎて錦の雨をふらし。雲は彼方此方の溪蔭より湧て名畫の徳に應ふるが如し。南湖は酔氣一時に發して「愉快〜」と叫びつゝ終に熟睡せり。「先生〜風邪でも召すといけません」起すなソツと其儘麓まで下してあげろ」

●女夫鼻岩

(上)

東南ひがしみなみをうけて廣々とした御庭おにはの芝生しばふ、早はやや下した萌もえに萌もえ初はじめしが
 内うちに、蒲英公たんはなのみ莖くき立ちて、彼方かなた此方こなた黄金こがねの星ほしにも似にたる花はなの、蝶てふ
 待まちち顔がほに咲出さきいでしも美うつくし。築山つきやまなる苔古こげふりし雪見燈籠ゆきみとうろうに鶯うぐひすの今いまし
 も一ひと聲こゑ鳴なきて、輕かるく飛移とびうつれるは盛さかりと咲さける紅梅こうばいの枝えだなり、座敷ざしきには
 客きやくあゝるらしく、笑わらひさゝめく男女なんによの聲こゑ高たかく洩もれて、興きやうも正まさに酣たけなな
 るらし、三味線さんみせんの調子てうし合あはする音ねのするは、歌妓うたひめなどをも交まじへたる
 にかあらん。折をりしも袖垣そでがきの陰かげより、庭下にはげ駄重氣たおもげに、何なにをか語かたらひつ

、歩あゆみ來きたれるは、二人ふたりの美うつくしき娘むすめなり、年としの頃ころはいづれも、二九にじゅう
 には出いでまじく、一人ひとりを櫻さくらの花はなの朝日あさひに匂におふ姿すがたに譬たとへんか、今いま一人
 は海棠かいごうの露つゆを含ふくめる容顔かんばんとも見みる可べし。

『つゝね、御無沙汰ごぶさたばかりして……………、此頃このころは御客おきやくばかり多おほい
 で、一寸國ちよこくにへ手紙てがみを出ださうと思おもつても、夫それさへ出で來きないんだか
 ら……………』

『うりやア妾わたしだつてもだわ、お正月せうがつにも御宿下りおやごがをしなかつたの
 で、奥様おくさまも大層氣たいそうきの毒どくがつて、是非せひ其内そのうち芝居しばゐでも見みせてやると仰おつ
 しやるのよ、夫それもお伴ごもじや氣きがつまて厭いやだ事ことよ子』
 『うれでもさう仰おつしやつて下くださる丈だけけ難ありがたいわ子へ、此家このうちの奥様おくさまも

ほんとに好い方なのだが……何んだか此頃は御奉公が厭で厭
で、國へ早く歸りたくなつて仕方が無いわ』

海棠に似たるは打沈みぬ、櫻に比へし娘はホ、と笑みつ。

『アラ嘘はつかし、知つてよ隠くさないつていよじやないの。妾
しやちやんと聞いて……』

『嘘つて……何を聞いたの……』

目を睨りて驚きたる様なりしが、見るく海棠の花の顔更に紅
に染めて美しさ一入なり。

『ソラ御覽な耻しいもんだから、眞紅になつて、隠したつて晝餅だ
わ。ほんとに咲アちやんは女が見てさい惚々するんだから……』

…仕合だわ』

『マア春アちやんは何時でもうんな事を言つて柳榆んだもの、餘り
だわ……』

紅梅の枝に戯れ居たる鶯は、此時又も一聲高く鳴きつ、低き後園
の竹林に飛び。二人は暫時歩をどめて之れを見送りしが。

咲『好い聲だと。アツ竹藪の方へ飛んでよ、下へ行くとお池があつ
て、鯉が澤山居るの、往つて見ませうか、厭や……』

春『うう、じや往きませう……』

二人は睦氣に手を引連れて後園に下り行けば、大きな池あり、崖
上よりは清き瀧水の、簌々音して絶えず落込み、鯉真鯉は浮きつ

沈みつ藻がくれて戯れ遊ぶ様長閑けし、池の東は四方竹といへる竹
叢立ち、南は一條の水吐口ありて、一枚の自然石を橋とし、橋の邊
には木蓮の花咲き、木瓜の花咲き、梅の花風無きに亂れ散りぬ。

春「咲アちやん……」

咲「なに……吃驚するわ」

春「若様はほんとにお綺麗な方子、夫れに咲アちやんが大層お氣に
入りだつて、羨しいわオホ、」

咲「……」

春「麻布の奥様も、大層咲アちやんを賞めてね、親達さい承知なら、
啓之助もあれ程騒いでるのだから、娶つて遣りたいと仰しやつ

てるの。咲アちやん……和方華族さまの奥様になつても交
際つて下すつて、エ、咲アちやん」

此時まで黙つて聞いて居たお咲は、靜に吐息してお春を顧みつ。

咲「春アちやん、ろんな事を言は無いで頂戴、妾しや華族さんの奥
様なんか厭よ。矢張身分に無い望は起さ無い方がいゝと思つて
るわ……春アちやん、實はね、若様も親切にさう仰しやつ
て下さるんだが、學問も無いし、身分も無いし、とても妾には

……」

春「ホ、さうでせうとも、御尤で御座いますこと」

咲「アラ戯言じや無くてよ」

春『さうで御座いませうとも、オホ、』
* * * * *
水の面に梅の花のハラ〜と散りて、大きな鯉の潑刺として躍りぬ。

(下)

照り續いて毎日八十六七度、東京は九十二三度より下らぬとの噂ありしが、今日は珍らしく雨となりて、涼しさ言ふばかりなし。客は皆徒然に碁を圍むもあり花牌を弄ふもあり、下座敷には今より淨瑠璃のはじまるると罵り騒ぐ。

○『一寸いとれ待ちよ、ソラ此の二三番の客さまね、華族さんのね

妾なんだつてへのだが、妾しやア可憫さうであらういの』

▲『オヤ急に涙もろくななりだの、どうせ妾なんかつてへのは玩弄物だアね。夫れもさ身持でも良けりやアだが、聞きやア家令の何山とかいふ彼の夫れ過日來て泊つて往つた、ね髯と出來たのを、殿様もうす〜知つてるのだつていふし、今度ね娶ひなすつた奥様が、るれは〜大した器量のあるれ方だつてへのじやないか』

○『だつて泌々今日は身の上話をなすつて、泣いてゐらつしやるのだもの、れ可憫さうだわ子』

▲『だつてソラ長田さんも仰つたじやアないか、妾なんてへものは

人間の形をした動物だつて』

○『アラ又長田さんくつて、ハイ長田さんの仰しやる事に間違ふ
は御座いませんからね、どうも御馳走様……』

▲『良人からも宜敷くツ……オホ……』

○『シトツ……』

三番のれ客といふのは、今は子爵山川啓之助殿の御妾元は御親類男
爵花園家の侍女たりしれ咲の幼友達あるれ春なり。れ咲は啓之助殿
の行末は妻にすればとて、常々口説き給へど、身の程をかへり見て
容易くは靡かざりしを、れ春は兼ねて啓之助殿に戀焦れて居たる事

とて、羨しく又妬しく覺えて、終に花園男爵夫人に、れ咲の身持よ
からぬこと、世に恐る可き遺傳病ある家に生れしとなど、誠しやか
に訴へしが。自然と啓之助殿の耳にも入り、果ては山川家の人々誰
知らぬ者も無き程に至りしかば。れ咲も心樂まず。れ暇を乞ひて
郷里に歸りて後は、れ春此所ぞとある程の智恵を絞りて、首尾よく
山川家に仕へる身となり、一家の人々の機嫌氣稜を取り若殿啓之助
様に吾から言寄りて戀遂げ晴れて御側室と迄は成りしも、家令廣川
の横戀慕に、之れも身の爲めと紐下を宥るし、只一日も早く子爵夫
人と呼ばれんものと、あせりにあせる内啓之助殿三年の御洋行。歸
られてよりは何となく以前とは變りて打解給はず、其内御同族より

華族女學校とやらんを卒業し給へる奥様を娶り給へり。泣いても叫
 めいても力及ばず、れ邸を追はれて小女一人と共に表面は氣樂な圍
 物となりしが。殿は一月に一度も訪ひ給はず、慾で身をまかせし虫
 の好かぬ家令の廣川のみ繁々と通へり。親々は春の我儘より許婚
 ありし人に對し、申譯無しとて以の外の立腹、娘で無い、出入させ
 ぬどの手紙ありし以來、音信不通せめて殿の御胤ありと宿さばと思
 ふ矢先、新奥様の早や御帶の祝ひと聞くも悲し、夫れや之れや身に
 障りてか、春よりかけて肺といふ病に罹りつ、此銚子に出養生はす
 るものゝ見るもの聞くもの悲しく、氣も鬱ぎて病も更に怠りしと覺
 えす。

春「ア、ほんとにくさくさする、雨は晴らないのかしら。屹度行く
 と仰つてなつたが、今日一週間になるのに御前は来て下さらな
 いし……………矢張れ咲さんの言つての通りなんだ、學問……………
 身分の不相應、全躰考が間違つて居たのだから……………」
 海に向へる障子を開放して、茫然と思に沈んで居る處へ、ハタ〜
 と足音して、我腰にまつはるものあり。見れば三歳ばかりなる、描
 きし如き可愛ゆき娘の子なり、身には友禪の美しき衣を重ね、其水
 晶の如き涼き目をもて、我顔を見上げしが、母ならねばや忽ちワツ
 と聲を揚げて泣出しつ。折柄女中の走せ來りて、之を慰め
 『オ、母ア様で御座いませんの……………さア此方へゐらつしやいま

し、

春「オ、悪ふ御座んした。可愛い娘だこと、矢張り客様の……」

……」

「ハイ日英工業銀行の頭取さんで、齋藤さんと仰しやるれ方の御嬢様で御座いますの……オヤれ母ア様がゐらしつたことよ、サアもうれむづかり遊すな……」

女中の指す方より、氣高き一人の婦人の打笑みつゝ楷子を上り來りしが、

『マアどうして二階へ……ハア難有ふ』

○「只今彼のれ客様を、母ア様とれ間違遊したのでオホ、」

『さう……夫れはとんだ失禮を……オヤ貴女はれ春様……』

……』

春「アツ……れ咲様……でマア……」

○「マア……」

明くる朝俄に、三番の女客の見えずありしとの事にて、警察へ訴へるやら、人を雇つて尋ねさするやら、宿では上を下へとの大騒ぎ。暫くして女夫鼻の岩の上に、其客の駒下駄が脱捨てありしとの注進……扱てはと人々眉をひろめぬ。

● 瓜の花

(一)

榎ならの林はやしの繁合しげあふ下蔭したかげの細道ほそみち。チヨロくくと流るゝ小川こがはに無造作むざふさなる
 土橋どばしかゝれり。渡りて右みぎに折るれば林はやしこゝに盡つきて。見渡みわたす限り苗なは
 代田しろたの青み涼しく。西北あほに連なる遠山つら何時ゆふぎりしか夕霞ゆふぎりに淡くかすみ
 て。糝糊もこたる眺一軸なほの内にも收めたき風情ふぜいなり。雨上りの畔路あぜみち草鞋わらぢ
 は露に重く。妙林寺めうりんじの鐘かねに送られて一町が程を行くに。日は餘光よくわうを
 全く一抹いちまつの空につゝみて。吹き來る風かぜいよゝゝ涼し。東に當りてコ
 ンモリとせし鎮守ちんじゆの杉の森。何に驚おどろきてか數羽かずはの鳥からすねぐらに騒ぐよと見

る間もなく。一團の氷輪梢こほろぎに光あり。
 地主ぢぬしは如何にむごらしきよ。頬ほほの肉落ちて腮おごが尖れり。樂の神は彼を
 夢ゆめにだも訪はざるか。眼まなこ凹くぼみて眸ひとみにぶく。目と人はいふめれど。彼
 は涙の樋口ひぐちとのみ思へり。日にやけ黒みたる肌はだの色いろ。雨風に梳くしけづるを
 まかせし髪。人とし人の内うちにも又とはあるまじき一人男いちてう。一挺いちてうの
 鍬くわを肩かたにして。疲れたる足あし重げに。今や彼が爲め唯一いまいの歡喜園くわんきえん。極
 樂城らくじやうとも見るべき藁小舎わらこやに急げり。
 彼の歡喜園くわんきえんは去年の雪に柱歪はしらゆがみて二本の杖つゑにもたれかゝりつ。彼の
 極樂城ごくらくじやうは今年の嵐に。家根藁やねわらの彼方むかひ此方こゝを持去もちさられ吹散ふきちらされ。朽くち
 たる板いたと腐れたる席むしろの膏藥をきがせに一時を支へつ。今や主人の野面のづらより歸

り來るを親しげに待てり。

彼の男は鍬を肩よりをろして。寶を蓄ふる事なければ。閉すべき要もなき破戸を。二三返ガタと揺動しつゝひらきて内に入れり。草鞋をとき手足を洗ひ。土間の隅より一つかみの柴を折り來りて爐に投げ入れ。火を燧つてひといふし燻せば。今まで時を得顔に群がり居たりし蚊の一群。次第に聲もひくゝなりゆくめり。彼は煤ぼれて紙の色黒く黄ばみたる行燈取出し。火をこれにうつせり。聽て飯櫃傾け飢えたる腹をやゝ肥して。ホツと吐息せり。吐息して屢々頭を傾け何事をか思案せり思案に餘りての獨語か。

「ア、ね花さまア如何さつしやつたかなア……」

(二)

俺が三ツの歳に父さまはなくならしやつた。十五の歳までは袋の手一ツ。何かと難儀をしたのと。やれこれからは細腕ながらと思ひし甲斐なく。其れ袋も到頭病氣にかゝつて一月とも煩はずに死んでしまつた。残つたは俺一人。唯毎日泣て居たのを。庚申塚の茂左衛門さんが。氣の毒がつて。引取つて親身も及ばぬ程よく世話をしてくれた。其恩人も悪者にだまされて相場とやらへ手を出し。村では一二と言はれた物持も。今は此助藏を除ひては。先づ茂左衛門と指を折らるゝ迄に零落さつしやれた。十年餘りの御恩返すは此時と。手よ汗は握れど握られぬは金錢。これも世が世なれば下新田

の喜右衛門づれに雇はれ。年が年中片時も油断なく。風には柴を折り雨には草鞋をうち。働いてからが俺一人食ふだに飽かれぬ賃銀。噫御恩は何かしてかへす事ぞ………。金錢に不自由ないからとて。茂左衛門さんには此村に草鞋をぬいだ時より。數へつくせぬ程の御恩をうけて置ながら。ろの恩人が貧しくならしやつたを氣の毒とも思はず。少しの金を用立ちて返済せぬからとて。無理無躰に三百代言を頼み。莫大の田地畑を押領し。身は絹布物につままれて日酒を呑み髯をはやかし高帽子をかぶり。村會議員とやらを鼻にかけ。村中の人を人とも思はず。弱者いじめに鬼右衛門の字名をうけたる喜右衛門。人でなし………成程鬼右衛門………。今日も晝休に一寢

入して居たりし俺を。土足にかけて蹴りくさつた。雇主といふ名さもなくば鏃の柄の碎くる迄も。背骨を未塵に叩折つてやりしものを。蹴られて詫びて怨をのむも。庚申塚の御一家何卒して今一度人中に耻かしからぬやう。我力にてなるものならばと思ふが故なり。鎮守の祭りさては盆踊の催。村中の若衆打集へて揃ひの浴衣揃ひの手拭。自釀の濁酒甘からずとも酌むに酔心地面白く。下戸は交際の無理呑。一猪口に顔は赤飯の。山盛幾椀に舌鼓して。征清軍凱一の折聞覺へたる萬歳の一語。飲めば萬歳。食ふに萬歳。可笑きに萬歳。面白きに萬歳。萬々歳と打興するが中にも。俺のみは除者にせられて。同じく盃をすゝり。共に箸をとるをゆるされず。其折々心に抱く不平不

満ッツと貧の一字に辛抱して。獨り小暗き藁小舎に蹲踞る臍甲斐なき身を。何かにつけて不便がられ。酒を暖めて待てば來りて飲めよ。今日は團子をこしらへたれば少し計り持ち來りなど。仰しやつて下さるは庚申塚の於花さまばかり。世に父母なく兄弟なく。友どては唯野中の案山子。何と鳴子の身の上は。神佛も捨てられしを。噫難有し勿躰なし。生きたる神。生きたる佛。御縹緞は村一番。御心掛も今いふ通り。唯村一番のみにあらず日本一なるべし。何卒して御運目出度好きに婿様をと蔭ながら念ずる甲斐なく。日にく落つる御身代。衣裳の元より髪具までも賣はらわれ。素足に氷を踏み玉の肌を炎天のやくにまかせて。愚痴の泪一滴見せぬ親子へ

の孝行。此頃はとうやら於顔の色も悪く。肉さい瘦せて見ゆる御心の内。さぶかし俺にも増して世を怨み給ふなるべし。御身代をむしりとりて猶飽かず。於花様を群長殿にすゝめて我田を肥さんとするとか。鬼右衛門面が剛慾咽喉笛を喰切つても飽足らぬ奴なり。今日も今日とて茂左衛門様を呼つけて。嚇しつ賺しつ早く郡長殿の妾に於花殿を差出すべし。と辨にまかせて説立つるを。フト耳にして心騒ぎ座敷へ飛込んで。假令茂左衛門様の差出すべしといふとも此助藏が不承知なり。命をかけて故障するぞと。キツパリ言つてやらんとせし折。張番の五郎平に咎められて。其儘かへつては來たなれど。茂左衛門様の御返事が氣にかゝる。……噫氣にかゝ

つてならぬわいコリヤかうしては居られぬ。

(三)

庚申塚の森に添ふて藁屋の棟高く、流石今にも名家の名残はのこす
 門構いかめしき玄關帶刀をもゆるされたる格式、憐むべし昨日のゆ
 めとなりて、庭荒れ垣破れて壁の骨のあらはに、藁片一ツ浮みても
 事々しく立騒げる泉水も、不遠慮に肥桶二ツ三ツ投込まれたれば、
 金鱗銀緒の潑漑たる眺もさく。一枝一葉御出入の庭師の榮枯にもか
 くはりし松の名木、物干棹荒繩もて無造作に縊りつけられたれば、
 朝煙暮雨の色、勝れたりとも又た誰か賞づべき、瓦落ちたれば身を
 知る雨は洩りて袖に冷たく、椽腐ちたれば生へよと思ふ憂忘草は生

ゆべくもあし、神もすて佛もすて世もすて人もすてたる茂左衛門の
 一家、夫婦の中に唯一人娘のね花も、今を二九の娘盛、それも不纏
 緞とか不具とかにてあらば兎に角、人並すぐれて鄙にまれなりとい
 はるゝだけ、親々の心の内には世が世なりしならば、かうしてあア
 してどの愚痴、詮なき事とは思ひながらも断念められぬ泪の種ぞか
 し、三度の食事一度は省きてもこればかりは、賣らさせじと思ひつ
 る娘が秘藏の櫛、さして悪い顔も見せず「こんなものは又れ金さへ
 出来れば買はれます、何の惜いとが御座いませう」と、投出して賣つ
 たる孝行、村長宗重殿の娘子が買つて飾つて、昨日も宅の前を通ら
 れたのを見るにつけ、此の腸がちぎるゝと、母は女氣に取分けて取

亂すを、叱るもならぬ父親の吐息、聞くに於花も慰むる力ぬけて。咬しばる袖も何時しか色褪せたり。下新田の喜右衛門に田畑は借金しやくきんの形にとられ、貧すれば鈍する氣のあせりに、する事成す事鴉鳥の嘴と喰違ひて、貧苦の淵に益々身は沈みはて、怠る心ならねど納税も其期に後れたるもの、積り積りて二十圓餘り、口にころ二十圓餘りともいへ、世盛りには一夜の遊興にも蒔棄てたれ、米のなる木の中に住みて、飯米に不自由する今どかりては、十分一の二圓の金も工面するの途なし、其足元を見込んで於花を郡長殿の妾にせよと喜右衛門が口入れ、應といは、五十圓の支度金を出さん、否とあらば法により明日にも公賣の憂目を見

すべきごと、今日も今日とて餘儀なき難題、夫も此家をはなる、覺悟ならば、別に心を痛むる迄もなく、五十や百の金手に入るゝは容易けれど、子孫のよし盡きはつる迄も、此家と邸地とは人手に渡すかよ、渡さん者は子孫にして子孫に非ずと、代々申繼の遺言、こればかりは吾も心に堅く守りて、苟の抵當にだも家と邸地とは書入れたる事なし、否應の返事は明日の朝十時迄との約束、親子三人顔を合せて思案をすれども、出るは愚痴と泪が精一杯あり。御免なせへまし、まだ寝さつしやらねへのかね、助藏で御座います」といふ聲に、於花は泪を拂つて出で來り、「オヤよく來なすつた、未だ誰も寝ないから上つて話してれいでな」と入口の戸を内よ

り開くに、助藏ニジリ上りて茂左衛門夫婦の前に會釋して坐るを、
 「助藏かサアずつと膝をくづしてアグラをかくがい、ナニ昔は昔
 今は今だ遠慮がいるものか、少しばかりの恩義を忘れず、何かと氣
 をつけてくれる志、勿躰ないとも有難いとも禮は詞につくされぬ。」
 と茂左衛門泪ぐんで言出るに、助藏面目かき面持して、「これは旦那
 様何をいはつしやる、せめて此の助藏めが人らしい働のある男なら
 ば、假令どのやうな事が御座りましても皆様に米味噌の苦勞はかけ
 まいもの、彼の赤鬼の喜右衛門に追使はれて、汗水になつてからが
 はかどしい御恩もれくれぬとは、自分ながら臍甲斐ない身を怨ん
 で居りまする、時に旦那様今晚は少し聞申したい事があつて上り

ました」と、膝をすゝむ「改まつて聞きたいとは何事ぞ」と問ふ茂
 左衛門が顔を見つめて助藏は「何事でも御座らねへ、於花様を如何
 なさります、於花をどうするかとは……、於花は一人娘婿を娶
 て家名を相續させるのだが、……」「その大事な於花様、人の妾
 にさつしやるやうな事は御座りませぬ、人の妾……うんな
 汚らはしいことは……どふしてさせるものか、なせ助藏和男はう
 んを事を聞くのか、「ア、夫で安堵致しました、さよなら寝みな
 さらつしやりませ、」オイ助藏……コレ今少し話して往け……
 コレ……なんの事だせはしない男もあつたものだ」。

於花は起つて助藏を呼返さんとす、去れど助藏は早や影もなし、涼

き風後れ髪をなぶりて、夜露にぬれし草の緑、澄み渡る月の光にキラ〜と照渡れり、何處の誰がすさびなるなん、笛の音いと憐れよ聞えて天地寂寞。

其翌朝新下田の溜池に情死あり女は於花にして其相手は助藏とは受取れず、無理情死なるべしとの噂も立ちける。

●海月の骨

梅の巻

貧乏神はせせつと向鉢巻で鉦を磨ぎに磨いで遠慮會釋も無く此有槻

兼藏の樂といふ樂を削剝がして此上は死神が手に唾してボンと一ツ止息の鑿を打込む計りに仕上げてしまつた。サア世の中が面白く無い、腹が立つ、疔癩が募る、悲しく哀れになる。明晃々たる短刀逆手に腹一文字に劈かうか、月冷かに霜白き橋上より跳つて波間の鬼とあうらか、空想は一に死處を撰ぶに忙はしくなつた。或夜矢張こんな事を思ひ乍ら何處とは無しに經廻つて、愛宕山へ登つたですな。時は新曆じや師走の十一二日、北海道には雪が早や四尺も降つた、日光にも降つた、京都にも初雪があつたといふ。東京は未だ雪は見ないが寒氣は例年よりも強い、れまけに其晩は風起つて來たので、人家は早寝、往來も宵の口から寂然とした位ですもの、勿論吹晒し

の山の上などへ上つて来る酔興者も無いでさア。自分は古外套にくるまつてロハ台へ腰を懸けた、靴は氷のやうに堅くなつて指先は千切れるやうになる、鼻息は髭に露を結んで、凍と混淆だ。下通りには夜番の拆木と犬の遠吠、空ッ腹へ龜裂の入る程冴えて響く。月は氷のやうな冷い顔をして、天地萬象悉く一ツ塊りに凍凝まらしてやれといはぬ計りに見える、蒼白い電燈の光は人魂のやうに四邊を照して居た。此時自分は満都百有餘萬の人間の上に就て考へ初めましたか。なんだ人間……百有餘萬の人間……皆百年後の枯骨じゃないか、夫れが嬉しいとか、悲しいとか、互に争つて、互に欺いて、互に猜んで、嫉かんで、濟むとか濟まぬとか、色と慾とに驚

痴狂つて居る。馬鹿ッ何んだ富貴貧賤。何でも其内で一生を氣樂に呑氣に送る事を知つた奴が勝だ。一生を呑氣に……さアさうなると自分が自分の從來本領として居た硬骨、先妻は慢氣の凝結と嘲つた硬骨、友達は馬骨に等しと罵つた硬骨。貧乏神や死神と同居した硬骨……何の役に立つ、何が面白い、先妻や友達の嘲罵した筈だ、軟化……といふと少し變な心持がするが、此處は死ぬ處で無いが、自ら死を求める、馬鹿の骨頂沙汰の限り、今一番世間へ乗出して軟骨の世渡りを稽古する、海月の世渡り、蒟蒻の綱渡り、頗る妙々と翻然大悟したものですな、愛宕明神の御告げとでも言ふでしたらうか。さア翌日になる、奈落を出て極樂へ婿に行くやうな心持、見る

もの聞くもの可笑くつて、面白くつてたまらない。葎町の桂庵から紹介してもらつて赤坂氷川町の代議士栗尾福一郎といふ紳士を尋ねた。取次の書生に應接間へと案内される、應接間には黒三ツ紋のベラ〜羽織を着て、紐足袋を穿いた赤く肥つた男やら。究屈さうな洋服……裾短かなツボンの下からは踵の抜けて、赤身ならまだしもだ、が輝だらけの黒身がはみ出して居る赤の靴足袋を穿いた、蒼く瘦せた男やら。袴をだらし無く引摺つて、髪を真中からピタリと分けた、襟に大層らしく、綿縮緬の巻襟を巻付けて小さな黒いキヨロリとした顔をした、身幹の低い男だの。都合四五人、頭を集めて何か密々相談して居たが、自分のづつと這入つて來たのを見て、顔

を見合して話を中止して、オホン〜、各自に咳拂ひを始めたです、地方の有志とか、總代とか、何れ一理窟いふ人達とは誰にも踏める代物であつた。其内の一人、即ち赤く肥つた男が自分に向つて「エー失禮ですが、貴下は、此家の主人に御面會なさるで……」ハア少し御面談いたしたい事があつて……」と軽く答へた、すると先生ガサ〜懐中を両手で搔廻して、ヤット一枚の名刺を出して、俺等ア栗尾代議士の選舉區民總代で、私は赤井大五郎と申すですが……」ハアこれは……私は有槻兼藏と申します。何か諸君は御運動の爲め御上京で……」此時襟巻をはづして黒い小さい男が、之れは手賢こく名刺迄小形なのを出して「初めて……私は小室小一郎と……御

察しの通り斯く打揃つて出京した理由と申すは、原來此粟尾といふ
 奴が不都合な奴で、吾々選舉區民を賣つたですな、選舉當時の如き
 巧言令色、有權者を説廻つて酒造家には酒税を貶度下げて見せる
 の、菓子屋には菓子税全廢が小生の主義だの、坊主には坊主、神官
 には神主、勝手次第無責任極まる言論を以て、巧に之れを籠絡して、
 首尾能く當選したのですよ。處がどうです、俄に大面をして、選舉區
 民などは蛆虫とも思はない、縣下の利害問題にして選舉區民の輿論
 である處の遊廓新設反對運動に就ても、何時か賄賂の爲めに買収さ
 れて、ノメ〜と新設論に賛成を表したのみならず、議會に於ても
 賣節の醜聞紛々として耳を掩ふに暇あらずと言つたやうな事で、選

舉區民の激昂今や頂點に達したるを以て、吾々總代として今日辭職
 勧告に押寄せましたので……」キン〜とした聲で、延つ幕無し、手を
 動かし、頭を振り、卓を叩いて熱心なもの「それは成程御尤ですな
 ……」と話して居る處へ、色の白い眉の青々した、唇の薄ッ片な、
 腮のしやくんだ、厭に氣取つた、黒縮緬の羽織を肩下りに着た、三
 十合好の女が、すま〜して這入つて來たので、一同の視線は等しく
 此婦人に集つたですな「皆さん今日は、どうも寒くつてねー、少し
 火鉢を此方へも借して頂戴な。皆さんは……ハア妾は貸金の催促に
 來ましたの、ハア赤坂の待合なの……此家の粟尾さんは随分だわ、
 諸君がたも御存知でしやう、酒は悪しね、女にはしつツこいしさ、

お拂ひは悪しき、ほんとに手が付けれはしないわ……」其舌たる
 サ加減は實にお話の外でしたな、矢張手の付けられない連中。す
 ると又應接の入口の戸がギィ、頭のツルリと禿げた六十七八の反齒
 親爺が、革鞆を片手に横柄な顔をして、チヨイと睨付けるやうに會
 釋して、腰を掛けた。待合の女將だと言ふ女は其顔を見て「オヤマ
 ア檜村さん、珍らしいのね、……ヤア女將……御無沙汰をしまし
 た、」「マア御無沙汰にして下さるのが何よりだわ……」今日は穴釣
 りかな「アラうんな氣樂きのじや無くつてよ、餘り人を馬鹿にして
 るから、居催促をしてもと思つて……ハア七十圓計り溜めちやつた
 の……」「オヤ……うりやア氣の毒だが斷念めるがい、せ此家の主人

と來たらうりや恐ろしいもんだせ、然からつゝ此方も引懸つてしま
 つたんで。世間からは高利貸高利貸つて憎まれる。貸した金は此始
 末、もう……此商賣は止めだやめだ」と話して居る時又戸がギィ、
 すると五十前後の大軀な老爺が、十七八の頬の赤い、娘の手を引張
 つて這入つて來た。蓬頭垢面、太いステッキを擔いだ、壯士らしい
 男や。鼠と泥鰌折衷位の髻をフラつかせて、鈕が何れもグタリと吊
 下つた、古フロックを着て、ポケットには新聞社名の肩書ある状
 袋の頭を半分見せた、新聞探訪らしい男やら、引續いてゾロゾロ
 折柄戸の外で書生らしい男が「有槻さん、有槻さん……此方へ」
 待ちあぐんで居た處を、呼ばれたので急いで飛出さうとすると、卓

上の鉢の梅に袖が觸れたので、ホロリと落ちる蕾二ツ四ツ。

松の巻

南を向いた日當のよい八疊の座敷があつて、中央には桐の根剔の大
火鉢、火鉢の近くに紋織白羽二重の座布團が二枚敷いてあつて「ろ
れへ……」と指させるが儘、畏つて着座し、四邊を見廻し腮を撫廻
す事二三分、當家の主人……我未來の御主人様、ノツソリと侍女に
襖を開かせて正座に着き給ひ、自分が恭しく平蜘蛛をさめるのを見
て、軽く笑つて鷹揚に肯かれ「ア是れ……春や、珈琲をの……」侍
女は三拜九拜して消えて無くなる。やつと顔を上げて御尊顔を拜し
奉れば、額高くして鼻自ら低く、目尻下つては髻上れり、口は以

て宇内を丸呑とす可く、齒は以て西瓜を喰ふに適せん、黃縞の溫袍
黄金の臭氣あるが如く、羽織の五ツ紋、牡丹餅で頬を叩かるゝ好運
を希ふ心の記標と睨みしは癪目かだ。先づ板垣伯新發明の安座をか
き給ひ「君は幾歳かね、名は……」「當年廿八歳、名ですか名は有槻
兼藏と申します、生れは東京で、宗旨は一向かまねん宗……ハ、ハ、
、少し愚弄にして見る氣にも爲つたですよ「フムなか〜氣輕で
面白さうな人だ、見た處少し弱々しいが軀は達者かな、腕力……腕
力はどうか」軀は病氣知らず、腕力は強い方でしやうな、富士と新
高兩山を左右の手にヒヨイと提げる位ですからな、尤も携げて見た
事もありませんが「酒はいくか酒は……」「飲む時は飲みますよ量に

限はありませぬね、然し飲み度くも無いです」外に道樂は無いか」
 「少し計りありますね、ざつとまア……女郎買、賭博、大食、朝寐、
 晝寝、喧嘩口論位ですか」やアそれ丈けありやア澤山だ」足りな
 いと仰しやれば是れから今少し修業しませう、待合荒し、高利貸い
 ちめ、火付泥棒人殺……」と少し當て擦つたが平氣だ「馬鹿ッ……
 ろんな道樂を稽古されて堪るか」ろりやアするなどなれば又何もし
 ません、飯を食ふなど命令があれば十日でも廿日でも食はぬ、寝る
 などいへば一ヶ月位寝ませぬね」ろりやア又重寶な軀だ……」お使
 ひになると御徳用ですせ。後で後悔してもいけませんからね早くお
 きめなさい」フム——面白い男だ、是非居てもらふたいが、給料は

少いからの……尤も使つて見た上で、段々増す積りだが……」見た
 上では心細い、悪けりや段々減すお積りでせう。夫れよりか貴方も
 我日本に何人と言はれる代議士だ、昔なら三百諸侯、大名ですぬ……
 ……齒切れよくお出しなさい」思切つて出して十圓だが……どうだ、
 尤も湯錢理髮錢……」油元結落し紙……ですなハ、、、、」アハ、
 ハッどうだ暫らくうれで辛抱して見てくれんか」夫りやアします
 がね、處で其仕事ですなア。先づ朝起きて水の百荷も汲んで、飯を
 焚いて拭掃除をして、薪材を割つて、洗濯をして、貴方を乗つけて
 人力も挽け、ヤレ子供の守をしる、ヤレ奥様の御供をしる、按摩を
 しる、澤庵を漬けるてツたやうな事だと驚きますからねへ」「バィ

馬鹿なるんな事には一切使はん、極々氣樂を仕事だ此時應接室でド
 タ〜バタ〜「何時まで待たせるんだ」馬鹿にするにも程があら
 ア「ほんとに人を何だと思つてるんだね——」大變な騒ぎだ、栗尾
 も流石に眉を潜めて「君一ツ應接に待つてる奴等を追拂つて呉れん
 か、今居る書生が全然もう内氣で、弱虫で困つてるんだから……さ
 うで無いと僕も裏口から逃げなくちや……どうか」フン此馬鹿野郎
 と思つたが「何とかして來ませう」椽へ出ると庭の松の影が、一杯
 に障子に寫つて、猫がヌク〜と晝寢をして居る長閑サ。

竹の巻

新聞記者……、壯士……、高利貸からにしやうか、女將からやつて

見やうか、有志總代が順番だが、先づ此方に一番近い、娘連れの爺
 さんから片付けやうと思つて、うつと其様子を見ると、老爺腕まく
 りをして、襠褌袴を丈短に穿いて、踏跨がつて驚破といはゞ、喰ひ
 付きさうな顔をして居る娘は猿芝居のお半といふ顔をして、大きな
 ……臨月を二月も通り越したかと思ふ程な腹をして、肩でウン〜
 息を吐いて居る。自分は少し之れにも手を附け兼ねたが、思切つて
 傍へ寄つて「私は無據此家の妻君から頼まれて、ね話を伺う事にな
 つたんですが、……何か御用で……」何か御用だ……怪しからん、
 不埒千萬な、ゴ、御用があればこそ奥山虎之進猛久自身罷出たのだ。
 サア案内さつしやい、主人に會はせるツ。怪しからん」火のやうに

爲つて怒鳴る「シテ御用と仰しやるのは……」キ、貴様じやアわか
らぬへ、主人を出せ、粟尾の野郎を出せ「居りや出しますとも、處
が今言ふ通り今日は留守なんだ。僕も今此家へ来た計りで、何も知
らんのとやから、……詳しい事を承つて置いて、主人歸宅次第取
次ぐとしませう」留守か、留守なら歸る迄百年が千年でも待つてる
何處へ往つた。何時カ、歸る、怪しからん」大層な御立腹のやうだ
が全体どうしたといふので……」四邊の人々は「やア尤だく」
「しつかりやらツしやい」など煽り立てる「ム、ね前さんは今日此家
へ来た書生さんか……どうやら話の分りさうな男だから話して聞か
せる……」娘は影から袂を引張る、老爺頑固に肱で之れを拂ひのけ

る「ナ、かアに大丈夫だ、黙つとれ……かうなんだ。拙者はかう見
えても、舊幕時代には旗本八万騎の内に數えられた一人だ、今ころ
貧困にして提灯の骨を削り……だまつとれといふに奥も卷蓑を卷
いて、暮を立てゝは居るが、娘の尻を賣らせて衣食は仕らん。随分
下司下郎儕が、これなる娘阿栗が標緻なら行儀なら申分無さを奇貨
とし、ヤレ藝妓に致せ、ソレ妾に出したらば、左團扇とやらで世を
送る事も出来るなど、申して參るが、拙者に於ては未塵左様な淋し
い考は御座らん第一先祖に對して申譯が無い、世人に對して顔向も
ならんでは御座ざるまいかの……」小さな聲で又さうともく「と
いふ者がある、自分も「フム」御尤だぢ」うこで或者の口入れで

當家は家風も立派であり、高位高官の人々も多く出入り致すに依つて、見習奉公を致させては如何であるかと勧めたじや。それは何よりも望む處と、當人も勇んで奉公致す事となつたは一昨年十二月と覚えて居る。然るにどうじや、娘の内氣なま付込んで、忽ちの内主人風を吹かし、不埒にも手籠に致し、強姦同様の舉動に及んだじや。娘も自分の耻と思へばころつらひ、悲しいオ、思ひをして、コ、今年まで辛抱致したかと思へば……ナ、涙がこぼれて……」ム、我程うれは怪しからんですな、不埒至極ですな」四邊は「不埒だ」「亂暴だ」と口々にやや大聲「ろの内に娘は御覽の通りの姪身となつて御座るを、薄情にも此月初めに僅かの金を與へて追出し腐つたで

は御座るまいか。代議士とも言はるゝ身を以て、他人の娘を傷物も傷物、大傷物に致して追出し、剩へ人を以て懸合を致さすれば、知らぬ覚えぬとはどうで御座るな、人非人と申さうか、畜生と申さうか、言はうやう無き奴で御座る、此儘に致し置いては武士道が相立ち申さぬに依つて、今日は當家主人と刺違へて相果てる覺悟で下には經帷子まで着込んで罷出たので御座る。拙者の心中御察し下され」「ア、可憫さうに」と女將は女丈けにポロリ有志總代は切齒扼腕「……聞けば聞く程不埒至極で……然し刺違へて死する……夫れは御了簡が悪い」「ナ、なせ了簡が悪い御座るな」「ハテ相手が人非人、畜生同様……畜生と刺違へて一命を捨てる、サ夫れが武士道で御座るか、

イヤサ御不了簡では御座るまいか、自分も最早や辛抱も耐忍も仕切れ無くなつて来た、硬骨病が再發したのです。夫れで此憫れな、父子を如何にかして遣りたいと、思つた、夫れには粟尾に嚴談して、相當の手當を出させるに越した方法も無いと信じた。虎之進父子は言詰められてポロ／＼涙をこぼして居たが「ろ／＼承はればそれに相違は御座らんが、餘りに残念でゴ、御座るわい、オ、娘口惜しいか口惜しいであらうモ、尤だ／＼。死ぬにも死なれぬとは何たる因果か」との歎息「兎も角少しれ待ち下さい、今主人が歸つたかどうか見てまゐるから……」と言棄て、早や拳を握り固めて、主人の居間の方へ行くと、夫婦喧嘩だ「ありやア言懸りといふものだ、コレ

さら喉を締められては息が止る放せ／＼」放せつたつて放さねへだ放さねへださア彼方へ行つて刺違えて死なつしやい。田舎者だと思やアがつて、能くも女房を今まで盲目にしくさつたな。オイ野郎、代議士になれたも誰れの御蔭だサ誰れの御蔭だよ」「ア痛たツ、さうこづき廻はされては、堪らん、恐ろしい力だ、アツ、……誰か來てくれ——助けてくれ——」サどらだ性惡男め、十六七の娘盛り足駄を穿いて、日に米の三俵も搗いたもんだぞ、いくらもげへたつて放すもんか、締殺して、妾もれ死ツぬだア。サ死ぬのが厭なら地所も持參金もたつた今返して出て失せる、小糠三合持ても來やがんねへで婢なんかと乳繰りやアがつて、太てへ野郎ツ子だ。已ぬが

な、寒中裕一枚で慄えて居たのを忘れやがつて、よくも〜馬鹿に
 しゃアがつた、サア離縁するから出て失せろ。畜生ッ」座敷の内、
 ドタドタバタ〜の大騒ぎ、下女も書生も呆れたのかるれとも馴れ
 て居るのか出て来ない。障子は倒れる、二人も引組んで倒れる、
 栗尾夫人は庭へ轉げ落ちて目を回す、栗尾は命から〜夢中で玄關
 の方へ逃出す。出合頭に胸倉を取つて、エヤツと投付けたは、奥山
 老人の早業、阿栗嬢は驚いたせい俄に産氣づいて、オガア〜。
 自分も飛びかゝつて起上らうとする栗尾の横面をポカリ、新聞記者
 がポカリ、壯士もポコツン、高利貸もポカリ、有志總代もポカポカ
 ポカポカポコツン、女將は喰付く引搔く……。栗尾はギユウとも言

はずにへたばつてしまつた。

* * * * *

硬骨是は竹に節のあるのと同じでありませうよ、節があるのは邪魔
 のやうでもあるが、之が無ければ眞直も立つて風雪に操を誇る事
 が出来ない。自分も一度捨てた硬骨で先づ今日は、硬骨長官と言
 はれる迄になつたですな。栗尾計りぢや無い、今の奴は海月の化物
 ……蒟蒻の幽霊……徳義も制裁も糞も無いのだ。サ今少しストーブ
 の側へ寄り給へ、君なんかも亂暴はいかんが、硬骨であれと望む
 よ。

● 遅 櫻

(一)

芝神明の裏通り、狭き路次一ツ曲つて、衝當に、ペンキ塗の看板、
 かけたる齒又咬めて、人の膏の味忘れかね、こんな面白き商賣を、
 ない職としては勿躰なし、と弓なりの腰慾に張り、やどひ人請宿と染
 させたる暖簾も、二度三度染返させける。女主は於早とて、損のた
 つ事にはとぼけて見せ、利分の事なれば『馬鹿されてたまるもの
 か』

『オヤいらつしやらまし、何時も〜お忙しいさうで結構で御座い

ます、どうでお金をもふけるんですもの、さう樂なわけにはゆき
 ませんのサ、ナニ傳さんとまだ一所に居なさるのかい、彼の人に
 も困るね、別れてしまいなすつたがい、女好で酒好で博奕が
 (手真似で)道樂と三拍子ろろつてるのぢもの、ほんとにお前さん、
 お察し申しますよ、サア此方へはいつてお掛け下さい。

入つて来たのは女髪結のお新といふ、三十四五の小造な年増、筒袖
 に胸懸かけて、紺足袋の扮立流石は甲斐〜しく見えぬ、女主於早
 が煙草盆に火をとつて押出せば、笑ひながらお新は懷より煙草入と
 り出し、火鉢の側なる長羅字の煙管かりうけて一二吹吸ひ。

『だがね腐縁さ、子を捨てる藪はあれど、亭主を捨てる藪はないと

やらなんだらうよ』

『なんのこつた、少しづつかりおしよ、とんだ悲慈藏だ、アハ、、、』

『今日はね公園の松岡さん處の奥さんに頼まれて、一寸寄つたんだがね……』

『松岡さんかい、彼處は面倒でしやうがない、給金が安くつて、食物が悪くつて、旦那がぼろツカひで、小指がチン〜と来て居るから駄目だ、お断りだ、三度や四度でまとまるじやアない、やつとまとまると思ふと駆け出して来る、イヤハヤあんな家ツちやありアしない、飯焚かい、ろれとも中働かい』。

『さうじやないわね、彼家の旦那と一ツ會社へ出なさる栗原さんとかいふ方が、今度彼の二軒先へ家を持ちなすつたんだが、車夫と書生ばかりで女の手がないからといふんで、急にさがして居なさるのサ、髪錢湯錢先持で、月二圓半位は出してもよいから、少しは針の持てるやうなのがほしいとかういふのサ、年は二十位から五十位までの處でいゝとサ、さしあたりあらうかね』。

『ろりやあるよ、旦那は何歳にちんなさるね』。

『見た處では廿三四だらふが、役者のやうな好男子なの、こんな商賣でないと、妾が乗込むんだけど、オホ、、、』。

『少し險呑だが此方にも、廿一になる別嬪があるのサ、ソラ知つて

るだらう、去年まで日影町で唐物店を出してたの、一寸ソラ目の
パツチリした……』。

『あの別嬪がマアあんだつて奉公に出るんだらうね』。

『オヤお前の知らないなア唐の火事ばかりかと思つてたによオホ
、、、』。

於早は話しながら、汲んで出す澁茶の愛嬌も、相手が物にありさう
なかつもつてからの事なりき。

(二)

栗原富麿と磁の門札新しく、御出入は豆腐屋よりが始りける。車夫
は仙次とて生拔の江戸兒、書生の田川といふは、主人富麿が國許よ

り呼寄せし武骨漢、いづれ世帯などいふと知つた柄にもあらず、
松岡の下女來りて飯を焚きてかへるに。或時はこれを二日三日持越
し、臺所に蒲焼の鈍鉢をならべ。或時は一飯に大略平げ。日暮れて
更科の提灯門を入るとも珍らしからず。

主人富麿は會社よりかへりて、自ら羽織などたゝみ、書生は洋燈の
掃除、車夫は車を始末して臺所へ水を汲込んで居る處へ、桂庵の於
早婆が目見にとて一人の女連れ來れり。

『來たね、なか〜別嬪のやうでしたね。見ましたか』。

『見た、見たが別嬪だ、餘り飯焚には美しいがよく新聞にある喰せ
物ではないかね』

『なアに大丈夫でサア。此仙次が一目クツと睨らみやア、喰せ物か喰せ物でねへか直にわかりますせ、時に年は幾歳位です、年頃は』。

『さう十八九だらふかね、女の年は母親より外につゐる言當てた事がないから。過日も松岡の下女に怒られたがね、何でも十五歳以上三十歳以下と思ふたらよからふ』。

『プツ女工入用てんだ』。

富磨は目見の女を連れ來れりといふに、これを居間に通して容姿を見るに、起居舉動順柔にして、人柄卑しからず、年頃の若くして、思の外の美人あるは、世に對してうしろめたきやうにも覺えけれど。

松岡の親切を無にするやうにては氣の毒なりといふ考にもなりて、先づ半ヶ年雇入れの約束してつかつて見んと。

『名は何といつたつけね』。

『兼と申します』。

『兼……よい名だ。兎に角今いふ通り男世帯でやつて居たのだから。大分汚れたり散らけたりして居るだらふ、一日もやつて見て居られるやうなら居てもらひたい』。

『へへ、それがよろしふ御座います、此於兼さんは私も少さい時から存じて居ましてね。ハイつい御近所で御座いますので、御世話申しまして、振賣の奉公人と違つてどんなに安心かしれやア』。

致しません、ねへお兼さん旦那もあア仰しやるから。』

と小聲で後は於兼にさゝやき、互に一寸相談して笑をつくり。

『それでは明日伺に出ますとに致しますが、御氣に召すやうで御座
いましたら。一ケ年の御約束に致しませうか、如何で御座いませ
う』

『約束は半ケ年にして置くがよからふ、互に又どんな都合になるか
も知れんから』

『ハイ〜さやうで御座いますとも、じやア於兼さん氣をつけて
ね』。

桂庵於早はかへりゆけり、於兼は車夫書生に挨拶し、一通りグルリ

と掃除し、主人の寢床しきのべて、其夜は勝手元の一間にねぶり、
翌日は暗き内より起出で、主人が起出づる迄には清淨に拭掃除して
膳立して、金盥に水までくんで煙草盆に火を入れ、茶道具の用意し、
て、孫の手不用の働振、成程人の家に女はなくてはならぬものと富
磨も感じ入りぬ。

居馴染につれいよく身を謹み、氣輕に、正直に、クルリ〜と人
の氣の先をくゝりて働けば武骨漢の田川までも『親切』など貰むれ
ば、車夫の仙次も『氣がつく』とてこれを主人の如く大事がれり。
去れど一日の仕事仕舞ひて、獨り火鉢の前に座れる時は、於兼俄に
打鬱ぎて、人知ら涙ぬを絞るも縁由あり氣なり。

或日主人は仙次の車に乗りて會社に赴き。書生は學校にとて出行きし跡。時も早や十時過。出入の八百屋の來りて。あれかこれかと門口にて主人が晚餐の口に合ふやうかもの撰び居たりし折。通りかゝりしは於兼が無二の友達。今或商人の妻となりし於政といふ嫖俠者なり。

『オヤ此所に居るの……』

『まア暫く。家もあの始末なんぞでね。誰も居ないんだから一寸寄つておいで。八百屋さん今日はこれでよからふ。明日は忘れずに芥子をね。あア少しでいゝよ。サア於政さんお上り少しやアいゝん

だらふ』。

『なアに使にでも出て少し遅くなると。やかましういふから。わざと此節は遊んでかへるんサ』。

『オヤ羨しいねへ。かまわないから火鉢の傍がいゝわ。午餐でもしまつてゆつくり遊んでお歸り。四時迄は一人だから』。

『一寸静ないゝ家だね。勤人なの』。

『會社へ出るの。よく氣のつく御主人で。ほんとに居心のいゝツちやあ』。

『奥さんは。ないの……。死んだの。まだもらつた事があいなだつて。旦那が不嫖容でいもあるのかねへ』。

『どふして〜品の^{ひん}ある。身幹^{せいかん}のすらつとした一寸高島屋^{ちゆうとういん}ツてつたやうな方で。今年^{ことし}廿四だとかいつてらしつたよ。アラ今更^{いまさら}うんな氣^きがあるもんかね。お前^{まへ}も知^しつてる通り。先^{せん}のでもつてこり〜したから。男^{をとこ}は一生^{いっしやう}斷物^{たつもの}よするつもりさ』。

『さうさ源^{げん}さんも餘^{あま}り不人情^{ふにんじやう}だよ。あれ程^{ほど}お互^{たがひ}に惚^ほ合^あつて苦勞^{くらう}して夫婦^{ふうふ}にあつて。子^こまで出來^きた中^{なか}じやアないかね。店^{みせ}の有金^{ありかね}から掛^{かけ}先^{さき}から皆取立^{みなりた}て〜。なんだつてあんな狐^{きつね}にばかされたんだらふ。お前^{まへ}のお父^{おとう}さんでも丈夫^{ぢやうぶ}で居^いなすつたら。かうもならなかつたらふつて。始終^{しじゆう}我夫^{わがうぢ}とも言^いつて話^わてるの。薄情^{はくじやう}ツて源^{げん}さん位^{くらい}薄情^{はくじやう}を男^{をとこ}があるもんかね。お前^{まへ}のやうに容貌^{きりよう}よく生^うれても。運^{うん}といふも

の^のは知^しれないねへ』。

『うれも彼^あの子^こでも生^いきて〜くれたら。樂^{たのしみ}にでも少^{すこ}しはなつたらふと思^{おも}ふよ』。

お兼^{おまひ}は思^{おも}ひせまりて聲^{こゑ}も泪^{なみだ}にくもれり。お政^{おせい}はつとめて快濶^{くわいくわつ}を粧^まひ。これ^{これ}を慰^{なぐさ}めんとしたれど容^{たやす}易^{やす}くは其功^{そのこう}を奏^{そう}せず。

『うんな事^{こと}今更^{いまさら}思^{おも}ふより。立派^{りつぱ}な亭主^{ていしゆ}をもつて顔^{かほ}でも見^みかへしておやり。くよ〜するだけ損^{そん}だわね』。

『うれもさうさねへ。考^{かんが}ひどくさ〜して死^しにたくなるともあるよ。あせかう妾^{あな}しやア愚痴^{ぐぢ}だらふ』。

於政^{あせい}に遇^あひし日^ひより二三日^{にさんじつ}たちて強^{いた}く風邪^{かぜ}ひきこみて。お兼^{おまひ}は我慢^{がまん}

しきれず枕につきぬ。富鷹はこれを親切にいたはり。何時しか自ら名ある醫師をたのみ。日々來診せしむるのみか。朝夕枕邊に來りて病狀を問ひ。出る度に病人の口に合ふやうなもの調ひてかへつて。これかあれかと氣遣る、嬉しさ。假令眞實の女房いたはるとも此上はなるまじ。去れど五日目頃より熱氣出で、夜もろくくは寝られず。唯うとくと薄情なる良人のこと。生れて程なく死せる我子のこと。今の主人の身に餘る親切のこと。思つゝけて思はず涙にくれ居たる枕元に、何時しか主人富鷹は入り來りて。

『どうだね。氣を丈夫に持たぬといかんよ。病氣にまけるといふ事がある。氣で勝つ位であいとだめださうだ。今日は藥を飲んでし

まつたらふね。翌日は早く取りにやつて置くから何でも早く肥立つてくれ、ばい、んだから。なんだろうんな心配するから困る。主人に世話にあると思ふと遠慮が出る。なアに亭主にでも介抱されるところで。我儘一杯た、一杯にやつてくれたがい。不斷は不斷。病氣の時は少しも氣がねするなんぢやないよ。オ、熱があるね。ドレ胸をおみせ。なに熱臭い……。醫者だつたらどんな立派な醫者でもうんな事は言つて居られるんぢやない。瘦せな。

お兼は此親切に……此慈悲に……何と答へて何と御禮を申さう。胸に手をうつと當て給ひし時に。血は湧返り。骨々に嬉しさ染み渡り

て。

『ろう御親切になすつて下すつては。餘り勿躰なふ御座います。』
とひいつゝ。思はず其の手を握れば。握りたる手の指なでられて。
大事にせよとて起ちてゆかれぬ。世にかゝる御方もありけり。御年
若に似ぬあの御心の慕しくなつかしく御後影伏拜んで大膽なる妄想
をさへ惹き起し。自ら心を叱つては見たれど。御顔目につきて一夜放
れず。

(四)

春も彌生過ぎて、御庭の櫻早や風誘ふにもあらぬと、一片二片ちら
り〜と根にかへりて、空もどんよりと雨催ふ夕間暮、今日は亡き

兒の命日に當ればとて、何となく淋く、世の中あぢきなく涙さし
みて、お兼は過去行末の事など思ひつゝくる處へ、書生の田川づか
づかと入り來りて。

『今親友が急病だつて知らせてよこしましたから、看病に往つて
やるつもりですが、主人が歸つたら忘れずにさう仰やつて下さ
い、事によつたら泊るかも知れませんが、平生脚氣を病んで居たの
ですから、大方衝心したのでせう。』

『オヤそれはいけませんねへ、歸つていらしつたら忘れずにさう申
して置ませう、遅くもお歸りになれるやうならば、成丈けお歸
りなさいまし、下宿にいらつしやるんですか、夫は殊更お困で御

座いませうね』。

『さうです、つまり夫で充分養生が出来ぬと不斷申して居つたので、じやア頼みますよ』。

人の病めりを聞きては、人事ならず身に覺えて、見も知らぬ其人ながら、早く平癒なざるやうにと、日頃自らが信ずる神の御名、口の内念ずるも、やさしき心の一ツなるべし。主人の情に、我病も此頃はやゝ怠りて、湯にも入り髪もあげて、心地何となく勝れゆくことの嬉さやうにもあり、悲さやうにもあり、書生の出でゆきし後に、唯一人うつとりとなりて、火鉢にもたるれば、ハツと物に驚きてスツクと立上りし我の、夢なりしかとさとれどいと可笑く、針仕事

にてもして見んと針をとれど、病後の疲か惰くなりて手につかず、茶など濃くして飲み、又物思に沈む夜も十時過、『お歸りー』との一聲に、さてはど燭とつて出迎ふるに、主人富鷹は常にもなく酒に酔ひて、寢間に入ると其儘パツたり倒れて。

『ア、實に酔つた、お兼面倒でも水を……そして少し頭をたゝいてくれ』。

酒は命の玉箒とは如何なる事をいひけるぞ、吾れ思ふに命の魂を掃去るてふ誠の、其内に籠れるにてはなきか。儀狄はじめて酒つくれる時、禹飲んで甘しとし、後世酒の爲に國を亡ぼし、身を亡ぼすもあるべしとありけるとかや、よし夫程ならずとも、不善なかぢちす

ると多し。富鷹は兼のやさしきをめで、お兼は情ある主人の心慕はしく、交互にくからず思ふ心はありながら、流石は主従のへだてもありて、打解くる事もなかりけるに、酔ふてかへりて日頃よりやさしく、女の腸えぐるやうなる殺文句いはれて、これでも頼にならぬかと引寄せ給ふ我手、鬼なら知らず蛇から知らず、エ、なんとしてそれが氣強くふり放さるゝものぞ。

(五)

『御免下さへまし』。

『誰方ですか。今主人は不在ですが。何か御用があるですか』

『ハイ。實は妙な事を御尋ね申すやうで御座いますが。此家に於兼

さんといふ方がいらつしやいませうか』。

『居ますが。貴方は』

『私は其親戚の者で御座いますが。一寸逢つて話してまゐりたい事が御座いまして』

『さうですか。取次で上げませう』

と田川は今座敷を掃除して居る於兼の側近く來り。

『今和女に逢ひたいつて。若い商人体の男が尋ねて來ました。』

『私に……名を申しましたか。誰とか……』

『親戚の者だとかいひました』。

於兼は不審ながらに出で來りて見るに。こはこれ薄情にも俺をすて。

仇し女と共に手をとりにて。行衛しれずなりたる良人源藏なりき。何故今更俺を尋ね來りしぞ。

『於兼……於兼さん。久振で御目に掛ります一寸一緒に來て戴く事が出來ませうか。おひまはかゝせませんから。是非御話して置たい事がありますので』

『ハイ今は……主人も居ませんから。いづれ明日此方から尋ね申しませう』。

『じゃア濱松町の金さん所でお待ち申しませう』。とそこくくにして歸りゆく。あと見送りて何氣なく。座敷の掃除にはかゝりたれど心は迷ひ氣は顛倒。往くべきか往かざるべきか。若

し往かずしてそのために。主人に迷惑かけもせば。情を仇とや人のいはん。兎にも角にも翌日ゆきて。一か二かの話を定めん。うれにはかくくしかくと。何事問はぬ書生にまで言譯がましきつくり言。いふも心の咎あるべし。

田舎より親戚の人東京に來りければ。是非逢ふて來たしと於兼は珍らしく暇を乞ひ。其翌朝いそがはしく。濱松町へと赴きけるが。臆て日も暮々富磨の會社より歸れる頃。於兼は歸り來りければ顔色營ならず。

『れ兼一寸此處へ來てくれ。外の事ではないが今日よい事を聞いた』。

『それは結構な事で御座います……』
疵持足で返詞はしたが。モジ／＼して。如何にも居にくさうに見ゆ
るも是非なし。

『イヤ於前の身の爲によい事を聞いたのだ』

『えい……私の……』

『さうだ。御亭主が歸つて来たさうだね。イヤさう驚く事もさまり
の悪い事もないのだね前の良人のあつた事から何から。過去の事
柄は今日或人からスツかり聞た。夫を聞て實は後悔する事もある
のだがの。ね兼此處はね前もよく考へて事をせぬと如何んよ俺と
の事は於互に夢とでも現とでも斷念めてあきらめられる。だがね

前の良人の歸つて来たのについては。先づどんな考で歸つて来た
かを能く見抜かぬといかんのサ。俺もね前にはいろ／＼世話にも
なつたからいよ／＼元の鞘へねさまつて共々一稼しやうといふ考
なら。澤山の充分のといふ事は出来ないが。商賣の資本位は出し
てもやらふし。御亭主が何か務でもしたいなら。随分其方の骨も
折つて見やう。假令又どのやうな成行にならふとも。ね前の身の
難儀は捨てゝは置かぬ。なれる丈は力にもならふ。然し御亭主が
心から改心して歸つて来たのか。さうでなく何か外に考があつて
歸つて来たのか。吳々も夫を見定めて身の振をつけるが肝要なら
ふよ。見込がなければ何時でも歸つて来なさい。今から三年の間。

れ前の身の定るまで俺も屹度獨身で居る。さう泣かれては困る。決して悪く思つてはいかんよ。』

飽くまで慈悲ある主人の詞に。袖かみしめて唯泣く計り。顔あぐるさへ面はゆく。宥るし給へと繰返へす。心の内や如何なりけん。

* * * * *

『ア、さうか〜さうだつたか。何であんな莫連者に迷つて。れ前を振捨てる氣になつたかと思ふと。腹がたつて〜ほと〜自分に愛想がつきた。一寸の心得違から。お前に計りとんだ苦勞をさせて濟まぬ。これからは身を粉にしても。屹度眞面目に稼出して。れ互に楽しく一生送りたいものだ。世の中でいふ言に嘘はない。』

なア元木にまさる末木なしだ。あれ程苦勞しあつて夫婦になつた中なのなもの。夢がさめりやアもふ二度と苦勞させるものか。ゆるしてくれ。過ぎた事は過ぎた事で腹もたどふがゆるしてくれ。久振でれ詫旁々明日はそろつて亡舅の墓參をして來やう。サゾ坊主も草葉の蔭とやらで此親を怨んでるだらふ。夫婦そろつて居て育てたなら。ムザ〜死なせはしかかつたもの。ア、思へば魔がさしたのだ。公園の旦那もね情深く折角さう仰しやつて下さるのだから。誠にね詞にあまへるやうだが。一時資本を拜借して。もふけ出してねかへし申したらよからふ。改めて俺も御禮に其内出るとせふ。』

鬼とのみ思ひし人にも。人らしき心はありけるよ。素より此方よりも惚れて添ふたる男のこと。かくまで改心してしほれたるやうすのなんの憎かるべき。なんの怨まるべき。ホツと胸なで下ろして。早や打融くる女心。春の朝日に談雪の……。

(六)

遇つて話して言譯も聞けば、思ふ存分と張詰めし怨も言はれず、殊更男の身として涙をこぼす迄に昨非を悔ひ、やさしき事の一言一言何となく骨身にこたえて、女房の手前も氣が咎めてか肩身せまく、濟まぬくと溜息つくを見るにつけ、憎い男めがもろくも憐になりて、これならばと其いふがまゝ、世帯を持直して共稼にする氣にな

り、或日文細々と認めて栗原方へ人もて届けゝるに、其翌日車夫仙次尋ね來りて、商賣の資本にとて百圓借受け度き由の御申越承知せり、残五十圓は聊か主人よりの祝儀としてまゐらせよとのと、改めて御受取り下されとて、百圓束と、十圓紙幣五枚合せて百五十圓なげ出し、そこくにしてかへり行きける、良人源藏が喜は兎に角兼は情の飽まで深き主人の仕方に、難有いやら耻しいやら心の内に伏拜みて、決して仇には致しませぬと、繰返し、夫より寝るにも公園の方に足むける事もなかりし、馴れぬ商賣もいかゞと、先づ日蔭町通りに小き間口の店を借りうけ、金量の安き品より仕入れて、夫婦共々油断なく、お兼は店番しながら毛糸もて、靴足袋さては子

供の帽子ぼうしを編物あみものして、朝早くあさはや夜遅くよるおそ一錢二錢の客きやくにも愛嬌あいげうふりま
 けば、先づ此順このみでと見込みこみつく程次第ほどしだいに客も多くなりぬ、良人源藏たつとは
 月に一回若くは二回、仕入し入れにとて横濱よこばに赴く外は、一夜いちやなりとも外
 に寝泊ねどまりせし事もなかりしが、殆度店ちやうどをひらきしより三月みつきめ目の事を
 りき、賣溜うりだめに彼方あちこち此方このち融通ゆうつうせし金二百圓餘ふたひゃくご懐ふところにして、横濱よこばの去る商
 館しんかんに割わりよき新荷しんにかのつきたれば、仕入物し入れものして來らんと出で行き、常に
 はなく三日餘を費し、四日目の朝あした茫然ほんやりとして歸り來れる顔色かほいろを見る
 に、血ちの氣けなく蒼あをざめていかさま唯事ただごとならず、膝ひざすり寄よせて氣遣きづかは
 し氣けに問とへば、實じつは慾よくに迷まよひ詐欺賭博さぎごぼくにかゝりて、瀛車きしやちん賃ちんさへ歸り
 には横濱よこばの友達ともだちより立替たてかへてもらつて來りし始末しまつ、此上このまへは和女まをしにも申

譯わけなく、公園こうえんの旦那だんなにも顔かほが立たねば、いつそ死しんで仕舞しまひたしな
 ど、目めの色いろかへて氣きの狂くるふたる様子ようす、ハツとは思おもひたれど今更いまさら愚痴ぐち
 をならべて刃物はものざんまい三昧さんまいでもせられてはどの心こころより、却かへつていろくいろくに
 慰なぐさめすかし、妾わたしが身みを賣うつてなり此店このみせは持もちつゞける程ほどに、それ位それほどの
 事ことよ心配しんぱいして、病わづらつていも下くださるな、男おとこのくせに氣きのちひさい、運うんが惡わる
 くば怪我けがで死しぬ人もある世よの中なか、心こころをちやんと持もちつて下くだされど、詞ことば
 をつくして意地いぢを見するに、やゝ心落こころをち付ちきたるか、顔色かほいろも常つねにはか
 へりたれど、時々ときときフト思出おもひだし言出いひだしてはふさぐも尤なほもなり、去いれば
 とて此小ちひさき店みせに二百圓ふたひゃくごの穴あなあきては、いかで齒切はぎしりかむとて取とかへし
 のつくべき、さはいへ未だ店みせを開ひらきて三月みつき立つかたゝぬに、栗原くりはらさ

んへの義理にも此店はたゞまれず、いつそ思切つてと或夜良人に身賣の相談かくれば、これといふも我臍甲斐なきよりのと、土食つて死ねばとて、女房うつて世の人の慰者にしたくはなけれど、背に腹はかへられずと、泪はらゝ流して口惜がりける。

外に能き思案もなければ、いよゝゝ其道の人又わたりて、吉原の或妓樓に三ヶ年三百圓にて身を沈め、親の知らぬ名を人に勝山と呼ばれて、全盛が何の榮華、暇だにあれば獨り涙にくるゝより人は泣勝山とて評判するもうるさし、唯祈るは良人が店をひろげ商運に叶ひて三年の年季あく迄に、四間は及ばずとも、せめて二間の暖簾そめさするやうにあつて居てくるゝやうにとの一事、客毎に夫とはなく

店の様子さぐるを樂にして、聞きしにまさる浮世の地獄、成程苦界とは身をつみてぞ知られける。

(七)

或夜來りし客は三田の邊の書生なりき、これにも日蔭町の通にかくかくの唐物屋ある由なれど知るやと問ふ。

『さうあるゝたしか都屋とかいつた、色の白い一寸小意氣な男が居た、實は何をかくさふ切ても切れぬなどゝ、物凄い落がつくやつサ』。

『あんですつてにくらしい、憚んぢがらさうまだね目出度くもなりまへんのサ、實は朋輩の衆にひどく彼の人に打込んでなさんすの

があるぞますが、暫く見えぬからって、毎日〜其事ばツかし言
出して泣いて居るのを見るに見かね實は……

『さうか、併し此二三日戸締になつてるやうだつたせ、イヤさうさ
う戸締處か今朝通つたら貸家札が張つてあつた、大方引越でもし
たのだつたらふ』。

『エツ……そゝそりやはんの事ぞますかへ』。

『ほんの事サ、講釋師なら知らず、嘘で飯が食へるとか、酒が呑め
るでもねへからの』。

『それがほんの事……そゝ……』。

『花魁も疑深いね、さうよ保険附サ』。

此事をさゝてより、一夜兼の勝山は心地病しく、半信半疑に胸を
いためて夢も結ばず、翌る朝客を送りかへしてよりは、唯我部屋に
籠りて、新造に茶をいれさせ其日の新聞など讀ませて、強て心の鬱
をちらさんとつとめけるに、讀行く新聞の雜報に「男畜生」といへる
見出あり、これはこれ他人事ならで、我身の上ありき、新聞によれ
ば、良人源藏が改心したる如く見せて、東京にかへり來れるは、其
の實人の噂に俺と栗原との深き關係ありときゝ、改心したる如く見
せて再び家を持たんと言出さば、必ずこれを否むべし、否まば金に
してとの慾心にかゝりての事なり、先に手をとりて逃げたる女をば
横濱に忍ばせ置き、種々俺を欺きて仕入をかこつけ、折々横濱にゆ

きては樂み居たるのみか、詐欺賭博にかゝりたりとて俺をすかし、遂に三百圓にてこの苦海に沈め、其金を握ると其儘密に横濱より女を呼寄せ、商賣は打棄て、戯樂にふけり居たりけるが、二三日前商品をば安價に仲間へ賣渡し、何處へか赴きたりとの事、いと精く書記せり、あゝ知らなんだく、男畜生人でなし、ちゝ畜生……よく書いて下さんした。

何をいふも身の愚より、いつぞや御暇申した折、流石はうれと見抜かれてか、三年迄は待つてやらふと、富磨様のあの御詞、今更さつて何とする。かゝる汚れた商賣に身を落したも何の爲め、よし又富磨様の今以て御情露だに變らずとも、どの面さげてをめぐと、

二度と顔をば合されう、いつろ死んで御詫言申さんとは思ひながら、せめて餘處ながら御様子をど、或日鴛母を密に頼み、富磨の様子をさぐらせしに、鴛母かへりて、其方様は丁度れ前が此廓へ來なした月の事、或立派なる家よりして、美しい嫁をとり、鴛母にもまさる睦じさと、聞くに一縷の頼さへ、切れしも無理か御道理な、御道理至極で御座ります。なんで御怨み申しませう、却つて貴方の御心に御怨ならば御座んせう、と五日六日は泣暮し、更に店へも出ればこそ。

『噫、酔つた酔つた、なんだとえ、怒つて歸るつて、歸しておやり、最早どうで脈が上つてるのだから、來あつたつていゝじやない

か、なに義理だどえ、人情だどえ、世の中に義理も人情もあるものかね、嘘いつはりは廓の習、手練手管が女郎の誠、だまされるのが厭なれば、なんで大門くゝるのか、生中意氣の張だのと騒ぐやうな心懸では、素貧客に魅入られて、年季増したり鞍替したり、結局つまつて情死沙汰。どうで男は浮氣者、四角を顔して堅がつても、表面計りの慾徳づく、女きらひが一人でもあつたら、妾に當がつて、腕だめしでもさせて御覽、廓へ命を振賣の、假令男の五人十人、絞つてしぼつて絞りつくし、命をとつて捨て、からが、蝗の脚を引抜いたり、蜻蛉の羽をむしつたり。して逃すのも同じと、何の罪にも報にもなりつこがあるものかね。さア今少し飲ま

しておくれ、ア、好心持だ酒はつかしが妾の情夫だよ。
 勝山の心はがらりと變り、日頃は餘り嗜まぬ酒さへ上戸の名をとりて、金ある客は引つけて、見るく、財布の底をはたかせ、浮氣といふ浮氣仕盡し、苦海を今は苦にもせず、笑つて暮せば自ら、泣勝山の噂はやみぬ。酔へば手拍子面白く、小歌うたふて打興とける。

● 片 夕 暮

(上)

目に青葉山牡鵠此二つには事か、ぬが、七月に入りて初鯉、それも
 不鹽ならぬをうらむ片山里、筑波の麓に椎ヶ尾と呼べるは、筑波町

より登山するものゝ、山越しての下り口、旅宿二三軒もありて、若者の心狂す赤前垂も、必ず一軒に二三人は抱へられ、往來の客に愛嬌をば汲む瀝茶幾杯、物になる客、ならぬ客は、茶碗とる時の目付にて知らるゝとまで、苔の蒸したる新造もあつた。

其内にも寅屋のお玉は東京の生れ、縹緞よく、心立よく、男嫌ひといふが風評になつて、雨風厭はず山越して通ふ男も多い。村内の誰彼、寅屋の宿帳に名をとめし程のもの、お玉が一夜の情だにあらば、身代も命も、いづれにににしてのけてさらしく恨なしと言はぬも無かつたのである。

『跛だつて笑つちや、可憫さうだ、正直で、親孝行で、吉さん位

頼母しい人はありやアしない。同じ亭主をもつならあんな人を持つちたへんだよ、アラ戲談じやアありやアしない』

客は大方開放ちし座敷々々に、大の字にあり、くの字になり、谷間から若葉を吹分けて來る涼風に、大鼾睡かく午後一時過、婢部屋に寄り集つて、お玉が髪をなでつけて居る傍に、寢るべつて居た三人の婢は、お玉が剛力の吉といふ跛を、亭主にまでしたいと言ふのを聞いて、互に目と目を見合して、呆れた様子の内にも、これがれ玉の心から出た詞ではあるまいといふ疑念は充ちて居る、又猜忌から、實際の通りであれかしと祈る念も無いでは無し。

『オホ、、、れ玉姉さんが、お前を亭主に持ちてへッて焦れてる

だッてさう言つて見べい、吉公屹度吃驚げて、跛でせへ澤山だの
に、今度ア腰を打抜して、目でもオン廻すべい』
と色黒く目の丸く肥りたるが言へば、瘦形にて色蒼く、髪のちいみ、
顔のしやくれたるが膝を進めて、

『吉公ばかりじゃないわね、此村ばかりでも五十人やうこら、屹度
腰抜が出来るワ』、

この女水戸より流來りしと言ふ程ありて、詞のみは覺束なき東京辯
なり。他の色白く、丈短き、口の大きな女は、緋金巾の湯卷一ツ
になりて團扇つかひつゝ。

『吉公今日來たら奢らしてやるんだ、なんでもウンと腰がぬける程

奢らせるんだよ』

れ玉は髪をなでつけて、チヨイと紅を唇にさし、合せ鏡をしなが
ら。

『うんなに吉さんだつて、吃驚して腰をぬかし、奢らせられて腰を
ぬかし、二度も腰を抜しちや、女房所じやあるまいぬ、オホ、

日當よき部屋の簀戸に、雲の陰は幾度か落ちき。山禽の聲幽に響き
谷間に落ちゆく水の音淙々として、田舎には五月蠅かる蠅も少い。
風に傳ひて何人か遠く歌ふ聲が聞える、聲は猶幾千仞の巔にあるの
である。絶えつ續きつ、耳を濟ませば吾ながら酔ふが如く、心をと

むれば、心地よく氣もとけくとなりて、何とも譬ふべき詞もない
れ玉は先づ此歌を聞出したのである。

『吉さんだ、なんて好聲だらふ、……落ちて流れて——淵とウなる——』

—、ア、身に浸み渡るやうだ』

茫然と聞はれる、他の三人もこれには同感であるらしい、瘦形はニ

コリ笑つて、

『良人に彼の聲を持たせたら、どんなにいゝだらふ、ね玉姉さん

の前だが吉公なんかにはや惜しいもんサ子』

黒さは唇をうらして、

『良人じやなかんべい、斑だんべいアハ、、、』

白きも和して、團扇を両手にて風車の如く廻しつゝ、

『八犬傳とかの、伏姫じやなくつて、ね前の髪がうんなだから、ク

◎ せ姫と洒落るんだ子』

瘦形はムツとして、白きと黒きとを睨みつ、

『斑だらふが三毛だらふが、大きな世話サ、お前達のやうに振賣

はしないんだよ、チャンと心では一人ときめてあるんだ、へん馬

鹿にするにも程にねしな』

と角目立つ、今一言いはい、つかみかゝらん権幕。ね玉は兩方をな

だめて笑に解くる折柄、客を送つて早やくも着いたのか、主人に挨拶

する吉の聲がした。

(中)

剛力の吉は筑波町の麓なる茅屋に住み、日々町の方より山越の客を送つて一人の母を養ひ、傍學問を好みて手に書籍を放たず、素情は此町に二代程前までは、一二と言はれし程の家に生れたので自ら賤からぬを知つて居る、町の人々は、吉の今日を憫み、何事につけても便利を與えるやうにして居る。吉もかくと知つて骨身を惜まらず正直に働けば、なか／＼一人には餘る程の用があるのであつた。寅屋に客二人送り込みし吉は、大肌ぬぎで汗をぬぐひ、貰一喫して居る處へ、彼の黒き女は出て来て、

『吉さん御苦勞さま、ね玉さんがれ前には是非頼む事があるから、庭先から廻つて呉れなつてよ、ほんどだよ、疑深い人だつちやアな』

『なんだ、買物でもあるのか、今日は急ぐから後にしたらいい』

『なせうんな事を言ふんだ、筑波町に誰か馴染でもこせへたんか、油斷がなんねへ』

『アハ、、ねすみさんは何時も元氣だね、筑波町でも大した評判だせ、少しや奢つてもいゝね』

『オヤ今日はれ前に奢らせるんだによ』

吉は庭先より女中部屋の椽に廻りて腰をかくるを見て、ね玉はいろ／＼として出迎へた。

『忙がしいのに吉さん濟なくつて子、サアね上り、ア草鞋だつたに、どれ妾が解いて上げやう。今日はゆつくりしてつてもいゝだらふ、いろ／＼話をしたい事もあるから』
草鞋をとかうとする手を拂ひのけて、吉は叮嚀に幾度か會釋しながら、

『ね玉さんさうしちや居られませんか、何か御用なら此所で……餘り遅くなるとね袋が又案じますから』。

と椽の柱を小楯にとつて、眞赤になつてモジ／＼して居る。髪も梳らず髯もろらず、日に焼放題焼けて居る内にも、此處か土が産せられた種でない氣品もある。庭には高き崖より樋を通はして、山清水が

水晶の如く木の葉の緑を溶して、苔青く蒸せし自然石の上に落ちて来る。石に當つて碎けて、水は悉く飛沫とあつて消ゆるかと思ふに、消えも果すして小さき池をたゝえ、金魚、鯉、真鯉、其他數ある小魚の命をつちぐのである。竹垣の前なる春日燈籠に添ふて、花栢榴の花枝もたはむ程、乙女の振の袂より緋縮緬の襦袢の袖のすべり出たやうに咲いて、青み勝なる庭の内に、言ひ知らぬ美しさを加へて居る。椽先を走りて白き黒き瘦形なる三人の女は來りつ、二人は左右より吉が兩手をとり、一人は庭下駄穿きて前に廻りつ、其草鞋を無理に解き棄て、否むを許さず座敷へと押上げ。

吉『こりや亂暴だ、遅くなると困るに、どう／＼……………』

玉『さぞ御迷惑で御座んせう、然し今日斗りは妾が少し折入つて
れ話したい事があるんですから、落付いて話していつて下さ
へ』

△『なアに一晚二晩泊めてもいゝですよ、筑波町に何か出来たも
んで、此節ぢや歸りばかり急でるんだもの。』

○『さうだアよ、お母さんに計り孝行するんじやあんめへツて、皆
なが言つてら。隠したつて駄目だ。』

吉『どふしまして、うんな氣樂じやありません。』

●『マアい、から姉さん澤山いぢめてやんなせへよ、サアおすみ
さんお糸さん彼方へゆくべら。』

三人はドヤ／＼表へ出ていつて、後にはお玉との差向ひ、吉は又チ
ヤンと膝を折つて、頭をかきたて、居たが、れ玉のすゝめた茶を一
口にはして。

『れ玉さん何用ですか、早く知らせて下さい、エお玉さん。』

れ玉は嫣然して少しく顔をわからめ、

『用つて少し變な用なんだから言悪くつて仕様がないな。』

『うんなと言つてられちや此方は猶困らア。』

『うれぢや思切つて言つちまうがね、吉さん……………。』

『なんだね。』

『妾を女房に持つておくれな。』

『ボウ……途方もねへ人だ、呆れッちやア……馬鹿にしな
 さんな。』

『ッ、ろんなに腹を立つちやアいけないわね、妾だつて寅屋のれ
 玉、何も浮氣でこんな事を言つたんじやない。れ前に眞實見込が
 ある、一生こんな田舎に剛力して暮す人ぢやあいと思つて、夫で
 女房になりたくなつたんだ。だから今が今なら此方で斷はる、吉
 さん五年でも十年でも、れ前が出世をする迄は待つてるから。エ
 どうだへ、女房にしてくれかへ。』

吉は桃尻をして聞いて居たが、痛く感じたらしく眼を閉ぢて、暫く
 考へて居たが、ホツと吐息して見開いた眼には笑を帯びて居た。

『お玉さん……お前の心さい其通りなら、此方から頼んでも女
 房になつてもらいたい。然し今は此通り剛力の吉だ、一人のね袋
 さい不充さして置く剛力の吉だ、此先ごふならふとも夫は腕次第
 運次第、當になつてならない、先づ十年たつても廿年たつても女
 房一人食はせる程の出世も出来るとは受合はれない。見込はある、
 然し當にはならない、先づろんな約束はしない方がお互ひの爲だ、
 さう思つて呉れた丈けは難有い、又身の奮發にもなつた、御禮は
 此通りする。』

『ろんなまねしてもらいたかないよ。妾しやア一端思込んで口か
 ら出して、夫でお前にはねつけられて、黙つて引込みやしないよ』

ろんな女じやないよ。妾ぢや不足なんだらふね、エ不足だから断る、お前のやうな女を女房には持てない、とかういふ風に強く言はれると断念めて覺悟もするがね、ろんな生殺しぢや厭だよ。

「不足………不足どころか勿体ねへ位だ、嬉しくつて夢ぢやないかと思ふ位だ、困るな、そんな事言つちや困るな。夫れぢやかうしやう、三年たつて女房に持てたら女房にする、それでも腕が甲斐なくつて持つ事がまだ出来なかつたら、それまでの縁と思つて断念て呉れるんだ、子れ玉さん厭か。

「オー嬉しい、吉さん屹度だね、夫だけは間違ないでくれ。三年位妾だつて辛抱して居る、れ前も辛抱して出世して呉れよ、

後生だから。

軒先に吊られた風鈴は、吹込む涼風にチリン〜音をたて、奥には晝寢して起きた客の欠呻が、高く間抜けて聞えた。

(下)

今日は明日はと思つて、然も年寄つた母を人に頼んで行く事の心許なさに、のび〜となつて居た出世の發途も、れ玉の事から幾分か勵されて断然日を定めて、母にも之を告げ、留守中は町の中にも篤實家と評判さるゝ某に頼み、これ迄貯蓄した金も残らず母に渡し、れ玉にも留守中を能く頼んで、終に東京へと發足した、れ玉は喜んで吉藏の發途を送つて、夫からは絶えず山越しに筑波町へ出て、客

からのもらひ物や、わざく〜とへのへた土産物を吉藏の母へ贈つて義理堅く辭退するのを、「吉さんには御恩になつた事のあるんで」と譯を言つて置いて歸る。一年も過ぎ二年も過ぎ、吉藏からは更に音信がない、母の許へは唯丈夫で働いて居るとの葉書が、月に一度づつ屹度來るさうであるが、夫より外の事は少しも知る事が出來ぬ。折々は餘り心強いと怨めしくも思ふ、しかしそれも愚痴だと自ら責めて、早くも三年目の春とあつた。最早音信もあるべき頃である。れ玉の評判は以前よりも高く、れ玉をつけ廻す客も日に多きを加へた。其内にも此隣村にて近傍八ヶ村の金満家中第一と指折らるゝ、富田金次郎といへる卅二三の妻子もある男、一切れ玉に夢中とあつ

て、金にあかして寅屋一家の者を味方とし、毎日毎夜詰切りの惡口説、腹は立てども先は客、主人の爲め朋輩の爲にもなると思へば、唯能き程に綾なして一日二日と脱れ居たるに、先もさう〜は釣られて居ず、次第によつては手籠にしてもどの權幕、最早やキツパリと投出すの外おしと思案し。或日一二杯酒の勢をかりて、思ふ存分愛想づかしをならべ立て、主人はじめ驚きて、一家中の人々なだめてもすかしても聞かず。惚れて〜惚ぬきし金次郎を怒らして歸せしは歸せしが、歸り際にお玉をにらみて血相恐ろしく、「阿魔め屹度覺えて居ろ」と殘せし一言、流石氣丈のお玉なれど、氣にかゝりてか、暫くは山越しもしなかつた。去れど十日經ち廿日經ち、何の

變りし事なし。

或日の夕暮、珍らしくれ玉に宛てたる一封の手紙が來た、表には東京深川にて吉藏としてある。思ひ絶ゆる間も無き其人よりの手紙、善か悪かと心先づとゞろき、封押し切つて讀下すに、出世も出世、吉藏は僅三年の間に五万餘圓の金を得て、新に肥料問屋をひらき、資本の二三十万は廻して呉るゝ人もあると、一週間の内には筑波町にかへりて、母もお玉も伴ひて再び上京すべき事など細々としたゝめてある。れ玉は此手紙を胸に當てゝ嬉し涙にむせんだ、やがて之を主人と朋輩に示して、我目の高かりしを誇りつゝ、女もね唯當座に目が眩むやうぢや、一生樂は出來いよ。富田の道樂日那、んぞに身

を委せて御覽、又どんな風の吹廻しで、外に増花が出來まいもんでもあいよ、飽かれて其時追出される。今こそ人が兎や角言つて呉れるが、年は寄る皺は出る、誰が鼻液でもひつかけるもんか。よしんば何時までも置いて呉れたにして、あんな人の身代はね筑波様の雪と同じさ、有るが有るにありやアしない。今に御覽、人の田畑をつくるやうになるから。

夕陽のまだ山の腰から上を照して、谷間くから風につれて湧いて來る雲を、種々の色に染めて居るうちに、麓は蒼白くかすんで薄暗くなりはじめた、利根川や霞浦も朧氣にそれかど見ゆる。大御堂で

叩く鐘の音が、仄に澄んで聞えて、風の加減か又パツタリ絶えて、絶えたかと思ふと續く。涼しいといふよりも寒い、サラ〜と戦ぐ熊笹の音も身に染み渡る。女躰の祠を過ぎて今五軒茶屋の方に來懸る女は寅屋のれ玉である。東の空を木の間より見返れば、夕月は早や夕陽を送り顔に片破の影を宿し、夜の光を待つ風情、いひ知らず美しきに思はず立留る脚下より、飛立ちしが如き杜鵑の一聲、何處にと見れど杜鵑の姿は非ずして、一片の白き雲巖頭に觸れ二筋に分れて、ゆら〜と流れ行く。麓の方は次第〜に暗くなりまされば、心もせかれて足をはやめ、細道たどる傍なる茶屋のかけより、小走りに走出せし一人の男、裾高く褰げて、面をば手拭にて包み、

れ玉の前に立塞りて、右にもやらず左にもやらず。

『れ玉ツ待つて居たぞ』

手拭どりのけるに彼の金次郎である、お玉もギョツとして二三步思はず飛退いたが、素より胸度のある女、冷に笑をうかべて、

『何か御用……ならぬ戀の意趣とやらでもありませうか、そんな事に命を捨て、それで世間で譽めますか。妾の命を御用次第山越するのを待つてゐるでの事も知つて居りました。知つて一人で山越したも、貴郎に御目にかゝつて御意見が申して見たさ、道理のわからぬ方でもないに、無分別な事なされますか。さアどうで御座んす。』

逃げ出さば一突と懐にせる合口右手に握つめし金次郎、れ玉の存外なる度胸に氣後れしつ、

『無分別は覺悟の上だ、待つて居るのを知つて山越し、たとあるからば、命は呉れる覺悟だらふ、さア念佛でも唱へて居ろ。』

口では立派に言つたものゝ、拔放した合口持つ手は戦ひて居る。れ玉は少しも動かぬ。

『無分別は覺悟との事なれば、妾も覺悟致しませう、然し妾も寅屋のれ玉、妾ゆゑに奥さんもあり子供衆もある貴郎を殺して、怨を此世にのこすのも残念で御座んす。死ぬのは何でもない事ながら奥さんや子供衆の事を思へば、つらい悲しい思はしても、貴郎の

お情に随ひませう、吉藏殿との約束は無にしても貴郎のお心に随ひます。サア一緒に連れて往つて下さいまし。

吉藏は兎も角も出世をして歸省した、然るに何故かお玉は其前日筑波の山中で、自ら縊れて死んだのである。片夕暮に人の戀しきと言ひけん大御堂の鐘の音は昨日に變らぬ、戀が積りてと詠まれたみちの川も、昔ながらに流れては居るが、想ふ其人の行衛を問ふに、松吹く風の音のみであつた、

あしたの露

或夏の朝早く、吾は用事ありて山王臺下を過ぎぬ、青葉に露滴りて
風自から涼しく、日枝の御社に朝鎮すなる太鼓の音もまだ眠氣あり
き。牛乳配る車の走り過ぎたる後は、人跡絶えて瘦せたる犬の食を
漁り廻れるのみ。

カラコロといとちまめきし下駄の音に、フト彼方を見遣れば、深張
海老茶の洋傘に深く面をかくして、目につき易き緋縮緬の蹴出し、
一歩一歩にチャラつかせて、色白き素足瘦せず肥らぬ肉合うれしく
吾妻下駄の緒の薄紫も、縁の色としいへばなづかしからぬかは。日
もまだ射さず、人も多くは通らぬ頃あるを、何とて斯くは其面をば
つゝむならん。讀めたり、扱ては此娘は赤坂の邊に住みて、賤しき

務をばしつ、たまにはとて昨夜去る情人の許に遊び、今や後朝の怨
に泣きて、其家に歸らんとするなるべきか、人を人とも思はぬ身に
も、流石に浮名をば立たせじと厭ふなるべし否、其風姿に艶なる様
は見ゆれ、帯をばさりゝとれ太鼓に結びたるのみか、着物の裾も黒
人としては餘りに短から着なしたり。思ふに之れ人の妻なるべし、
良人の仇し心に争ひまけたるか、姑の意地悪しきに堪へ難かりてか
今良人の家のをがれて、親許に泣かんとて急ぐならずや。兎も角
にも其隠せる顔にこそ此疑問をも解くべしと思へば、愈々見たき心
地はしたれ、わざと然氣なく、吾は道の右を、彼方は左を行き過し
つ、密に顧盼すれば、彼方も同じく振かへり見たり。フト顔を見合

せて吾は驚きぬ、彼方は狼狽へぬ、洋傘は再び深く其肩より上を掩ひき。去れど最早や秘密は公となれり、娘は痛く顧盼せるを悔みつゝ急ぐなるべし。

吾は何を驚きたりしか、娘は何故又狼狽へたりしぞ、其容貌の怪異なるに吾は驚きたるなり、娘は耻ぢたるが故なるべし。前にも言へし如く、色は雪の如く白し、髪は光澤ありて多く、其生際特に麗しかり、眼は少し憂を含みたるが如くは見ゆれ、黒目勝にていと愛らし、眉も蛾眉を畫きて申分なく、鼻筋も通りて美人の内の美人なる可きを、見よ其下唇より下を見よ。上唇の朱をさしたるが如く美しきにかへて、下唇は其四五倍の厚味を持ちブハ〜と垂れて、頤も

筈の如く腫れ下りたるが、唯一面に葡萄酒につやくと腐れて、觸らば皮のツルリと破れ、肉の塊のポタリと落ちもすべき様あり、年の頃は漸く十七八、多くも甘をば越えざりしあらん。憫れむべき娘よ……御身は吾れに其面を見られたるが爲めに、さらでも臆病なる小さき胸を、如何に躍らせたりしぞ、御身の親の御身に就て歎くがごと。吾も今日よりは御身の爲めに歎かん。御身の爲には葛城の祠の故事ならね、世に書てふ事のあるぞいとすらみなる。世をして常闇たらしめよ、吾は御身の爲めに夫れをしも忍ばん、世の人をして悉く盲目たらしめよ、吾いかで御身の爲めに盲目の一人たるを辭すべき、噫苦しき世に無比苦しめらるゝは御身なるべし。

鴉の羽音高く林間に没しぬ、蟬はジ、と騒て樹より樹に飛交ふ。

秋の雨

思ふ事は世と違へり、成さんと望みたる事は皆蹶きぬ。吾は悲しみと失望を抱きて故郷に歸れり、去れど父も母も祖母も弟妹も、皆笑顔で以て之れを迎へ、嘲笑せられつゝありし身は、俄かに蘇生したるが如く覺えぬ、家人は又努めて吾を慰めぬ、冷罵に慣れたる身には、氷の海を出で、春の光に逢へりし思なき能はざりし。吾れ都に在りしもの多年、母は此間にいと衰へ給ひぬ、去れど五十路には猶ほ足らぬ齡なり、吾は猶ほ何事をか成し得可し、願はくは

父と母とを壽長からしめ、晩年を我力の限り、楽しく面白く養ひまゐらせんとは心に絶へず期し居れるなり。庭前の黄菊白菊、作りたる、自然なる、葉色露に麗はしく、咲出たるもあり、蓄なるもあり。栗も笑割れて朝風にハラ／＼とこぼれぬ柿も色づきて葉がくれたるさへあらはとはなれり、時は十月の五日の夜、夕暮より空搔き曇りたる空は雨となりて、家をめぐりて虫の聲々一入哀深かり。吾れは枕につきたれども、さまざまの事胸に浮び来て、眠らんとするも眠る事能はずして、時計の十一時を報つまでとはなれり。早くより寢入り給へる母は俄にいと苦し氣に唸め給ひぬ、夢にや襲はれ給へしならんと、聲を掛けぬれど答なし、再

び唸き給へぬ、父も夢さめて如何せしむと問ひ給ひぬ、去れど答へ給はず、吾は衾を蹴つゝ燈火を手に取りぬ、父も起出でゝ母の枕元近ふ寄り給ひぬ薄暗き燈火の影に、母の顔は蒼ざめて、其咽喉にせきあぐる痰をば吐出さんとし給ふものゝ如くなりしも、早や起きかへるべき方も無く、眼を開くべき勢も失せ給へたるなり。『醫者を』父と吾と同時に顔見合せて、同時に慙くは言出しぬ妹も驚きて、醫士の許へ人を雇ひて走付けしめたり、吾は靜に母を抱き起しぬ、父と妹とは藥をすゝめ、其背其胸を撫で、其脈を試み百方手當を加へぬ、去れど萬事は既に休めるなり。呼吸は次第に細く、あるが如く無きが如く、体温は足先より失せ來りて、唇も又色を失へぬ。』

駄目だ、ソツと寢せて置くがよい』父は大息しつゝ慙く命じ給へぬ妹は此言葉を聞き聲立てゝ泣伏しぬ、明日は母に面白き繪本をど約束してゝを樂みつゝ、熟睡したる六歳の末弟、母が學校通ひの袴にとて、新しく縫ひ給ひつゝありし袴の、明日は、唯紐をつくる計りとなれるを喜びつゝ夢に入りし九歳の弟等皆驚きさめて、何とは無く泣出しぬ。吾は之れを顧みて叱しぬ、去れど叱する人の目よりも既に涙はハラ〜と流落ちたるなり。母は我手を離れて、靜に死の枕に渡されたり、其なつかしき笑顔もいつくしみある聲も、再び見聞きする能はず。醫士は二人迄來りぬ去れど『どうもなりませんか』の間に和するに『どうもなりませんな』

の答を以てするより外は、何事をも爲すの道無かりき。
 秋雨の夜、孤燈の下、悲しみの山あらば吾は其巔に在り、悲しみの海
 あらば吾其底に沈みて、徒らに遺骸をまもれる心如何なりしか、翌
 日に至り新しき柩、新しき位牌はつくられ、母の遺骸は柩に收めら
 れ、位牌に『澄月圓心大姉』の六字は記されぬ。實に母は澄める月の
 如き圓なる心を持たせ給ひき、吾が母を失ひて後得たる満足は此六
 字の改名のみ、最早や世に満足てふことを求む可らざる身とはな
 れり。

庭前の菊花と屋後の柿とは靈前に捧げられぬ。

● 峠 の 宿

(上)

北陸鐵道は暴風雨の爲めに大なる損害を蒙り、處々不通となりぬ。
 開通迄は一週間を待たざる可らず、去れば吾れは東海道線米原より
 柳ヶ瀬まで進みて、これより徒歩近江と越前の境なる三國の險を踏
 まざる可らず、椿江にて僅に食事を爲し、剛力を雇ひ、椿江峠は思
 の外に容易く越して、椽の木峠にかゝれるに、此方より越ゆるは樂
 なりと聞きしも、椿江に比べては左のみ樂にはあらず、疲れたる足
 なかくくに重ければ、峠の巔なる民家に暫く休みて、茶などすゝめ

居たるに、旅商人らしきもの、道者らしきもの、田舎教員らしきもの、学生の如きもの、土木官吏の如きもの、一隊二隊其前を過ぎ行く人足の全く絶へたる頃、「オーイ」と二聲ばかり聞へて、年の頃廿七八、色淺黒く、眼の鋭く、鼻筋高く、口元しまりて、先づ女好きのすべき若者、草鞋掛にて、兩袒をぬき、手拭の向鉢巻、片手に猪口、片手に正宗の小壘を提げて、振り返りつゝ上り來りしが。佇立りて又下を見下ろし「オーイ、早くしねへか、へん馬鹿にしてやアがる、チヨツ惚助奴」と獨言ち、グイと一杯傾けて峠を下りてゆけり。其遙かあとから、上り來れるは女と男の二人連、女は三十二三、色蒼白く目鼻立も美しといふ處は無けれ、何處にか愛くるしきふしも

ありて、髪も亂れ、裾も無氣にグルリと褰げ、白湯卷一つに草鞋、脚絆甲掛けもせず、白い柔らかさうなる足へ、草鞋の紐の喰入れるか、底豆や踏出したる、如何にも苦しさに足を引摺りて歩み居れる様、純然の田舎婦とも見えす。男は四十恰好の、色黒き、目の細き、眉毛の尻邊下りといふやうなる、口の上の所々黒子ある、前の男が惚助と評したるも無理ならぬやうに思はれたり、之れも袒を脱ぎ、襯衣ばかりになりてはあれ、此男ばかりは、脚絆其他整然と旅の支度なり。男は何か頻りに女に話掛くれど、女は夫を五月蠅さうに、聞きては居るらしけれど、少しも返事とはせぬらし。其二人が峠を下りにかゝりたれば「空合も悪いからと」剛力の促すを待た

ず、吾も續いて下り行くに。昔は仲仙道の街道に當りて、左程にも
 あらざりけんを、瀛車の開通して以來、荒れ廢るゝにまかせたれば
 雪に崖は崩れ、路は山より押下す雨水に斷たれたるが上に、炭焼か
 んどて伐倒せる大木の、彼方此方に算を亂して横はりたれば、往來
 の人は是非とも之れを跨越へざる可らず。彼の女はと見るに果して
 行なやみつゝあり、男は手を助けてやうゝに下り行く、其前には
 磊々たる怪巖あり、崖の如く俄に路絶えたる處あり、兩側の山々は
 薄紅葉して景色いひ知らぬ迄美しかれど、雨さい少し降出でたれば
 之れを眺めん暇も無し。山の褶なせる處より瀑布は鞆鞆として落ち
 ぬ、塗り籠めたる、さては今より焼かんとしつゝある炭竈三ツ四ツ

あり。峠の漸く平らなる處に、溪河は矢を射るが如き勢をもて、白
 き泡沫を飛しつゝ流れ行く。此流れは徒歩涉りせざる可らず、彼の
 女は今渡らんとして、水に足を拂はれつゝ、呀と聲立て、打倒れぬ、
 正宗の小塚持ちて先に進みたる男の、遙に『オーイ〜』と猶ほ呼
 ぶ聲せり。

(下)

女の倒れたるを見て、驚きつゝ抱き起したる男は、其濡れたる袖、
 襦等を絞りてやりて、いと親切に其手を取りしが、水深き所なれば
 や、遂に背に負ひて渡しぬ。

未だ四時三十分ばかりなりしも、山間なると、雨の日なることにて四

邊は薄暗くなり行くに、先の宿も如何と思はれて、剛力に問ふに、
 此時を今二三町行けば、上板取下板取といふ處あり、下板取には知
 れる宿あり、瀛車の通はぬ内は、此邊での遊び場所、怪しの白粉臭
 き女も、大抵一ツ宿に五六人は居て、俺等も、峠越して五六里通ひ
 たる事あり。去れど此二三年來たりし事無ければ、今は如何になれ
 るか知らずといふ。椿江より通ひしあるかと問へば、命と契りし女
 の御座りましてと笑ふ。して、其女は今どうなりしと返せば、子
 持になつてからは見る影も無けれど、男大事に善く働いて呉れます
 ると涎をすゝる。恁く見るからは、炭竈より這出せし山男と銘うつ
 て、都さらば見世物にしてからが、錢になる可き代物も、情てふ道

は知りつゝ、唯さい難む山路を、幾夜通ひて、今は子さい設くる中
 どまではなりけん、思の外に仕合せなる男よと思ひつゝ下板取に着
 く。下板取といへるは、此邊での遊場所なりしといへば、少くも御
 酒肴としるしたる障子たてかけて、軒先に赤く湯煮たる脚少なの章
 魚をつるし、辨慶に川魚の乾したるを挿し、大皿に焼豆腐芋大根な
 ど煮たるを盛れる位の家はあるべしと思ひしに、去る家の無なきの
 みか、宿屋めきたる處も無し、剛力の先に立ちて入れる家は、二階
 建にして普請も他に比べては新しきやうなるに、先づ此家ならばと
 思ひしものを、老婆の出で來りて、早や四ヶ月前鑑札を納めれば
 折角なれどお宿はならず、此隣へ行かせ給へと斷はられ、其左隣に

宿を取る事とし、奥の谷川に臨みたる八疊の上等間に案内されて、漸くに足踏み延したれど、上等といへるは名のみ、疊の縁は破れ、表は黒く光り、天井眞黒に煤けて、障子の紙も穴いと多し。床の間にかけたる幅には怪しき神の名を記して、欄間に刻みたる透彫は、松の枝より大蛇の首のみ出して、梅に宿れる鶯を一番にせんとし、其下には羽の雁か鴨か鶯鳥か悠々として水に浮べる圖様なり。何の考案何の意匠といふを知らず。廊下一つ隔て、四疊半の座敷あり、入口の方に隣りて六疊程の座敷あり。四疊半には男女三人の客あり六疊には旅僧と土木官吏二人宿れり。男女三人の客……若しや彼の三人には非ずやと思ひ出すと共に、其話に耳を傾けたり。去れ

ど食事も濟み湯にも入る迄何事もなく話聲もせず、一時間二時間漸く話聲は低きよう次第に高くなり來て、何をか言ひ争ふが如し、女の泣く聲もしたり。『大概にしろ、なんだ訴へりやアいゝや、俺が好きこのんで連出したんじやアねへや、ナニ大きい聲をしたつていゝや、夫れ程大事な噂なら袋でもいれてよ、腰へでもぶら下げて歩いてりやアいゝや、何時間男をした證據がある、あるから言つて見ろ、ナニ二人で逃げたのが證據だつてへんか、誰が逃げた、エ誰れが逃げたよ、俺が彦根へ遊びに行くつて言つたら、是非一緒に行きたいから、迷惑でも一所に連れてつて呉れるつてへだらふ、然しうりや亭主もある身でよ、ろんち事をしちやア悪い、行くなら亭主と行

くがい、ツてよ、俺ア振もぎつて出發ちやつたんだ、夫れを聞かぬへで追掛けて來やつたんじやアねへか、面白くもねへ。よしんば間男だつたつてどうするんだ、藉も入つて居るんじやあるめへ。女日照がしやアしめへし。夫れ程踏付られても馬鹿な面アして、尻を追つて騒ぎ廻る他人の女房を奪らなくつたつて。へん誰だと思つてやアがるんでへ。ナニ靜に話をして呉れ、地聲でへ、黙つてやがれ』と言れるは彼の正宗の小壘を手にせる男の聲なり。三人の關係は臙氣ながらも察せられたり、彼の黒子男は此若者に其妻を奪はれたるを如何にして捕へ、今其家に歸らんとする處なるべし。去れど若者の此毒言を甘んじ、且つ猶ほ一宿に枕を並べんとせる男の意氣

地なさよ。若者の托言は勿論信ずるの要なし、女は今如何にしつゝあるか、身の過を悔ひて泣けるか、情夫に別れざる可らざるを怨みて泣けるか。程無く吾は疲れて夢に入れり。翌朝宿より人夫を雇ひ、出立せんとせし時には、既に三人共宿にあらず。宿の主人は打笑ひて『彼の女は今庄の茶屋の女房で御座りますが、よく度々男どつツ走るんで』と説明を加へぬ。憐れなる女よ、肉の思にのみ總てを捧げて、惡魔の導きにまかするの行末は如何なるらん。彼の亭主野郎も野郎だ、何人貰つても悉皆男をこせいで逃げられるんだ、今度のが五人目だつてへじやアねへか』今出立せんと草鞋を穿きつゝありし土木官吏は嘲笑へぬ。慙く彼は世に嘲け

られ、妻には既に五人迄も背かれたるに、猶懲りずまに逃ぐるを追ひ走れるを捕へ共に家に歸りて何をか楽しまんとする。彼の男の如きは女を愛するの道を知らぬ者ならずや、皮相の愛は加はるに従つて、却つて五月蠅しと語れる女あるを聞かずや。

雨漸く收りて、朝風身に寒く、人足の鼻唄訛ありて、都はいよゝゝ遙けくなり行くめり。

◎父と子

今丁度ノレンチメールが着いて、一時非常に忙しかつた。余はボックス(私書函)Aの擔任で、夫々區分を終つて、雑役に引渡して一

吹やつし居た時であつた。

『君一寸外を見給へ、實に可憐どうじやないか』

余と外國係に書記といふ肩書を共にした、山住辰雄といふ青年が恁呼掛けたので、フト窓から外を見た。局の向は日本郵船會社の倉庫がぶらりと並んで居て、菰包の荷が山のやうに積上げてあつて、人が足が寄り合つて走せ廻つて居る、往來は馬や車や人や、見る目も綾に、左し右し、夫れはく實に生存競争の如何に劇甚であるかを知るに足る光景、先づ血と尿物とを見ぬ戰場であるのだ、其倉庫と往來との間に植ゑられた數株の柳も見る影無く疲せて、塵埃に葉の色まで白くあつて幹は僅に割竹で鎧はれて、僅に枯死を免れては居る

のであるが、時折は馬の蹄で根の動くまで蹴付けられたり、扱ては荷を積んだ車の梶棒で、折れよとばかり衝當てられるのである。今余が外を見ると倉庫の入口より少し右へ離れて、一番丈の高く、一番痩せて葉の少い柳の下に、悄然乳香兒を抱いて立つて居る男がある、年の頃は三十五六でもあらふか、頭髪も髯鬚も蓬々と亂れて、色は日にやけ黒み、顴骨高く張り、目は低く窪み、いと卑げなる鼻、世を怨み、人を怨み、怨み盡せる其心の不平を、吐かんとして吐き得ざる唇、瘦せ尖りたる腮、一見鬼氣に襲はるゝ程なるに、身に纏へる袴は縞柄も分かね迄汚れ垢染み、如何なるものをや包める背に傘と共に絞りし風呂敷を負ひ、左の手には當歳程なる乳香兒を搔抱

き、左の手に護謨管を附せる乳壘に、怪げなる白き水を入れたるを持ちて、今兒の泣叫くに狼狽へつゝ、ろを含ませんとはせるなり。『あれか、ム、實に可憫さうだ、兒の瘦せてるとは非常だね、根ツからの乞食でも無からふ』余は早や惻隱の心動きて、力及ば、飛付きても救ひ取り、養はんものをもと思ひつゝ、慙く言ひて同僚の如何に思ひ居るらんと願望れば、彼れも同じ心に涙さいさしぐみつ。『勿論僕の見るところでは近來だ、新參だ、女房に死なれたのであらふか、又は亭主と子供を捨て、或事情の下に、他へ去つてしまつた、或は情夫と共に走つた。マ事情は多く其範圍内を出でずとして、

去らでも貧なるべき彼、乳呑兒を托す可き家なく、力となる可き縁者も無く、去ればとて乳呑兒を抱きて、如何にして麩麩を得るの道に就かん。終に彼は愛兒の爲めに憐れ乞食となりて、路頭に他の憫を乞ふ。實に僕は彼の飢に泣く兒よりもだ、彼の泣かずして之れを抱ける父を憫れむよ。一寸待ち給へ僕は少し恵んでやるから』

余は同情の念禁ずる事が出来なかつた、あはて、ポケットより白銅一個摺み出して。

『オ君、じゃ之れを僕もやる、序に遣つ来て呉れ給へ』

山住は黙つて諾いて、夫れを受取つて、出て往つたが、聽て彼の男

の手へ恵んで得々として歸つて來た。余の薄給官吏として、白銅一個は決して些々たるものでないが、所謂貧女の一燈で、實に善い事をした、恵を人に施した時位愉快は無いと思ひながら。

『君どうだつた喜んだらう』

『ア非常に喜んで居つたよ、全く妻に死なれたんで、彼の男は岡山のものなので、今度岡山へ歸るんださうだ、』

『さうか、岡山といや随分遠いさ、可憫さうは』

山住と余とは共に大慈善を爲したるかの如く、満足して互に相語つて居る處へ、首席書記の香川といふ男が靴音高くやつて來て。

『なんだ、大分面白さうだな、ナニ乞食に二人で十錢恵んだ、フン

道理で空合が少し變になつたと思つた、エ乞食は乞食だが乞食の種類が違ふ、ハ、アヒヤア新造の女乞食だらふ、まだ居る……どれ、なんだ彼の乞食か馬鹿にして居るせ、君等の坊ちゃんにも恐入るね、彼奴ア詐欺乞食、ム兒を種に君等のやうな坊ちゃんや、世間知らずの好人物を釣つて歩くんだ、妻に死なれまして、岡出まで歸りますのに旅費は無し、御覽の通り乳呑兒を抱いて居りましてとやるんだアハ……どうだ僕にも汁粉二三杯戴して下さりませ、後生で御座います、助りますすがワハ……』

余と山住とは顔を見合して驚いた、妻に死なれ……岡山に歸る……果して……果して。

『ヤそりや君實際か。』

『實際とも昨日僕の近所で三四軒もやられてる、處が八百屋の話に依ると三月ばかり前から深川邊を歩いてたさうだ、尤も其頃は三歳ばかりの兒を脊負ひ歩いたんださうだ。畜生ツあの通り甘くやつてやがる、見給へ僕が來てから五六人やられてる、ソラあの隠居もやつた、あの新造も……ア、官吏なんか馬鹿しくなる、一日少くも二圓三圓位にはなるだらふ、割のいゝ商法さね。三月前より東京に居る、然も同じ事を言つて居る、其頃は三歳ばかりの兒、實に奇怪千萬である。』

『妙だな、すると彼奴の女房へのも死なゝいで居るんだね、奴子』

供が二三人あるんだね。

山住の此問に對する答は、實に豫想外の更に外であつた。

「子供が二三人、ア……、そんな少いんじゃない、少くも三四十人はあるさうだ、全体を數へたら更に多いだらふ。エそんな筈が無い、そりや勿論自分の兒じやないサ、さうサ他人の兒だ。夫れを皆賃錢を拂つて借出して來るんだ、種々相場があるさうだ、先づ瘦つてけて、白瘡か濕瘡でも出來て居て、ビィ〜鳴く、是れが上等なんだ、オイ鳴聲の好いのよしてくんなどか何とか、小鳥でも買うやうな事を言つて借りて出て行く。肥つて居て、泣下手で、唯もうぐう〜眠る、少し位い、泣くな〜とか何とか言

ひながら、振つても叩いても泣かない、こんなのは下等だ、隨つて相場が安い、上が三十錢すりや十錢から八錢なんていふんだ。ナニ嘘だ、嘘な事があるか、歐米でも一時は専ら流行したさうだが、今じやすたつて、専ら醫者を雇つて不具製造をやつて居る、マヅ跛、蹙、盲目んな種類だが、夫れは〜醫學を應用して巧にやる、中には實に奇妙奇体烈な不具となつて出掛けるのもあるが、一日稼いで歸ると、スツカリ素の立派な体になつて、贅澤なまねをして遊び廻つてるさうだ。今に日本でも乞食製造株式會社なんかつてへのが出來るだらふアハ……

* * * * *

其翌年の春も彌生、向嶋は未だ二三日早いから野の花は今が見頃といふ日曜日、家内中花見に出て自分は其留守居だ。イヤ留守居位腹の立つものは無い、靜に讀書に耽つて居ると、障子の穴から猫が飛込む。表の入口案内を乞ふから出て見ると、此番地何某といふ人は御存知が無いかなど、尋ねられる。然し誠に長閑な好い日和で、障子には日が射して、鉢植の根上り松が、一ぱいに影を寫して居る。處へ憐れな細い聲をして、七ツか八ツ位の男の子を背負つて、入つて來た男乞食がある。能く其顔を見ると彼の郵船會社の倉庫の前に立つて居た男である、ろして言草が同一である、又も自分を欺かうとし來てたのであつた。然し自分は彼れを咎め得なかつた、白銅一

個を恵んで歸したのであるが、夫れは何故であつたか未だに解することが出來なう。

有明月終

音問員

明治三十四年六月廿五日印刷

明治三十四年六月廿五日印刷
明治三十四年六月廿八日發行

定價金三十五錢

郵税金四錢



著作權所有

編輯兼
發行者

上村才六

東京市麴町區三番町五十三番地

印刷者

岡田鍊一

東京市京橋區南紺屋町廿四番地

印刷所

岡田印刷所

東京市京橋區南紺屋町廿四番地

發行所

東京市麴町區
三番町五十三番地

鳴阜書院

鳴臯書院出版圖書目錄

荒木鷺泉 今井綠泉合著

社會と文學

全一冊 定價金拾五錢
郵税金貳錢

流暢の筆明快の文社會の上下を通觀し文學の表裏を洞察し富豪を叱咤し貧弱を慰撫し瀛車室の平等を説き寄席の改良を論し其妙宛かも麻姑を倩ふて癢處を搔くの想あり

罵郎著

捫 丑 録

全一冊 定價金拾五錢
郵税金貳錢

肥馬に鞭ち輕裘を著くるにあらすんは天下の事得て議すへからさるか曰否罵郎久しく事に操觚に従ふ情熱して大罵り眼冷かにして頻りに嘲る立意警拔運筆縱橫風雲を驅り龍蛇を走らす要するに曠々者流と其撰を異にするものあり面も其古英雄を以て任するの當と當らざるは讀者之を卷中に問へ

武田原水著

各現代の人物

全一冊 定價金貳拾錢

一隻の眼能く世局の趨勢を看取し一管の筆正に英傑の心事を描出す
兎起鵲落の勢あり龍嘯虎鬪の慨あり案を拍て覺へす快哉を呼はしむ
當世に志を抱く之士豈に一讀せずして己むへけんや
泉物外著

列傳 禪學小史

全一冊 定價金拾五錢

禪を説き禪の種類を別ち系統と分派とを明かにし進んで釋迦牟尼よ
り北宗神秀に至るまで六十餘家の列傳を叙し以て頓悟の機會を指示
せり眞に初學者參禪の寶筏なり
中山古洞挿畫 上村賣劍題詞 伊藤阿山著

政治小説 東洋の波瀾

全一冊 定價金貳拾五錢
紙數二百三十頁美本

男子が君國に報ゆるの心事を寫して海天萬里羈旅の辛酸に及び女兒
が良人を思ふの情緒を描いて燈火半宵孤閨の幽寂に到る艶麗の筆沈

痛の想人をして喜はしめ人をして怒らしめ又人をして笑ひ且つ悲ま
しむるもの此書あり而も其些子兒だも卑猥に涉らざるは社會上下の
家庭に入りて何人の伴侶たるをも得へし
杏園 山田正隆著

立身要訣 勤學捷徑

全一冊 正價金貳拾五錢
郵稅金四錢

口繪 當代の名士十八名及び世界の名勝十四景
を美麗なる十六頁の色摺寫眞版とせり
題して勤學捷徑といふ如何に就學者の必携必讀珍書たるかを見よ是
れ其記載する所悉く學生勤學の要訣にして讀書作文作詩作歌の法は
素より和文漢文英文に至るまで其譯法を親切明了に解釋し學生をし
て容易に就學の方針と成業の順序とを知らしむ獨り就學者の至寶た
るのみならず又教育授業上の參考に資する所尠なからず

作文秘訣

全一冊 定價金拾五錢
郵稅金四錢

作文秘訣は、現今の子弟をして、作文の方針を知らしめんが爲に著は
す所の秘訣書にして、紛々たる今日の文體中、少年の撰び取るべき文
體を論定し、其他、作文の方法心得等を冊餘章に分説したる珍書なり

●附録 〔填字、用語集、添削、對句、假字の本字、文學瑣談、填字の答、戲に學徒に示す〕 四

百人一首通解

全一冊 定價金拾五錢 郵税金四錢

百人一首は中納言藤原定家卿の選べるものにて、上は尊き雲の上人より、下は賤しき海人の子に至るまで誰れ知らざるものなく、幾百年の久しき世間賞翫して措かず、然れども未だ其歌の眞味を知るものは、極めて稀なるが如し、當院茲に文學士渡邊又次郎氏外斯道の達人に計りて、本書を發行せり、本書は文字平易にして婦女幼童にも了解するを得べく、殊に作歌せんとする者にありては、無上の好資料たるべし、又各歌の初めに一々詠者の略傳を附したれば、大に便利あり

記事文範

全一冊 定價金十五錢 郵税金四錢

本書は少年の記事文を作らんとする者のために、手本を示すものなり。文題は、修身歴史山河遊覽等に分ち、作者は古來屈指の文章家に探り、各題ともに、批評を加へ、標記には、作者の注意すべき件々を示し、市上に流布する赤本類とは、天地黑白の差違あるを確信す。

形容語及故事

全一冊 定價金十五錢 郵税金四錢

●口繪 小堀鞞音氏筆具原益軒遊山の圖
名は形容語と故事となれども、實は、和漢美文の精粹を集め、俗諺と漢語に故事解釋出典を示し、昆山の玉、桂林の枝の、燦然鬱然として雙美を争ふ如し文を作る者一本を坐右にねけば文思涌泉の如く、筆端の飛動すること、春蠶の絲を吐く若く、春花秋月の妍、崇山邃谷の幽、只心のまゝならん。殊にイロハに分類し、索引に使したれば、物を囊中に探るよりも易かるべし

書牘文範

全一冊 定價金拾五錢 郵税金四錢

●口繪 太田蜀山人の圖 中村不折氏筆
日常親族朋友の間に吉凶相慶し、風月相賞玩し、消息を通じ、質問照會するより、商業上の取引注文等、書牘文は直接に益を爲すものなし。されば、人たるもの、他の美文に通せざるも、書牘文に通せざるべからざる必要あり。これ本編の出る主眼なり。本編は、世の複雑となり、百事繁忙を極むる社會にありて、吾人の執るべき書牘文の方針を論究せるものにして、組織上文體上。大に從來の書牘文と其軌を

異にし、學理と實際上より新機軸を出したれば、如何ある初學の人に
も丁解すべく、實例は適切にして、附録の書牘文談の如きは、皆少年
の讀みて洪益ある文字なり。

現廿八大家文鈔

全壹冊 定價金十五錢
郵稅金四錢

●口繪 橘南溪不知火を見る圖 尾竹々坡筆
此書は現今文壇に於て鏘々たる二十八大家の金篇玉什を撰び少年作
者のために文章の軌範を示し併せて明治の文華を發揚するの微意に
出たるものにして其光彩の燦然たる恰も春郊の花、秋夜の月に對
するか如く讀者を益する蓋尠なからざるへし

遊記文範

全一冊 定價金拾五錢
郵稅金四錢

山に行き川に遊び、神社に參し佛閣に養し、或は蕭條たる古戰場を訪
ひ、或は渺茫たる波濤を航す。文無くして可ならんや、本書は實に其
軌範を示す者にして、欄を分ちて觀花、名勝古跡、驛路村郊、社寺、溫
泉、山岳、巖石、溪谷、瀑布、河川、湖畔、海岸の、十一となし、古今名家
の妙文佳作五十有餘を掲げ以て其則る可を知らしむ。一度之を繕け
ば、身は雲影水聲嵐色波光中の人と爲り、雷に文を作る上に於て益を

得るのみならず、坐ながらにして天下の名區勝地に遊ぶの想あらん

十一月ヶ月文範

上下二冊 定價各金拾五錢
上卷三版印刷中

滔々たる天下の學生、誇張華飾の虛文を作る惡風に溺れて、實用を忘
る。豈普通教育の本旨ならんや。この弊を矯正せんとして、先づ作文
の大方針を示すもの、即ち此編なり。座右眼前の事物を取りて、悉
く作文の料となし、高きに登るに卑き自らする楷梯となす。若し夫
れこれ等の諸題に熟する時は、天下の森羅萬象一として文章を成さ
ざるなく修辭達意はたい心のまゝならん

算數・奇觀

全一冊 插圖數十枚
定價金拾五錢
郵稅金四錢

本書は凡有りとあらゆる算數學に關したる遊戯的奇觀數百を網羅
せるものにて其奇々妙々なるは一々之を言ひ盡すべからず年當り
の法、野引き法、方陣、圓陣、裁ち紙、賽數倍増し、時計、寒暖計、
西洋日本尺度、乗除速算法、七數九數の奇なる性質、など、高尚な
るは代數の域に入り、卑きは四則に及ぶまで、一題は一題より奇な
り、若し一冊を購ひて、學友と遊戯する媒となさば、しらすしらす
算數の妙趣を悟り得べし、細目録はこゝに略す

少年世界記者 巖谷漣山人序
 少國民記者 竹内紅蓮編
 尾竹國觀 尾竹竹坡畫
 口繪

には「白扇倒懸東海天」と古人も歌へりし
 富岳の絶景を始め幾度見ても見事か
 下の奇勝八頁を以てし附録には滑稽短篇
 小説「讀岐の手洗ひ鬼」を以てしたり

小哲學 一名笑林

此書は、無邪氣にして面白をかしく、輕妙にして罪なき滑稽寸話を多く集めたり、第一、編者が記憶に止まりて、今日までも忘れ得ざりしもの。第二、此書を編せんが爲め新に師友を訪ふて聞き得たりしもの。第三、少國民の笑林中より最も妙味あるものを拔萃したるもの。此三者すべて六百有餘編ありき、其中の精の精、萃の萃をぬきて僅に十分の一を得たり、故に叩て金玉鏘々響あるべく眞のエーモルとして文學上の價值も決して少からざるべきを想ふ、

新考物

愉快なる遊の内知らず識らず益を得るは考物なり本書は全紙數八十七頁にして、天文、地理、歴史、動物、植物、人事、支體衣食、器具、雜門等の各種に分ちて一々答を出し附録には諸皇族の芳名其他十數種を添えたり此種の書は當院發刊の者の外求めて他にあらざる所也

正續 定價各金五錢
 二冊 郵稅 金貳錢
 續編印刷中

雜誌の部

少國民

少年雜誌界の大王と稱せらるる、少國民は今後一層意を紙面に注ぎ、着々改善の途を講し、益々少年諸君の爲めに盡瘁せんことを期す、夫の無意無主義なる營利的雜誌と同視すること勿れ、本誌は毎號添ふるに精巧なる寫眞版の口繪數葉を以てし、記事には、歴史あり文學あり、理科あり、化學あり、修身あり、冒險談あり、其他美術あり、教育あり、一として少年に裨益を與へざるはなし、

毎月二回 一日十五
 日發行 定價 一冊八錢十二冊
 九十錢 郵稅一冊一錢宛

新詩綜

◎新詩綜は明治の詩壇上如何に好評を博し如何に尊重せられしか今更贅するの要なし
 編次の概要を擧ぐれば臺閣江湖諸名流の雄篇傑作は詩壇の泰斗たる森槐南先生が妍麗雋妙の筆を以て剴切なる評隲を付し且つ各其の小

◎毎月一回 定價金拾五錢
 六部前金八拾五錢 十二部前金壹圓七拾錢
 ◎郵稅五厘

傳逸事を綴られたれば諸家の詩品由て定まるべく亦昭代の詩話と
 して之を讀むへし雜録は寧齋野口先生臨所北條先生裳川岩溪先生天
 髓久保先生賣劍上村先生等が筆になるも寄稿中より其秀逸なるもの
 足るべく滄海遺珠の評正を加たれば何れも異彩を放たざるなし
 擇み且つ懇切なる評正を加たれば卓拔なる詩眼を以て平易に杜詩の
 附録杜詩諺解の如きは槐南先生が卓拔なる詩眼を以て平易に杜詩の
 蘊奥を發揮せられ一讀の下親しく講筵に侍するの思あり

新 思 潮

毎月五日發行 ○定價壹部金
 八錢郵稅壹錢壹ヶ月分郵稅
 共金六錢半ヶ年分五十一錢

『新思潮』は、高きうぶ聲を以て、新たに生れ出づべき、青年の好文
 學雜誌なり『新思潮』は、天下の秀才を一堂に集め、自由を貴び公平を
 重んずる一大共和國あり『新思潮』は、最、投稿を歓迎す、これを評撰
 すべく數人の親切なる記者をもてり『新思潮』は、其前三分の一に於
 て、諸大家が筆に成る『和歌』『俳句』『漢詩』『英詩』等其他の有益
 なる評釋を掲載すると同時に諸名流の美文韻文等を紹介す●『新思
 潮』は、其後三分の二を幾多青年諸君の投書の爲に費し且數人の記
 者が叮嚀なる評正を試むべし

14